

246  
17



始







新  
經濟學  
說

シャルル・チード著  
金井經司譯述

事業之日本社出版部發行

大正  
14. 10. 21  
内交



## 序

フランスといふ國は、元來、社會連帶思想の本場である。その傾向を最も哲學的に表はしてゐるのは、デュルケーム及びその一派の社會學者である。經濟學界におけるこの傾向の代表者として、吾々はシャル・チードを見出す。デュルケームは、その『分業論』に依つて、連帶思想に極めて獨創的な哲學上の基礎を與へた。連帶思想の發生は必ずしも近代の事ではなく、遠くアリストテレースにその端を發してゐるが、分業的見地からの新しき根據を附與した點において、デュルケームは重大なる貢獻をなしてゐる學者だと言はねばならぬ。

これに反して、チードは何等獨創的なものを此傾向の上に附與してはゐない。彼は由來極めて穩健なる思想の所有者である。寧ろ彼は、その穩健なる思想傾向の爲に穩健なる結果より有し得ないソリダリストになつてゐたとも考へられるのである。此點は、彼の短所であつたと同時に、又尊敬すべき長所でもあつた。何



故ならば經濟學界に於ける種々なる潮流を、比較的公平に批判し紹介するといふ事は、チードの如き穩健にして独自の主張に強く煩らはされない學者にして、始めて可能なことだからである。彼の大著『經濟學說史』を通讀し、且つソリダリストの部分を瞥見すれば、この長所と短所とが明かに觀取されるであらう。

チードは永くソロボンヌに經濟學の正教授をしてゐたフランス經濟學界の耆宿である。今では引退して専ら消費組合の研究に従事し、フランス大學にその講義をついでゐる。

今此處に『最近經濟學說』として諸君に提供しやうとするものは、『經濟學說史』の中の第五編以下の譯述である。『經濟學說史』が經濟學界において稀有の文献たることは敢て呶々する必要もあるまい。經濟學を歴史的に觀察し、その展開を究めんとする人々にとつて、『經濟學說史』は欠くべからざる名著である。然し醫學の歴史的展開が、現代の醫術と直接的交渉を有しない如く、専門研究者でない一般世人には、『經濟學說史』の前半はあまり興味を喚起しまいと思はれる。それは今日の經濟學說と直接的交渉を有してゐないから。

然るに此處に紹介する部分(即ち第五編以下)は、オースタリア學派以來最近に至る經濟學說を集め、これを穩健公平に批判し解剖したもので、何人も一讀すべき價值のあるものだと言つて過言でなからう。最近における經濟學界の潮流を瞥見すべく、本書の如きは比較的偏頗の嫌のないものである。

たい憾むらくは、僕自身この譯述に充分なる時間と勞力を投じ得なかつたことである。種々なる身邊の事情は、忽々の間に本書を執筆するの餘儀なき結果を招いた。従つて譯述についても校正についても多くの知友の勞力を借りた。この點は自ら不満に堪えないところであるが、他日改版の機會を見て充分なる訂正を施さうと思ふ。尙、本書に引用されてゐる學者の人名中、ヨーロッパ語をそのまゝ入れてある箇所も二三に止らない。これは、最初執筆の際、書名と人名は原語のままにしておいたのであるが、印刷に際して急遽人名だけを片假名に換へることとした際、見落した爲に生じた現象である。人名の讀み方などにも、譯者の際の



こと故多少の誤謬もあらうと思ふ。これらについても大方の叱正を待つて訂正を加へたい。

大正十四年八月二十五日

金井 經 司

# 最近經濟學說 目次

緒論	……………	(一)
第一章 快樂論者	……………	(七)
一 古典學派の準復活	……………	(七)
二 心理學派	……………	(一七)
三 數理學派	……………	(三五)
四 快樂論派學說批評	……………	(五五)
第二章 地代の理論とその適用	……………	(七四)
一 地代の概念の理論的範圍	……………	(七五)
二 不勞所得の觀念と租税に依る收益の沒收	……………	(一〇四)
三 土地國有制	……………	(一三二)
四 收益の觀念の社會主義的延長	……………	(一五〇)



第三章 社會連帶論者

- 一 社會連帶論發生の因……………(一六九)
- 二 連帶論者の論文……………(一八二)
- 三 社會連帶學說の實際的適用……………(二〇〇)
- 四 連帶責任論批判……………(二一四)

第四章 無政府主義

- 一 スチルナーの哲學的無政府主義と自我の高調……………(二三六)
- 二 政治社會的無政府主義と權力に對する批判……………(二四三)
- 三 相互扶助と社會に就いての無政府主義的概念……………(二六七)
- 四 革命……………(二八四)
- 五 ボルシェビキの學說……………(二九六)

目次(終)

最近經濟學說

シヤール・ヂード著  
金井經司譯述

緒論

現代における經濟思想の特質を述べるに當つては、過去の經濟思想の根本的特徴を記述する際に感ずることのなかつた一種の躊躇を感ぜざるを得ない。何故といふに、吾々の眼前に展開され、今なほその進化をついけてゐる諸經濟思想の評價を、最も公平に黨派的見解に捉はれることなく行ふことは、頗る困難な仕事だからである。吾々の眼前において進化と發展をとげつゝある經濟思想は、時間的に相當な距離が出来てから後に、即ち次の時代においてのみ公平な評價を附さる



べきものだ。

しかし乍ら、最近の、即ち十九世紀末葉と二十世紀初頭における經濟思想は、四つの大きな特質的傾向を持つてゐるやうに思はれる。

(一) 第一は、理論的傾向が突然勢力を張つたことだ。歴史學派、國家社會主義者、基督教的社會主義者に躊躇なく閑却されて來た純理經濟學は、一八七二年頃、フランス、イギリス、オーストラリアに、同時にその著名な代表者を見出した。コンヂャック以來殆んど塵埃に委ねられてゐた觀念を再び取り出し、クルノー以來省みられなかつた數學的方法を用ひて、彼等は古典的理論の破損してまつた殿堂へ、價值の成立に關する巧妙な誘惑的概念を置きかへることに成功した。經濟科學の殆んど全範圍に亘るその適用は、日毎に益々豐饒な成果を示した。ワルラス、ヂエボンヌ、メンガアの後に引き續いて、アメリカ及びヨロッパ(しかしフランスを除く)の無數の學者は、この道を歩むやうになつた。圖式、代數式の巧緻な理論は、再び經濟學者の著書を満たしはじめた。リカルド以來聲價を失

した純理經濟學は、その昔の威容を再び見出した。激しい反對があつたにも拘らず、それは至るところで注意を集めた。經濟學上、その最近年間の最も著しい事實は、恐らくこの點であらう。

(二) 社會主義に、平行的に深刻な變化が行はれた。先づマルクス學派において、マルクスの觀念が變化を受けた。社會主義者はブルジョワ經濟學に、第四階級經濟學を以つて對抗しやうとする主張を捨てた。ソレルは、社會主義を科學に換へるといふ陳腐な觀念を棄てる必要がある、と論じてゐる。事實において、フランスの組合運動派、ドイツの修正派社會主義者<sup>レヴェイヂョニスト</sup>は、マーシャル、バレットオ、ベエム、バヴェルクなどの科學的觀念を、大なり小なりに好感をもつて採り入れてゐる。それは、しかし、それ以上の勢力を以て社會主義の社會的及び政治的要求に専念するためであつた。總同盟罷業、勞働組合、消費組合の創設などに携はる人々は、剩餘價值の理論に無關心となるに従つてそれらのものを多く吸収した。更に彼等の中のあるもの——土地の國有を主張するもの——は、特に古典的な理論、即ち



「地代理論」に立脚して、自由主義と社會主義との間に一種の融和を試みてゐるのが見られる。

(三) これは社會主義に就いて記し得る唯一の變化ではない。共產主義が労働階級に瀰漫せしめたものは、權力的、中央集權的觀念であつた。大きな政黨としての共產主義の團體は、若干の國にあつては、立法事業乃至政府に參與して、この特質を更に明瞭にあらはすやうになつた。然し古い革命的、個人主義的精神は常に活潑で、特にラテン民族國家に於てはその結果に危惧の感を抱かしむるものがある。斯くして吾々は労働階級に、自由主義の不思議な再生を目撃するのである。勿論、その自由主義はそれを創設した者のそれとは異なり、辛辣であり、激越であつた。無論、アダム・スミスやバスターなどは、それを自由主義でないこと否認するであらう。また労働階級自らも、スミス、バスターの自由主義學說との混同を避けるために、絶對自由主義的の形容語を附してゐるが、しかし矢張り古來の自由主義に根據を有してゐることは疑ひない。絶對自由主義的、即ち無政府主

義的傾向は、既に労働者の國際運動において顯著であつたが、遂に段々と深い根を労働階級に下ろすに至つた。——そして、それはフランス及びイタリーにおける最近の労働組合運動にその痕跡を残してゐる。同時に有閑階級の多くの著者の間には、一種の哲學的及び精神的無政府主義があらはれて來た。思ふに、これは個人主義の復活を豫言するものであらう。

(四) 個人主義及び社會主義のこれらの變化を前にして、中間的學說即ち國家社會主義も同じく變化を受けた。すくなくともフランスにおいては、連帶責任主義となつた。それは國家の干涉に新たな根柢を與へ、且つ同時にその干涉を正當なる限界内に制限して、合理化しやうと試み、更に進んでは個人主義と社會主義とを綜合せしめやうとしてゐる。

これらの大きな潮流こそ吾々が此處に描出しやうと試みるものに外ならぬ。そして、これ等のものを最近經濟學說の題目で此處に集めたのである。吾々はこれ



らのものを、その發生時期よりも（發生時期の上から見れば、可なり遠くへ溯るものもある）古い理論の再現として復活した努力を強調しやうといふ意味において取扱つた。恐らく——他の學問の範圍から今日普通に使はれてゐる名稱を借りて——それらのものを、近代主義的學說と形容し得ないこともないと思ふが、只非常に雜多であり、且つその間に時期的連鎖を有してゐるに過ぎぬ概念を、餘りに特質的な意味を有する言葉のもとに分類するといふことは、聊か大膽すぎると思はれたから、吾々はこれを避けることにしたまでである。

## 第一章 快樂論者

### 一 古典學派の準復活

この新たな學說をその眞實な位置に置く爲には歴史學派に立ち歸る必要がある。この學派は特に方法論的見地に立つて古典學派を批評し、且つ恒定的及び宇宙的なる所謂自然法則に對する信念に侮蔑を加へて抛擲し、斯くの如きものゝ上に一つの科學、即ち一般的命題を建てる可能性を否定した。即ち經濟學を還元して一種の觀察事象分類法とした。

思想の歴史に時を測る振子の運動が、抽象的方法にその幸福なる時を再び齎らすと云ふ事は豫想さる可き事であつた。而もこの事は誤りもなく起つた。丁度、歴史派學說がその極盛時に達した時、即ち一八七二——一八七四年頃、若干の著



名な經濟學者がオホスタリア、英國、スイス、米國に同時に輩出し、經濟學の爲に正確科學、即ち彼等の言葉を借りて云へば、純粹經濟學の地位を築き上げる權利を堂々と求めて來た。容易に考へられるやうに、この主張は歴史學派、及び新古典學派の驍將との間、就中シユモラー教授とカアル・メンガー教授との間に激しい議論を惹き起した。

この新たな學派は次の如き性質を有する。即ち彼等は、この科學を立脚せしめ得る最も明らかなる原則を求めやうとし、それを總ての人が快樂を求め、苦痛を避け、且つ一切の環境中にあつて、後者の最少量をもつて前者の最大量を得やうとすると云ふ事實に見出した(註)。云ふ迄もなく斯の如く非常に重大なる事實は古典經濟學者の眼を逃れることはなかつたのであつた——且つそれはまた「最少努力の原理」として其の全本質を示してゐるのであつて、單なる經濟事實の域を非常に越えてゐるものである——。彼等はそれを極めて簡單に個人的利益と呼び、今日われは快樂論的原理 (Principe hedonistique 即ち希臘語 *hedonè*、快樂、

悅樂より來る)と呼ばれてゐる。こゝから之等の二つの學派に我々が與へた學派名が生れた。

註「次ぎに述ぶる理論は全體、快樂と苦痛の計算に立脚し、經濟學の對象は可及的最少苦痛をもつて可及的<sup>1</sup>最大快樂を獲得して實現され得る幸福の最大量を決定するにある。(スタンレー・ザエホンス *History of political economy*.)

この學派は人の行爲を決定し得る總ての動因を只一つに還元してゐるが、其ために他の總てを否定する積りではない事は確實である。只その主張するところは一切の正確科學の成立を可能ならしむる抽象化使用の權利、研究對象要素以外の總ての他の要素を研究範圍から除外する權利を有しやうと云ふにある。古典論者<sup>2</sup>の間に深い憫笑を誘致した經濟人 (*Homo economicus*) は再び昔日の面目を新にし更に簡單となつた。それは略圖的人間である。人は機械學の論文の挿繪のやうに、矢に依つて示さるゝ力以上のものとしては考察されてゐない。問題はその相互間の關係乃至は外界に對するその反動から依つて發生するものを決定するにある。



この學派は次に述べるやうに、また殆ど同一なる結論、即ち絶對的自由競争は各個人に對し最大量の幸福を齎すと云ふ結論に到達し、後に記す如き保留を除けば、此學派は此點に就いても古典學派の偉大なる傳統を繼承してゐる。

如上の點に依つて、此新たな學派は寧ろ古い古典學派に共鳴的態度を持し、後者に對しては、子としての一種の愛情をさへ示してゐる。(註)

註、「古典經濟學者の錯誤は、云はゞ一切の科學の兒童期の普通の疾患に過ぎない」(ヘム・パヴェル  
の *The Austrian Economists*, "American Academy of Political and Social Science" 一八九一年一月  
號所載)

然し此學派は、古典學派にそれは後者が正路を誤つたと云ふ點ではなく——前者も殆ど同じ結論に達してゐるので——後者が自ら主張したところを證明する事を知らず、且つ單なる循環論に過ぎない理論に安易なる満足を感じて來たと云ふ事にある。斯くの如きは就中古典學派が因果關係を屢々果が因となり得、その因が果となると云ふ事を理解せず、築き上げやうとした時現はれてゐる。研究對象

は現象間の關係若しくは劃一性に止めて満足す可きであつて如何なるものが因であり、如何なるものが果であるかを知らうとする如き無益なる研究は拋棄す可きである。

「經濟科學の骨子として存在してゐたのは就中次の三つの大きな法則であつた。即ち需要供給の法則、生産費の法則、生産を之等の三つの要素に分配する法則であるが、之等のものは今根柢を失ふのである。それを簡單に説明すれば次の如くである。「價格は需要に正比例し、供給に逆比例する。」とする法則は數學的外形を有してゐるので、この新たな學派の注意を惹く爲には殊によく出來てゐるものであつた。事實それは古い經濟學から新たな經濟學へ渡る架橋の役を務めた——が一度渡ると後者はこの橋を切つたのである。この自稱法則は經濟學に於けるユウクリッドの公理の一つとして確固不動のものと思へられ、その上に總ての經濟學の上層建築が築き上げられてゐたのであつたが、新たな學派は何の苦もなく、これが次ぎに述べるやうな循環論法の最も著るしい例に外ならない、と云



ふ事を立證した。十九世紀後半に於てそれを認めねばならなくなつた時、經濟學者の間には大きな恐慌を來した、實際、價格が需要と供給に依つて決定されるにしても、同じく需要と供給とは互に價格に依つて決定されるのであつて、その何れが因でその何れが果であるかを求むるは圓周を廻るやうな事になる。その上スチュアート・ミルは既にこの矛盾を明らかに指摘し、我々が述べて來たやうな風に同じくそれを修正した。併し、彼は彼以前に於て、且つ彼よりも好くクウルノールが今述べて來た法則を破壊し、これに代ゆるに眞實に快樂論の方法の端をなした「需要は價格の係數である」と云ふ法則をもつてした事を知らなかつたのである。(註)その意味は需要は價格の高い時、低下し、價格の低い時上昇する波狀運動線に依つて價格と結ばれてゐると云ふにある。然し同じく供給も又價格の係數に外ならないのであつて、その關係は價格と同じく高低する平行運動を以て、それに従ふと云ふ點だけが甚しく異つてゐるに過ぎない。斯くの如く價格、供給、需要はあだかも同一機械裝置の連絡ある三つの部分の如く獨立的に運動することは不可能であつて、問題は此相互依囑性の法則を決定するにある。

註 *Recherches sur les Principes mathématiques de la Théorie des richesses.*

如上の言は供給と需要との法則が將來經濟上の語彙から除去さるべきであること云ふことを意味するのではなく、單にそれが他の意味を持つやうになつたと云ふにある。今日では後で述べるやうに供給及び需要の法則は「需要曲線」と呼ばれるもので表現されてゐる、それは需要は價格の係數であるとするムウルノの定理を圖表を以て現はしたものに過ぎない。

「生産費は價值を決定する」と云ふ法則も同じで、同一なる原則上の非難を與へられてゐる。反對に企業者がその生産費用を決定するのは價格に據つてゐることを理解しないものがあらうか。古典學派はそれをこの費用の一要素として考へ得、地代を決定するのは價值であつて、價值が地代に依つて決定されるのではないと云ふ事を辨へてゐた。そして他の一切の要素は同じく眞實であり、言葉を代へて云へばこの新たな公式は同じく不當である。故にその原因及び結果の無益



なる研究を棄て、平衡に近づくかとする一つの關係が存在してゐると述べるに満足す可きである。それは、不思議なる若干の聯絡の力に據つて行はれるのではなく、この位置が存在してゐないところでは生産量の増減が忽ち平衡を齎らすやうに傾くからである。二つの價值の間のこの相互依囑關係は非常に重大なるものはあらうが唯一のものと云ふ譯では少しもない。それは一つの價值が他のもの、係數となつて變化する多くの場合の一特殊例に過ぎない。快樂學派は之等の場合を非常な好奇心をもつて集めてゐる。

尙分配の法則、即ち賃銀、利子、收益の割り宛てに就いても同様である。古典學說に於ては此等の各部分は如何に決定されたであらうか。最も素朴的方法に於てである。問題が收益の決定にあつた時彼等は云ふ。生産の價值總量から賃銀、利子、利潤を除去せよ、残る所のものが收益である。然し問題が利得の決定にあつた時、彼等は生産費を構成するものとして先づ、収益を、次いで賃銀及び利子を除去し残るところのものが利得であると云ふのである。ベエム・バヴェルク

が巧みに指摘してゐる通り、賃銀は勞働生産率に依つて決定されると云ふ事は、賃銀が價格から他の共力分子がその取得分を取つた残つたもの、總ていあると云ふに歸する。共力分子の各々は他の分子がその取得分を採つた時、その殘存物に對して權利を有するもの、即ち殘存物請求者として考へられてゐるのであつて、言葉を更へて云へば、三分子の各々の未知取得量を決定するには、他の二つの取得分を既知數と想定すると云ふに歸する。(註)

註、生産物の既知價值をPを以つて現はしX、Y、Zを以つて各々賃銀、利子、収益を示すすれば次の如の如くなる。

$$x + y + z = P$$

云ふまでもなく、三つの未知數を含む只一つの方程式は解けないのは明かである。また、それを次のやうに連續的に記してみても更に好く解決し得ることは云へない。

$$x = P - (y + z)$$

$$y = P - (x + z)$$

$$z = P - (x + y)$$



然し新たなる學派は最早、この古い神學的三位一體説を尊敬しなくなつたのである。これ等の動因の各々は必然的に生産事業に連帶的なるもの、即ち此新たなる學派の言葉を借りて云へば生産事業に於ける補足物であるのでそれを個別的に論ずることは出来ない。兎に角、その各々の決定を可能にするためには未知數の數だけ、これ等のもの、間に異つた關係を確立しなければならないのである。斯くして我々は數學的方程式及び公式に倚頼するやうに誘かれて來た。

然し數學の使用は總ての快樂論派を通して、承認されてゐると云ふ譯ではない。一方に於いて心理學派、特にオーストリア學派の名を冠する者は、數學に倚頼するのを有益とは考へてゐない。同時に逆に多くの數學的經濟學者は心理學に倚頼するのを必要缺くべからざると思惟せず、就中、次に述べるやうにオーストリア學派學說の中心思想をなしてゐる有名なる究極効用を何等必要としないと明言してゐる。(註)

註、「經濟平衡の理論は効用(究極程度)の理論とは別なものである。然るに吾人は反對に此二種類の

理論を混交し、同視してゐる」パレントオ、*J. Economic Junc*, 1902

故に説明の明晰を期するには新經濟學派に於ける心理派と數學派とを分つて研究する必要がある。

## 二、心理學派

心理學派は一切を究極効用に還元するをその特質とする。それは何を意味してゐるか。(註)

註、此名は著者に依り、またその國に従つて幾分宛異つてゐる。デエボンスは効用の究極程度と云ひ、アメリカでは限界効用と呼ばれ、ワルラスは滿された最後の必要の密度と云つてゐる。ワルラスはまたそれを稀有性とも呼んでゐるが、それは此文字に現在必要の量の不充分を現はすものとして純粹なる主觀的意味を與へてゐる。斯くの如く多様な用語が用ひられてゐると云ふ事は既に此觀念中に若干の不明確なる點が存在することを示してゐる。若し選むとすれば「限界」の形容句の方が「究極」よりも明晰ではあるが、然し後者はフランスに於いて其使用を認められてゐる。

心理學派にその特質となつてゐる「究極効用」の第一の觀念はフランスの技師デユビエイに歸さるべきであるやうに思はれる。此觀念は其著 *La mesure de l'utilité des travaux publics* (1844) 及び *L'utilité*



*des voies de communication* (1849) 及び二つの論文に示されてゐる。此兩論文は共に *Annales des Ponts et Chaussées* 誌に發表されたもので、その重要性はつゞき後になつて漸く認められたに過ぎなかつた。トッセンも、またその著 *Entwicklung der Gesetze des menschen Verkehrs* に於いてそれを摘出してゐる。然し今日の形態の下に於いては、それはデエボンスに依つて其著 *Theory of Political Economy* (1871) 中に、カアル・メンガアに依つてその著 *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* (1871) 中に殆ど同時に示されてゐる。他方に於いてワルラスの「稀有性」の概念は全く同じもので、その時期(一八七四年)をも殆ど同うしてゐる。最後にアメリカのクラーク教授は時期上には幾分後期(一八八一年)ではあつたが、その著 *Philosophy of Value* 中で他の道から直接に其所に到達したやうである。可なり頗繁に起るものではあるが、思想史上の發見の偶然の一致の顯著なる例である。

その起原が世界中至る所に求められるに拘はらず、この學派が「オーストリア學派」の名を冠せらるゝに至つたと云ふのは、此學派がその最も秀れたる代表者を見出したのはオーストリアに於てであつたからである。就中此所にその名を擧ぐべきは既述のカアル・メンガア教授(一八八四年)、ザックス教授 *Das Wesen und die Aufgabe der National-ökonomie* (1881) ウィーザー *Der natürliche Werth* (1889)、特に ベーム・スウェルク *Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerths* (Jahrbücher für Nationalökonomie, (1885) 及び資本と利子に關するその名著である。

然し今日に於ては此學說はオウストリアの云ふよりもアメリカの云ふつたと云ひ得るのであつて、クラーク、パットン、アーヴィング、フィッシャー、カーヴァー、フェッテその他の教授は専心限界効用を研究

し、特に富の分配、就中資本と利子の概念の研究に没頭してゐる。

今此所で非常に變化を受けて更生したところのものは古典經濟學者の古い意味に於ける效用、即ち彼等が使用價值と呼んだものであつて、——且つ彼等が敬禮をなした後重要性を有せざるものとして顧みなかつたものである。

第一にそれは此言葉の通俗的な基準的な意味に於ける效用、即ち有害乃至は餘剩的なるもの、反對として考察された效用から決定的に游離されるやうに思はれる。それは人の何等かの慾望、正しくとも、馬鹿氣てゐても、犯罪性を含んでゐても、パンであらうとダイヤモンドであらうと阿片であらうと兎に角慾望を満す能力以上の意味は含んでゐないのである。(註)

註、同一語を斯くも異つた二つの概念を示すために用ひる結果起る此混惑は如何に注意しておいても頭を混乱させるので、この混同を避けるためにパレットオは此言葉の代りに *Ophémité* (語原 *ephev* pov 効用、利益) の文字を用ひ、私は一八八三年以來私の經濟學原論に於いて *Desirabilité* 慾望充足性の文字を使用して來た。

第二に問題は何等かのもの、種別的效用、例へば人類の必要に對して考へられ



た水、鐵乃至は炭の効用の如きものではなく、交換者、生産者乃至は消費者としての我々の配慮の對象をなす具象的單位の効用である。パンを買ふと云ふ事は決して問題ではなく、パンの特定分量を買ふ事が問題となる。一般的に於けるパンの効用は何等の關係もなくまたそれを測定する事も不可能である。重要な事は必要とせられる丈のパンの効用である。斯くの如く簡單に立脚點を變へると云ふ事は古典學派が迷ひ込んだ總ての茫漠たる點を霧散する事を可能としたのである(註)その理由は次ぎの如きである。

註、「究極効用の觀念は「胡麻よ開け」であつて、經濟生活の最も複雑な總ての現象の秘鍵を與ふる公式で、この科學の最も解き難い問題を解かしめ得るものである。」ヘム・バゼル (The Austrian Economists. Annals of American Academy of Political and Social Science 誌一八九一年所載)

一、先づ價値の觀念は稀少の觀念と不可分的である理由は各單位の効用はそれが満足さす可き現在の直接な必要の強さに依つて左右されるからである(註)――

そしてまたその結果、その効用は既に所有せられたる量に左右せられるものであつて、一切の欲望は制限せられてゐ、且つその結果一切の欲望は所有に依つて飽和と呼ばれる、零の點迄減少すると云ふのが生理學的及び心理學的法則である――そして此點を過ぎれば否定的となり、排斥と變化し得る事さへもある。故に一つものは有り過ぎると云ふ事はないと云ふ條件の下に効用を有し得るのである。

註、コンヂヤックはこの主要なる事實を既に非常によく指摘し、彼以前に於てビュフォンは「その日その日の第一必要物の代價として拂はる可き財貨は、政治家の財布を満たしてゐる財貨はエツキユは數學者の眼には同一系統の二つの單位ではあるが、精神的に云へばその一つは二十フランの價値を有し、後者は一厘にも當らない」と述べてゐる。(Essai d'arithmétique morale)

量と必要との間のこの結合の方法は効用の曲線と需要の曲線とを含む曲線に依つて示され得るのである。それを記すには横線で一二三四等と消費されたる量を記し、二の各々の量に相當する欲望の強さを量る線を縦に之等の各々の點から立てれば十分である。斯くすれば量が増大するに隨つて縦線は段々減少し遂に零に達するのを見るのである。

種別的に一體となつた効用の觀念内に止まつてゐた間は、効用と稀少性との間の必然的關係が理解されなかつた。只この二つの觀念の一つにより立脚してゐな



い價値の説明は跛行的なものであると云ふ事は理解されてゐたが、それは何故であるかは解らなかつたが、今や之等の二つの動因の連帶性は特に明瞭に現はれ、効用は量の係數として示され、効用の程度は價値と呼ぶるゝものに外ならないものとなつた。

二、同じく究極効用の概念は經濟學者の十字架であつた問題、即ち何故に水はダイヤモンドより價値が少ないか？と云ふ問題に解決を與へ、又重農論以來甚だしく彼等を苦しめてゐた他の問題、即ち交換された事物の等値を定義に依つて含む交換が何故に此兩者の各々に利益を獲得せしめ得るかといふ問題を解いた——この謎の鍵は次ぎの如くである。即ち交換に於て考察する可きは究極効用にのみであつて、決して全體効用に及ばない。併しこの時交換に本質的な平等性は何處に求めらる可きであるか、と云ふと、それはこの兩者の各々にとつては獲得した最後の量と讓渡した最後の量との間に行はれる平衡中に存在するのである。

こゝにコンゴオに二人の交換者があるとする。甲は鹽を所有し、乙は米を所有

し、共に交換しやうと望む。未だ如何なる率を以つて互に交換す可きかを知らないので共に摸索する。甲は若干粒の鹽を與へ、若干握の米を受取る。彼は眼で山になつて段々と大きくなる二つの量を比較する。併し、米の山が増大するに随つてそこに加へられる新たな各握の米の効用は遞減して行くのであつて甲は間もなくその必要に對して十分なる量を獲得する。併し反對に鹽の山が高くなるに随つて甲がそこに加へる各量の効用は彼にとつて増大するのである。何となれば彼は間もなく自己の必要を満たす爲に十分な鹽の量が手許に残らなくなるであらうと云ふ事を知つてゐるからである。そして交換された各握に就いて讓渡單位の効用は増大するに反し、獲得單位の効用は減少するので、この兩者が等值的となる時が来る事は明らかである。この時甲は止める。斯くして交換は行はれ、そして價格は二つの山の間の關係に據つて測定される事になる。この時獲得した米の量は、甲にとつては讓渡した鹽の量の總體効用より非常に多い總體効用を示してゐない事は明らかである。



併し、甲丈が問題となるのでなく、乙が同じ時に止めるに同意するか否かを知らる事が残つてゐると云はれるかも知れない。斯くの如き事はありさうでない事であつて、若しも譲渡された米の量が甲を満足させるに十分となる前に停止しやうと決定される場合、交換は明かに成立し得ない。併し共同交換者の各がその相手が胸の中で定めておいた限界を越える事を同意すると云ふ事は想像す可きであつて、この時停止點は値切る事に據つて決定される事になる。(註)

註、長い理論の代りに圖表が有益に用ひられるのはこの場合である。若しも上昇線をもつて譲渡せられた鹽の各握の効用を示し、下降線をもつて獲得した米の各握の効用を示しその線を引けばこの二つの線は反對の方向に動いて行くので必然的に交る。この二つの線が交つた點は交換された兩方の各握の効用が等しくなつた點に外ならない。併し乍ら、こゝで一つの混交を避ける事は重要である。一般に信ぜられるところに随へば等値性、即ち二人の交換者にとつて各商品の究極効用の平等を交換が含んでゐるとされてゐる。決して！この兩者の欲望の間には何等の共通尺度は存在してゐないのであつて——英國の快樂論者の言葉を借りて云へばその間に *No bridge*、即ち何等の橋もないのである——只必要であり、十分であるところのものは同一共同交換人にとつて二つの商品の究極効用の平等である。計量が行はれるのは各人の内部に於てである。取引きに依つて實現された交換は之等の可現的交換の總ての合成結果

に外ならない。

オーストリア學派は、交換を説明する爲に一つの假定の助けを借りてゐるが、それが必要無く可らざるものでは恐らくなく、例へばワルラスの如き他の快樂派經濟學者はそれを用ひないで立派に濟ましてゐる。それは限界對と呼ばれるものである。先づ互ひに向ひ合つて二列に賣手と買手が並んでゐるを想像する。賣手の側では彼が所有し、彼が譲渡しやうと欲するものに各種の効用を附する。買手の側には於ても同じく各々は獲得しやうと欲するものに種々の効用を附する。そこで賣る可き品物に、最も高い効用を、即ち賣る事を最も急がないとする賣手と反對に獲得す可き品物に最少の効用、則ち買ふ事を最も急がないとする買手との間に、そこにある總てのものに對して取引價格を決定する最初の交換が爲されるのである。一見して此取引がその取引きを爲す最低の欲望を持つ二人の當事者に依つて結合されること云ふ事は不可解なやうに思はれる。その取引きが先づ賣る事を最も急ぎ、必要に應じては一ヘクトリツトルを十フランで満足して諦める賣手と、最も買ふ事を急いで必要に應じては三十フランも諦めて出す買手との間に行はれる方が更に自然なやうに思はれるかも知れない。併しよく考へると價格が決定しないのは、之等のものが價格に構はず決定しやうとする爲に外ならないと云ふ事が解る。之等の急ぐ人々は最も急がないものが相談を纏めるのを確實に待つのである。距りの最も少ないところのものが第一に相談を纏めること云ふ事は自然の數である。斯くの如く取引上に法則となる之等の二人の共同交換はオーストリア學派が限界對と呼ぶところのものである。

三、他の問題がある、何故に同一商品に對し、同一市場に於ては、同一價格よ



り存在しないのであるか。——若しも效用が各單位の各々に就き、主觀的に各個人に對して各別に理解されるべきであるとしたら、その單位の各々は非常に差異のある要求を満し得る以上、その單位の數だけ異つた價值の數を有すべきではないかと思はれる。斯く考察して、何故にパンは餓えた人に對しては富裕な人に對するよりも、或は同一人に於いても、絶食した後の方が満腹してゐる時よりもはるかに大なる價值を有しないのであらうか。——それは同一にして交換可能なる品物が同一市場に於いて異つた交換價值を有し得ると云ふことは不當であると云ふ極めて單純なる理由に過ぎないからであつて、同一人に對する場合の如きは尙更である。此價格單一性の法則(註一)は、それ自身、他の法則、代用の法則から派生してゐるのであつて、後者に對して心理學派は非常に大なる重要性を正しい理由を以つて假定し、且つそれは此學派の最も貴重なる貢獻の一をなすものである。この法則の意味するところは何等かの欲望を充足せしむるために、他の商品の代用が可能な時は何時でも元の品物は代用物以上の價值を有し得ないと云ふにある。(註二)

註一、ガエホンスはそれを非常に表意的な名稱、無差異の法則と呼ぶ、その意味は、二つの品物は非常に異つた強度の欲望を満し得るであらうが、若し我々がその一つを無差異的態度を以つて選み得るとすれば異つた價值を有し得ないと云ふにある。

註二、代用の法則は同一欲望を満し得る力を有する異つた品物に就いてのみ行はれるのではなく、欲望自身が互に代用され得れば、例へば葡萄酒が茶に依つて、茶が珈琲に依つて、城の生活が旅行や別荘生活に依つて代用され得れば、異つた欲望を充足する事物に就いても同じく屢々行はれるのである。

事實、事物の代用の意味は、常に實現され得るとは限らないとしても、少くとも可現的なる交換に外ならないのである。而して一切の交換なるものは價值の平等を含んでゐる。

そして若し一群の代用可能な品物が存在してゐれば、その中の何れも、その中の最低價格のもの以上の價格を有し得ない。

各人が百杯の水をその意に應じて有し得る時——サハラ沙漠を除けば殆ど常に左様であるが——その中の何の一杯と雖、非常に渴した者がその一杯と同重量の金を與へやうと考へてゐる一杯と雖、百杯即ち零以上の價格を有しないと云ふの



も如上の理由からに外ならない。此最後の一杯は何の一杯の何れでもに依つて常に代用され得る所に存在してゐるのである。

恐らく究極効用に就いて明晰なる觀念を作り得る最良の便法は、評價され得る事物を決して直接に考察せず、それに代用し得る事物を考察するに止むるにある。斯くすれば、若し私が大切にしてゐる甲品を失ひ、且つ私が乙品に依つて完全に甲品に代用し得る時、甲品は乙品以上の價值を有せず、更に乙品よりも安價な丙品に依て代用し得る場合、甲品は丙品以上の價值を有しないと云ふことは明瞭に現はれて来る。(註)

註、「我々が使用出来なくなつた物に代用され得る、より安價なるもの、使用、これこそ我々が究極効用と呼ぶところのものである。」(ミエム・パヴェック *The Austrian Economists*, American, Academy of Political and Social Science 誌一八九一年)

要するに我々は物理的系統に屬する何等かの法則と同じく普遍的な力を有する此法則を設定する點に達したのである。それは一切の富にとつて、價值は代用さ

れ得る最低品の使用に依り、且つ引き出され得る最低の充足に依つて決定されるからである。

今までに、究極効用の概念が、價值及び交換の問題を解決する上に役立つたことを述べて来たが、それを經濟學の他の方面、即ち、生産、分配、消費の方面に移した時、同じ力を有し得るであらうか。

勿論のことであると快樂論者は云ふ。要するに生産、分配、消費の各行爲は總て交換の様式に外ならないではないかと。先づ生産に就いて論ずる。自由競争制の下にあつて、何故に生産物の價值は生産費に従つて決定されるのであるか。その理由は一切の自由競争制はその定義自身に依つて、一切の生産物が何時でも類似的生産物のために代用され得る制度である。然し類似品は第一原料に若干の加工を加へた結果物である。故に此場合に働くのは代用の法則である。生産費が一切の類似的生産物の價值を決定すると云ふのが事實なら、それは、此生産費が何時でも他に代用し得べき最低價值を示してゐるからである。



消費に就いても同様である。吾人は如何にその消費、即ち支出を規定してゐるか。言ふまでもなく、最良の結果、即ち一定の収入と兩立し得べき最大量の快樂を獲得するやうに規定してゐるのである。彼は宿料に宛てられた豫算の項目を増大し、食料品の條項を減じたり、乃至は觀劇費の項を削つて喜捨の項目を増したりなどして無意識的な模索を續け、最後に平衡の位置に達して止むのである。此平衡の位置に到達するのは交換された最後の品物の究極効用、言葉を換へて云へば充足された最後の慾望の強度が平等な時である。事實若しその日吸ふべき最後の葉卷莢の獲得に充當さるべき金が、最後の新聞を購求するために充當さるべき金から來ると同じ満足と與へなかつた時、省察が行はれ、彼は一本だけ少ない葉卷と一枚だけ多い新聞とを購求するのである。斯くの如く消費は一種の交換に還元さるゝのである。此時市場となるのは我々の内心であつて、値合の相談が行はれるのは相干格する我々自身の欲望間に於いてゐる。(註)

註、消費に就いて云へば、新學派は市場に於ける價格の單一性の法則から珍らしい結論を引き出して

ゐる。例へば麥を例に採るとして、それは總ての購買者に對して同一價格より有してゐないが消費者各人のためには麥の究極効用は恐らく非常に不等なものに相違ないのである。その市場價格が例へば二〇法であるとした時、それに二五法を支拂ふ用意を有し、且つ必要とあれば此代價を拂つたであらうと思はれる人も、乃至は二四法、二三法、二二法等と支拂ふ用意のある他の者も存在し得るのである。その結果此等の購買者の各々は麥のために二〇法だけより拂はなかつた時消費の儉約の形態の下に利得を得たことになる。これはマーシャル教授(Principles 三卷六章)が消費者の収益と呼んだものである。彼が此名稱をそれに附したと云ふのは快樂論派よりはるか以前に發見され、且つ同一原因を有する有名なる生産者の収益、即ち各生産者に對して市場で一定されてゐる販賣價格と、生産費若しくはその各々の爲に拂つた犠牲との間の種々な相違とに先の消費者の収益を接近させるためであつた。

然し實際には此二種の収益の間に存在する同一性は單なる用語上の事に過ぎないのであつて、消費者の利得なるものが全々主觀的であるに反し、生産者の利得は販賣價値を有するのである。大多數の場合には交換は同一價格に於いても非常に不等なる満足に人に齎すものであるとそれだけ正直に云へば十分である。

最後に分配に於いても、また究極効用の理論は征服した國に於けるが如く、闊歩してゐる。収益、利子、賃銀に關する一切の法則を此理論に依つて專念革新しやうとしたのは特にアメリカ人でクラーク教授はその尤なるものである。恐らく



は實際主義と現實主義とに浸染され過ぎてゐる環境に對する反動的精神の現れであらうか、アメリカの大學の年四期刊行經濟學雜誌が自ら喜んで掲載してゐる此等の巧緻なる分析を此所で全體説明する譯には行かない。此所では只給料に觸れてゐる原則を説明するに止めておく。給料は他の凡ゆる價值と同じく究極効用に依つて決定される。然し何の究極効用であり且つ如何なる理由を以つてするか。先づそれは企業家に對する職工の仕事の究極効用である。併し問題が生産の動因に拘る時、彼等の効用の程度を爲すものは生産力の程度である。故に給料は究極生産力即ち企業家が如何に微量であつても何等かの利益を以つて利用し得る代用職工(限界職工)が生産し得る價值に據つて決定されるのである。殆ど豫備的な此職工に依つて生産された價值は企業家が彼に與へ得るところの最大量を定め、同時に彼と交換し得べき(註)即ち同一種類の勞働に従事し、同一努力を供給する他の總ての職工(之等の他の職工に依つて作られる價值は代用職工に依つて供給されるものより遙かに上級であるにも拘らず)の賃銀を定めるのである。丁度、與へ

得可き百杯の水と同じく消費者に對して他の總てのもの、價值を決定するのはその中の最も有用でないものである。

註、若し職工がその能力の相違から相互に代用する事が可能でない時、その法則は行はれない。その理由は、この法則が常に自由競争を豫想し、この場合各職工は一種の個人的獨占を有するからである。

この爲に勞働生産力の上に立脚した給料の理論は肯定されると同時に修正されたのである。この生産力は生産力には違ひなかつたが「最低生産勞働」の生産力——即ちこの勞働者の生活費用より以上のものは決して生産しないもの、生産率であつた。この爲に生産率の理論はその樂天論的特質を總て奪はれ、殆ど黃銅法則の水準に迄引き下げられる事になつた。

利率に就いても同様である。最低生産の條件にある資本即ち限界資本が代用の法則の力に依つて常にその率を決定し得るのである。一切の資本は貨幣の形態の下に於ては總て同一で判別し難いので代用の法則は勞働者に對するよりも資本に對してよりも適用される。(註)



註、若しも資本が決定資本の形のもとに現はれてゐる時は同じでなく、この時代用の法則は適用されず、その資本から來る収入には非常な相違が存在し得る。

土地の貸借料に就いては更に詳細に亘つて次ぎの章に於て述べる。

料理人に據つてコーヒーにシコレが代用されるとか、若しくは片々になつた手袋を棄て、しまふとか云ふやうな一見したところでは科學に對して何等の意味も有せず、且つ興味のないやうな若干の經濟現象から如何にして——心理學派は連續的展開に依つて代用の法則とか乃至は補助物の法則の如き無限の數の事實を抱擁する最も普遍的な理論を引き出したかは賞賛に値する。この演釋的操作の中には非常に注意を惹く光景が存在し、恰も一千一夜物語の中の妖精のやうに千年の間封印されて閉ぢ込められてゐた小さな壺から救ひ出され、天に聳ゆる迄大きくなつてゆくやうなものがある。併し、この妖精は一つの煙霧に過ぎなかつた——之等の快樂論派の壯大なる理論が生れるか、そして、それが此妖精と類似してゐないか、何うかを知らねばならぬ。

### 三 數理學派 (註一)

數理學的學派が存在してゐると云ひ得るであらうか。寧ろ數學的方法は快樂論派學說に對しても他の總ての學說に對すると同じく何等必然的關係を有せず——それは單に最も相違してゐる學派に依つて用ひられ得る道具に過ぎず、——その結果我々の分類中に一つの特殊部門を開く必要は存在してはゐないと主張す可きではないだらうか。(註二)

註一、數理經濟學派の發生期は今日一般的に認められてゐるところに隨へば若干の先行者を引用し得るのではあるがクウルノーの著書 *Lecherches sur les principes mathematiques de la theorie des richesses* (1838)の發行年月とされてゐる。併し事實を云へばこの方法が一學派を創設するに至つたのは四十年程後である。クウルノー(一八七七年死去)は今日益々高く評價されつゝある哲學に關する著書を残し、且つ此方法を示唆したものである。その經濟學の著書は時期に先立つた人間に與へらるゝ不評判の好個の例であつた。長い間只の一部も賣れなかつた。著者は公衆の無關心を打ち破らうとして *Principes de la Theorie des richesses* の表題の下に代數的公式を除いた殆ど同じ本を一八六三年に出版し、一八七六年には *Revue sommaire des doctrines économiques* の表題の下に更に簡單な形式の下に出版したが何等の成



功を収める事は出来なかつた。彼は死が迫つて来るまで待つて漸く英國の經濟學者ヂェホンスの激しい賛辭を贈られたのである。

獨逸人ゴッセンの著書 *Entwickelung der Gesetze des menschlichen Verkehrs* (1853)は幾分後期に現はれたものではあつたが、更に幸福なる運命を擔ふ事は出来なかつた。この著者は行政部の名もない書記としての生活し、その著書はつゞき後になつて而も偶然にも英國の教授アダムソンに依り英國博物館に於て(これが残つてゐた唯一のものであつたと信じられてゐる)發見され、彼がその先覺者と同じく世に認められるに至つたのはヂェホンスに負ふてゐるのである。讀者はその極めて簡單なる概説を地代論に關する次の章に於て見らるゝであらう。ヂェホンス(一八八二年死去)は同時に數學派と究極効用の心理學派とに屬してゐる。その優れたる著書 *Theory of Political Economy* は一八七一年に出版されたのであつたが、フランス語に譯されたのは漸く一九〇九年、國際經濟學文庫に於てであつた。

ワルラスはその一生の大部分をロオザアムの大學で送つたので(この爲にロオザアム學派と云はれてゐる)何處迄もスイスの經濟學者と形容されてはゐるが、完全なるフランス人である。彼は一八七四年にその第一篇を出版した *Elements d'Economie Politique pure* に於て數學的形態の下に經濟科學全體の綜合的説明を試みてゐる。

今日數學的方法は各國にその代表者を有し、英國にマーシャル、エヂウオース、獨逸にラウンハルト、アウスピッツ、リーベン、イタリヤにパレトオ、パロン、米國にイーヴィング、フィッシャー及びロシヤ人ではあるが伯林の教授ポートケオイッチを有する。クウルノー及びワルラスの郷國なるフランスに於いて

は一人の數學經濟學者も數へることは出来ない。只アウベチットの *Théorie de la monnaie* を引用しておく。これは特殊な問題を扱つたものではあるが、數理經濟學に關する一般的序説を収めてゐる。

註二、この批評は就中パレトオに依り、その著 *Traité de Sociologie I. 81* 説に於いて我々に加へられたものである。パレトオは本書第一版中に於いて彼を快樂論者の中でワルラスと並べて分類してゐた部分に對して抗議してゐる。彼は自ら何等の學派にも屬せず經濟學を『化學、物理學乃至は「天文學の如き科學」たらしむる方法を有してゐるに過ぎない』と宣言してゐる。然し我々の分類法は經濟學を一つの「正確科學」たらしめやうとする人々を同一表題の下に集めること云ふより以上の意味は有してゐないのである。

然し數學的方法の使用は經濟學上の可なり特殊な概念、即ち全體を交換行爲に還元しやうとするにある概念に附隨してゐるやうに思れる。一切の交換は交換される量の一關係を豫想する。それは價格となつて表現され、形ちを取る。斯くして我々は今や一躍して數學派の中心に飛び込んだのである。

恐らく、若し此方法が交換の限界を出得なりとすれば、可なり局限された適用範圍より有し得ないと思はれるかもしれないが、それは誤りである。如何にしてこの限界が擴大され經濟學全體を抱擁し得るかを立證したのは正しく新學派の最



も獨創的な多産なる寄與の一つである。

分配、生産、また消費さへも、凡て此訓練の中に把握されるのである。先づ分配を論ずる。賃銀、利子、収益、一言にして云へば収入とは何であるか。それは或る仕事即ち生産の作因、労働、資本、工地に依つて供給される仕事の代價で企業家に依つて支拂はるゝものである。故にそれは交換の結果である。

生産するとは何であるか。——それは一つの効用を他の効用と交換することであり、第一材料と労働の若干量とを消費し得べき品物の若干量と交換することであり、後者を得るためには前者を犠牲としなければならない。我々の勞力と交換に自然はその所産を我々に譲る商人と見做し得るのであつて、クセノフォンが「神は我々の勞力の代價で、その所有品を我々に賣る」と記したのは、此獨創的な理論を豫感してゐたのである。更に此類化を明確にするために、それを逆にして、一切の交換は實際に於いて生産行爲と云ひ得る。パンタレオン氏が巧みに述べてゐるやうに「我々は我々と取引きを行ふ相手の交換者を、あだかも彼が開拓すべ

き原野乃至は採掘すべき炭鑛の如く見做し得るのである」。(註)

註、*Scritti varii di Economia*, p. 1—48 (3704) に採録された *Des différences d'opinion entre économistes*, Genève, 1897.

資本化する、投資する、貸出す、と云ふ事は何を意味するか——それは現在の財産及び直接な享樂を未來の財産及び享樂に變へる事である。ベーム・バヴェルクが有名なる利子の理論に到達したのは、後で述べるやうに金を借す事を交換と見看したからに外ならない。併しベーム・バヴェルクはオースタリア學派の代表者であつて數學派を代表するものではない。

消費そのものも、又収入の使用も不斷の交換を豫想する。それは我々の収入に制限があり、我々が買ふところのものと、嘆息を洩らして我々が諦めねばならぬものとの間の選擇を豫想するからである。一夕の觀劇を犠牲にして一冊の本を買ふと云ふ事は一つの快樂を他の快樂と交換する事であつて、この交換は他の交換と共に同一法則に隨ふのである。(註)



註、古典經濟學の中樞をなす價值自身は數理經濟學にあつては單なる交換の關係となり、この爲に若し許さるれば一切の人格を失つたとも云ひ得るのである。且つ問題はもの自身でなく單なるその表現であるので、古い學派がなしたやうな原因とか立脚點とか性質とかを求める爲に努力すると云ふ事は下らない事になるこの爲にデエボンスは價值と云ふ言葉を永久に除却しその代りに簡單に交換の關係と云ふ言葉を用ひやうと提議してゐる。アウチベットは次ぎの如く力説してゐる。「價值と云ふ言葉の表現は今日一切の内容を有しないもので、科學的語彙から排除される可きもの、やうに思はれる……今我々がなして來たやうにこの奇生蟲的要素を閑却しても何等大した損害は存在せず、價值と云ふ言葉を用ひないでも經濟的平衡をその全體として説明する上に何の不便もない。」(Thorie de la Monnaie, p. 85)

且つ至るところに於て同様である。租税を拂ふと云ふ事はその財産を割いて爾余のもの、安全を交換として得る爲である。子供を生むと云ふ事はその生活費と平靜の幾部を割り、その交換として家族の喜び乃至は國家に奉じ得る喜びを得る爲である。斯くの如く經濟的系統に屬する事實の間には相互依囑性の關係が見出されるのであつて、それは數字をもつて現はされ得ない場合に於て代數的公式に依つて表現せられる事を試み得られるのである。數理經濟學者の技術は之等の關係を發見し、それを方程式をもつて現はすにある。

例へば既に述べた通り商品の價值が増加すると需要が減じ、且つその逆も成立する。この二つの量の一つは他の一つの量に比例して常に變化するのである(註) 需要の法則がこの新たな形態の下では如何に表現されてゐるかを見やう。

註、需要をD價格をPとすれば $D = F(P)$ となる。これは需要が價格に比例する事を意味してゐる。

同じく之等の關係は方程式に依つて示される代りに幾何學的圖表に依つて示されるのである。事實數學に於て總ての曲線は方程式をもつて現はされ得る。數學的圖表は少なくとも素人には代數方程式よりも明瞭に眼に訴へ特にクワルノーその他のやうに微積分の記號を解かればならない時においてさうである——併し、同時に幾何學的圖表はその資源が遙かに少なく、漸く一つが固定的で他が可變的である二つの量の間の關係を示すに止まつてゐる。乃至は立體幾何圖表を用ひれば三つの量迄は示し得るが、この場合投影を伴ふ圖表は非常に明瞭さは云へない。それに反し、代數は變數の數だけ方程式が立て得られれば思ひの儘の變數量の間の關係を立て得られるのである。

若し水平に一定の點から一、二、三、四、五、……十の價格を示す等距離點を記し、之等の點の各々から垂直にその價をもつて要求された量を示す線を引き、その量に比例した高さで切り、且つての垂直線の頂點を線でもつて繋げば最も低い價格の時最も高い點から出發し、價格が高くなるにつれて遂に或る點で水平線と同じくなるのであつて、この點は價格が非常に高くなつて需要がなくなつた時に相當するのである(註)



註、需要の曲線を始めて引いたのは技師ヂュビニイがその既述研究中に於て爲したのであつた。併し彼以前に於て、クウルノーはそれを「販賣の法則」と呼び、非常に明瞭にそれを説明してゐる。その爲に彼がこつた例は非常に効能があるを稱せられてゐる鑛泉の瓶詰めの販賣を云ふ極めて簡單なものであつた。その價が非常に低い時、需要若しくは販賣が非常に大なる。勿論一切の欲望には制限があるので無限大なる譯には行かないのである。價格が非常に高くなつた時それは零となる。この二つの限界の間を需要は總ての中間的程度を通ずる。

我々はこゝで專賣制の見地から、及び專賣と一般的利益との間の干格を立脚點としてクウルノーがそこから引き出した獨創的な演釋を今こゝで述ぶる必要はあるまい。

興味ある事はこの曲線が商品の種類に隨つて異なると云ふ事である。——或るものにとつてはこの傾斜が緩漫であり、他のものにとつてはその曲線が急激に下降する。それはマーシヤルの言を借りて云へば需要の弾力性に大小があるからである——斯くして各商品は獨特な曲線、人相、照合票とでも云ひ得るものを有してゐ、その爲に（少なくとも理論的には）百のもの、中からそれを選び出し得るのである。（註）

註、需要の曲線は一般的には内部に曲りを有し、この特質的形態は非常によく知れ渡つてゐる事實即

ち價格が一般民衆の手に入るに十分な程低くなつた時販賣は非常に急速に増加すると云ふ事實の幾何畫法的表現に外ならない。この事實の理由は小さな財布が大きな財布よりも非常にその數が多く、價格の水準で非常に僅かでも下げればその商品は非常に廣い範圍の社會層の手に入り易くなるのである。併し乍らこの曲線は種々なる形態をとり得る。若干の生産物、例へば麥乃至は鹽に就いて云へば價格が非常に下ると云ふ事は販賣を非常に増加する事とはならない。併し他のもの例へば金剛石の如きは、その價格が非常に下ればその結果として倭蕙の爲に一切の需要を停止するかも知れないのである。

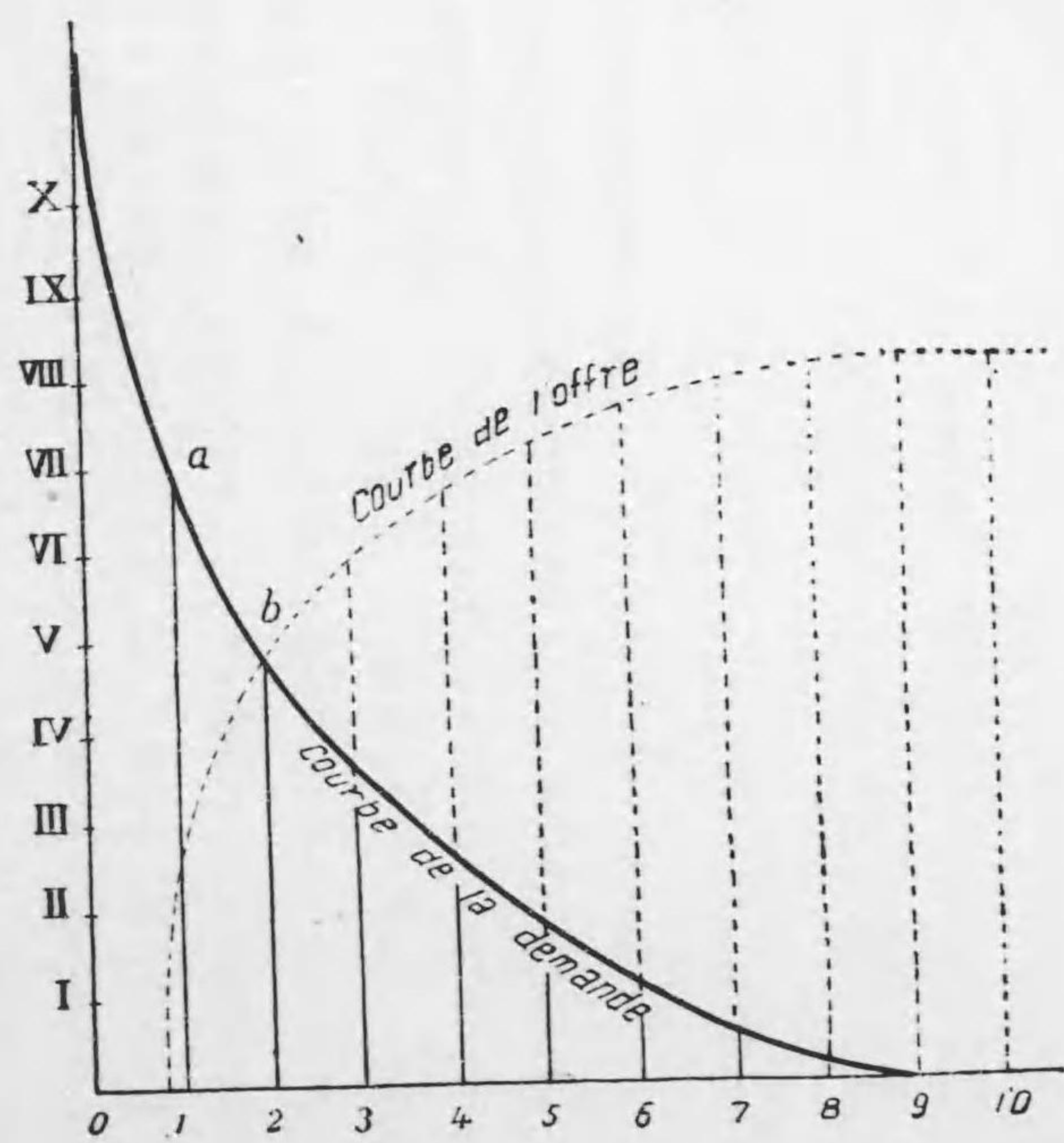
供給の曲線は反對に一般的に凸形で、その理由は一定の價格をもつて舞臺に上る供給は價格の騰貴に非常に敏感で、その騰貴が非常に少なくても急速に騰貴するものである。併し、生産は跛行的に緩漫になり供給に追従することが出来ないので供給は忽ち阻害せられ、或程度に至れば市場には引き渡し得べき生産物が無いと云ふ極めて單純なる理由から供給が減少して行くことさへも有り得るのである。

供給の曲線に就いて云へば、言ふまでもなくそれは前者と反對に價格が上る時増大し、價格が下る時減少する。その結果價格が零の時供給は存在せず、之に反し價格が零の時需要は非常に増大し——然し無限大ではない——消費の能力より外の他の限界を認容することになる。（註）

註、次に同一圖表に供給曲線と需要曲線とを集めて示す。



線曲要需・線曲給供



水平線に記したアラビア數字は價格を示し、垂直線に記されたローマ數字は需要された量を示す。故に左圖に於いて價格一（法でもスウでも何れでも好い）に於いて要求された量は七であり、價格九に於いて要求された量は零である。

同一表中眞線を以つて記した供給曲線は價格一の時IIとなり、價格六の時Wに達しそれ以上増加してゐない。如何なる場合でも供給曲線は縦軸に達することはない。それは此軸が價格零の上にあつて、價格零即ち無料となるはるか以前に供給は中止されるのである。

需要と供給が平衡ならぬ限り交換は成立し得ないことは明らかである。b點は圖表上二つの線の交點、即ち二の價格に相當するII量を示してゐる。

垂直線は縦線と呼ばれ、出發點となつてゐるもの（此場合はx）は縦軸と呼ばれる。此線からの距離（下方の水平に線上に記されたるもの）は横線と呼ばれる。總ての曲線の點は横線軸と縦線軸とからそれを分つ距離に依つて決定される。例へばa點の示すものを知るためには縦線軸と横線軸とに對し直線に交る二つの線を下せば好いのである。前者は價格を、後者は需要された量を示すのである。即ち價格一の時II單位量が要求されたのである。

此圖表では縦線が價格を、横線が量を示すことになつてゐるが、これを反對のやうにも作圖し得ることは明かである。

然しながら供給の曲線は需要の曲線と對稱的に逆になつてゐると云ふだけでは十分でない。前者が後者よりはるかに複雑であると云ふのは、供給自身がまた生



産費に依つて條件を付けられるからである。生産の若干の部門、就中農業に於いて生産費は販路より急速に増大し、他の部門、一般に工業にあつては販路が増大すればするほど單位の生産費は減少する。

數理經濟學は孤立的事象の間の相互依屬性の關係を究明するだけに満足せず、それ等のものを全部全體的見地から抱擁すると主張してゐる。此學派はそれ等の事象の間に一平衡状態を見てゐるのであつて——それが亂された時は何時でも自ら平衡に戻らんとしてゐると云ふ意味に於いて安定的な平衡状態である。(註)此等の平衡の條件を決定する、そこに純粹經濟學の眞個の對象が存在してゐるのである。

註、數理經濟學は猶、同時に他の平衡状態を研究してゐるのであるが、それは更に複雑であつても重要性に乏しい。即ち不安定なる平衡状態である。

此方向になされた最も顯著な綜合の努力はワルラス教授のそれである。彼は大膽に經濟界の凡ゆる部分をその公式中に抱擁し——何にかラプラスの宇宙學說をしのばしむるものがある。(註)

註、バレットが如何なる言葉で彼を評してゐるか次の文字に視はれる。(Economic pure, 1907, p. 11)

「此等の方程式體系の一、即ち自由競争に關するものを見出した第一人者はワルラスに外ならない。此發見は最も重要なもので、此學者の成績を過大に評することは不可能である。勿論此科學は既に發達し、將來に亘つても發達するであらうか、此事は何等ワルラスの發見の重要性を減殺することなく、天體構造學の進歩は何等ニュートンの *Principia* の重要性を減殺することがなかつたと同様である」。

先づ社會全體がバリの取引所に於けるやうに一堂に集まり、同じく賣り、及び買ひに來その價格を叫ぶ者の騒音で満ちてゐると想像する。

中央に——「籠」と呼ばれてゐる此集團の中央に位置を取つてゐる取引員のやうに——企業家(工、商、乃至は農業の)が席を取る。彼は同時に二重の職能を果しつゝある。

一方彼は生産者(耕作地或は都會地所有者、資本家、職工)からワルラスの言葉で云へば「生産勞務」即ち土地の豊饒性、資本の生産率、職工の力と勞働、自由職業の勞務を購買し彼等に交換に依つて決定された價格を支拂ひ、その各々その收入を決定するのである。即ち彼は土地所有者に地代を、資本家に利潤を、勞



働者に給料を支拂ふのである。

然しその價格如何、價格決定の方法如何は、取引所に於けると同じく、如何なる價值に就いても需要、供給の法則に依つて決定されるのである。企業家は一定の勞務を一定の價格で要求する。土地所有者、資本家、労働者は一定の量を一定の價格で供給する。この場合需要され供給される勞務の量が一致するまで價格は高低するのである。

他方に於いて企業家はその農場乃至は工場から出る農産物乃至は加工品を賣る。然し誰れに賣るのであるか。ジャック先生のやうに衣物を更へて消費者と變つた同一人物にである。事實生産物の購買者として現れるのは先にその勞務の賣却者であつた土地所有者、資本家、職工に外ならないのである。——その上此經濟上の舞臺には何の外の者が現れ得るであらうか。如何なる樂屋からその他の者と云ふ者が出て來れるであらうか。

そして生産物の市場に於いて價格は先に述べたと同一方法で決定されるのである。

然し此際、此平衡の新たにして更に壯大なる相貌が突如として現はれて來る。實際、一方に生産勞務の全價值は他方生産物の總價值と數學的に等しくなければならぬことは明かである。企業家は消費者に引き渡した生産物の代價として、それまで生産者であつた同一人物にその勞務の代價として與へたより以上のものを取得出來ないのである。然し何處からその金を引き出すか。これは閉ぢた圓周路であつて、一つの口から出た水の量は全部他の口から入るのである。

此所に於いて我々は有名なるケスネーの經濟表に似たやうなものを見出すのであるが、これは更に近く現實に迫つてゐる。(註)

註、然し此表を現實の表現として考へねばならないとすれば、企業家は生産勞務に對して支拂つた正確に同じ價值を、その生産物の代價として受けるならば其間何等の利得を實現しないと云ふ奇妙な突發的な結論に達する。

そして實際ワルラスはパントラインと同じく、此外見上の逆説の妥當を十分に認め、常態的利得は零であると述べてゐる。此言に豫想されてゐるのは絶對的自由競争であり、且つ彼等は利潤の利得を生産



費の構成要素として數へらるべきものとして絶對的に（この事は英吉利學派のしなかつたことである）區別することを注意してゐる。

これは、自由競争制の下では販賣價格が必然的に生産費と一致すること云ふ周知の公式を更に大膽なる形態の下に反復したただけである以上、其處に何等驚愕すべきものはない。

理論上、斯くの如く利得を否定すること云ふことは、實際上總ての社會に於いて利得の存在事實を承認する防げざるものではない。只其處には一固定點の圓周を此方式の不斷の動搖を見るだけであつて、それは決して固定されないものである。此概念中に於いて、利得はあだかも海の波のやうなもので——その波は海の水準が水平であることを認める妨げとはならず、且つ地球上の一切の高度の違を測定する上に基準としてその水準を用ひる妨げともならないのである。平衡が完全に完現され實際に利益が存在しなくなる日が来るであらうか。……恐らく来るかも知れない。然し物理及び經濟界に完全なる平衡が實現された日、一切のものは停止し、世界は終焉を告げるであらう。

斯くの如く勞務の市場、及び生産物の市場と二つの市場が並列的に存在してゐるのである。（註）そして各市場に於いて價格は次の如く三つの同一なる法則の爲に決定される。

(a) 同一種類の生産物を通じて、同一市場に於いては單一なる價格しか存在しない。

(b) 此價格は需要量と供給量とを一致させるやうな工合になつてゐる。

(c) 此價格は最大多數の購買者と賣却者とを満足せしむるやうな工合になつてゐる。

總て此等の法則は數字的系統に屬し、平衡の問題と呼ばれるものをなしてゐる。

註、マルサスの體系を正確に敘述するには二つの市場と云ふより、互に抱擁されてゐる三つの市場が存在してゐると云ふべきである。生産物が交換される市場に於いて此等の生産物の量は生産勞務（土地勞働、資本）の量の大小に依つて左右せられ同じく逆に生産勞務の量、少なくとも資本の量は新資本（鐵道、鑛山、機械）の生産率の大小に左右される。後者はまた、節約力に左右される。此所に第三の市場即ち資本化の市場が存在するのである。新資本は節約（即ち生産者が消費す可き生産物を購入せずに残しておいた収入の部分）以外のものでは支拂はれ得ないので、此等の資本の價格は製産された新資本の量と貨幣を以つて實現された節約の量を一致せしむるやうになる。——そして若し例へば資本を製出したより以上に節約を製産した時、後者の價格は騰貴するのである。

然し資本の價格が騰貴すること云ふことは言葉を換へれば、利率（マルサスの言を借りて言へば *Loyalty de l'épargne*）が減少することである。而して利率の低下は節約を減退せしむる。その結果資本化の市



場で需要と供給の平衡が變つて來、新資本の代價が下落し、利率が騰貴する等の現象が生ずる。

故に要するに「一方に最大總積効用、他方に價格の單位——生産物市場に於る生産物のそれでも、勞務市場の勞務のそれでも、資本市場の収入のそれでも——斯の如きは經濟關係の世界に於いて自律的に行はるゝ二重の條件であつて、恰も、その容積に正比例し、距離の自乘に反比例する引力が天體運動の世界に於いて自律的に行はるゝ二重の條件であるのこ其規を一にしてゐる。……何れに於いても二行の公式がその科學の全體を抱擁し、無限の特殊事象の説明を供給する」(ワルラス、*Economie politique pure*, p. 306)

要するに此新たな學派は經濟科學全體を交換の機械學に還元し、「最低苦痛を以つて最大快樂を得る」と云ふ快樂派原理が純粹なる機械學的原理、即ち「最少努力」の原則乃至は「力の節約」の原則と呼ばれるものに外ならないと同じく妥當なるものとしてそれを信じてゐる。各個人は利益の衝動に従ふこと、恰も玉突の捧で押された玉の如くであるとして考へられ、問題は總ての玉突き名人がするやう、玉がその相互の内乃至は椽に打つかつて惹起する形狀を計算するにある。(註)

註、エザウオース教授は類似的像を用ひ、經濟人を荷馬車引に與かれてゐる荷馬車に並べ、そして次ぎ

の如く云つてゐる「斯くの如き荷車と荷車引きの制度は社會科學の制度を構成するものである。」(Muller, *hemerical psychics*, p. 34) 且つ、他の部分に於て「社會機械學が天體機械の傍にその坐を占め兩者共に社會科學及び物理科學の最高點である最大勢力(若しくは最大幸福)の原理に立つて王冠を戴く日が來るであらう。」(上述書十二頁)

パレトオにとつては經濟學は欲望と障害との對立研究に外ならない。

他に一つの平衡の問題が存在してゐるのであるが、それは生産の作業に於てその各種要素は如何なる割合に隨つて結合さる可べきかを研究するにある。チェボンスは此作業を魔鬼的混合濟を壺の中で煮立たせるマクベスの魔法使ひの仕事と比較してゐる。之等の要素は出鱈目に混合されるのではなく、パレトオの言に隨へば科學に於て「決定比率の法則」と云ふ名で知られ、一定の不可變的關係に隨ふ以外に於ては一物質の一分子も結合出来ない法則に隨つて行はれるのである。事實を云へば企業に於ける生産要素の結合は水の構成に於ける酸素と水素との結合の如く嚴重なるものではない。資本を小にし、勞力を大にしても、反對に勞力を小にし、資本を大にしても同じ結果を得る事が出来る。併し、その各々にとつ



て最高利用率を得られ得る最善なる割合が存在してゐるのである。この最善なる状態は他の平衡状態と同じ手段に依つて、即ち兩者の究極効用が平衡となる迄勞力と資本の量を變化させて得られるものである。(心理學派の章、三章)企業の無限なる増大に限界を與ふるの一般にこの法則であつて、その要素の一つでも制限されるれば(敷地、資本、勞力、管理、販路等)他の要素が間接に制限せられるには——少なくとも企業の構成が跛行的となり、負擔的となるには十分である。パレトオはこの法則に非常な重要性を正しい理由をもつて與へてゐる。この法則の力を覗ふには、それが有名なる集中の法則と對立的であると云ふ事を思へば十分である。

今述べて來た生産の各種要素の間に於ける相互依囑性の例はこゝに存在するのではない。他に新學派の注意を惹いた多くの例、即ち若干のものが相互に補體的であるのでその價值を獨立的に變化する事は出來ない多くの場合が存在してゐる。例へば片方の手袋乃至は片々になつた靴が何れ丈の價格があるであらうか。

ガソリンのない自動車、硝子器のない食卓用具一組が何になるであらうか——これは消費の商品に就いて云つたのであるが生産の方面に就いても同様である。骸炭の價值は必然的に瓦斯の價值とされる。事實その一は他のものがなければ生産出來ないものであつて、副生産物に對する關係に於ける一切の生産物にとつても同様であり、前者を利用する可能性は後者の價值を低下せしめる。

#### 四、快樂論派學說批判

今迄要約して來た學說は至る所に於て勝利を齎らしたと云ふ譯にはゆかなかつた。英國、伊太利、獨逸、特に抽象的思索に何等の傾向がないと思はれてゐた合衆國に於て、この學說はその遵奉者を見出し、大きな雜誌は彼の爲に廣く開放された。併し佛蘭西は今日迄彼等に對して頑強に國境を閉ぢて來た。この學派の首領ワルラスは、外國に彼の教へを心好く迎へる環境を見出しに行く爲に、佛蘭西を逃れねばならなかつたのみならず、近年に至る迄之等の學說が説明され、批判



さへされた本乃至は講義を引用する事さへ出来ないのである。(註)

註、近年になつてコルリンはその大著 *Economie politique* の中で供給と需要に關する數理理論の爲に若干頁を割きランドリーはその *Manuel d'Economie politique* に於て最近オーストリア學派の理論を説明してゐる。我々は貨幣に關するアウスビッツの著書は既に述べた。最後にパレットオの *Manuel d'Economie politique* 及びスタンレー・ヂェホンスの *Theorie de l'Economie Politique* の翻譯は述べておく可きである。

若し佛蘭西が獨逸のやうに史學派に依つて既に制されてゐたと云ふのならこの反感も容易に理解されるであらう。若しさうであつたとすればこの二つの傾向の間には融合し難い氣質上の相違が存在してゐるからである。併し、我々が既に述べて來たやうに事實はさうでなく、佛蘭西經濟學者の大部分は引き続き自由學派の忠實なる遵奉者であつた。事情斯くの如くである以上、要するに新古典學派であつてその主張するところは先覺者の述べたところを更によく證明すると云ふ事に外ならないこの學派に對し、交換を止す可きやうに思はれる。(註)

註、Paul Lenoy-beau-tien は特に數理的方法に嚴しい態度を示してゐる。「それは純粹の與太であり眞個の疑問である……それは何等科學的根據も實際的適用も有しない。之れは精神の遊戲以上に出るもの

でなく……モナコの玉轉しで賭博を研究するに似たものである。」——「所謂代用の曲線とか云ふものは何等實際的能力を有してゐない。若し葡萄酒の價格が高くなれば、麥酒と林檎酒が飲まれるのである。

一切の生産物はその高低を制限する代用品を有する。」(*Traite d'Economie Politique*, t. I, h. 85<sup>te</sup>, III, p. 62)

併し乍らこの最後の批難は幾らか唐突の嫌ひがある。如何にして快樂論者が代用の法則を忘れてゐると批難し得るであらうか。而も我々が今既に述べて來たやうに代用の法則を發見したと迄云へなければ少なくともそれを無限に擴充したのは反對に彼等に外ならないのである。故に若し前述の法則と彼等の學說の間に矛盾が存在してゐたとすればその矛盾は彼等の眼を逃れなかつたと思ふ可きである。而も我々はこの矛盾を見出さない。麥酒と林檎酒は葡萄酒に代用され得る。併し之等の飲料の各々はその需要曲線を有するその中の一つから他へ移らねばならなくなる可能性は問題を複雑にする。云ふ迄もなく數理經濟學者はこの場合一つの鞠の代りに二つか三つの鞠を繰らねばならなくなる——勿論然りである。が併しこの點こそは數學の使用に最もよく適し、恐らくはまた一番さうしなればならない種類の困難に外ならない。種々なる價值に、即ち補體的物品、或は代用的物品の間に存在するこの連帶性は快樂派經濟學者が好んで研究を加へたものに外ならない。

(Pantaleoni, *Economia Pura*) 參照

數理經濟學派に對する批難は Simiand の *La methode positive en science economique* (Tome de *Metaphysique et de Moral* 一九〇八年十一月) に及び反對の方向に於てその辨護論はブウピアの *La methode*



*Mathématique* に見出される。

併し乍ら先覺者に教へ、安らかに眠らせる傍らとして考へてゐた原理を再び新らしく發見すると云ふこの方法は不快に思はれたからである。けれども之等の批難の大部分は遠去けらる可きである。最も頻繁に反復せられ最も平凡なるものは人の欲望乃至必要が量的に量られ得ないものであり、且つ數學的方程式に依つてそれ等のものを結びつけると云ふ主張は、自由意志と融和し難いものであると云ふにある。併し數理學派は決して斯くの如きことを主張してはゐない。反對に總ての人はその利益に自由に隨ひ、その總ての欲望を示すものと豫想し、この人が自ら用ひ得る手段及び打ち破らねばならない障礙物を越えて最大量の幸福を獲得する爲に如何にやつてゆくかと云ふ事を究める丈で満足してゐる。この學派は某々の者が麥を賣りに若しくは買ひに來なければならぬとは云つてゐないのであつて、只若し彼がそれをなすとすれば各人は出來る丈上手くやらうと云ふ固い意志をもつてそれを爲すであらうし、その時それ等の事は夫々の風に行はれるであ

らうと云ふ事を述べ、且つ之等の意志の結合は計算され得るものであると主張する。玉突き臺の上の球の運動は計算され得ないものであらうか、またその計算は如何なる點に於て玉突き人の自由を害ふであらうか。(註)

註、ワルラスは次ぎのやうに正しく明瞭に述べてゐる「我々は決して人間の自由の決定を計算しやうと企てた事はなかつた。我々は只その結果を數理的に表現しやうと試みた丈である」(*Elements Economic*

*Politique pur.* p. 232)

同じく數理經濟學者は我々の欲望を數字でもつて現はさうとは決して主張してはゐない。彼等がそれをしたところでそれは何等不當な事ではない。事實斯くの如きは我々が毎日行つてゐる事であつて我々の欲望を満足さす可き對象の獲得若しくは讓渡の爲に何フラン何サンチムかにその價格を決定してゐるのである。併し數理經濟學は數字を使用しないのであつて、その使用に供するものは代數的記號、即ち抽象的量に過ぎない。方程式を立てると云ふ事はその問題が解決され得ると云ふ事と、如何にそれが解決さる可きであるかを示すに過ぎない事である。經濟學者はそれ以上には出ないのであつて、決して麥の價格とか乃至は斯くの如



きものを、評價しやうとはしてゐない、それ等の事は投機家に委ねてゐるのである。(註)

註、我々は函数を變數、殘存要求の強さを前に消費せられた量と結び付ける正確なる關係を和らがないのであるが、第二の價値の總ては第一の決定された價値が相當するものであると云ふ事を認める(アウス、*Essai Theorie de la Monnaie* p. 45)

古典學派に反對な側、即ち史學派、干涉派、連帶論派、社會化派の側に於ては同じく峻烈であり、同じく妥當を缺いた批判を見出すのである。之等の學派は快樂論派の學說中に古いマンチエスタア學派若しくは樂觀論派の學說の改正の試みを見出し——同時に彼等の總ての用具、個人主義、唯我主義、自由競争の徳、個人的利益と一般的利益との調和、効用と呼ばれる神秘なる實在體の名の下に最も哀れな賃銀、利子、地代の妥當化、一言にして云へば現在經濟制度を可能なる最良だとする證明——此回生はそれが純粹科學たることを要求し數學の無謬性を主張してゐるだけ危険でなければ少なく共耐へ難いものである。

此非難もまた漫畫的なるものに外ならない。新たな學派が其務として古典學

派の事業を繼續しやうとしたと云ふことは確實であつて、その點に何等非難を加へることは出来ない。一つの科學が眞個であるかないかはそれが眞直ぐな道、王道をとつて野の間を走り廻つて迷子と云ふ小さな路をとらないと云ふ點に依つて認められるものである。經濟科學に關する點に就いて云へばそれに進歩を與へるのは、各時代にそれ迄に得られた結果を總て抛擲して行はれるものでなく、正しいものを收め、悪い點を棄てて行つて行はれるのである。新經濟學派が爲さうと努力してゐるものはそれに外ならないのである。

併し、平衡若しくは究極効用の理論は今日の經濟體制を何等妥當化する意圖をそれ自身に於ては含んでゐないのである。(註)——この言葉を辯護的、基準的意味にとつて——それはこの體制を説明してゐるのであつてこの二つは全く違つたものである。只此説明は、自由市場に於ける事情は交換者の最大多數が極大利益を得られるやうに整へられてゐると云ふ樂天論的主張を含んでゐる。然し此利益と云ふ語は快樂論的意味に取らるべきである。それは何等賞罰權の意味も、交換



の可現的結果乃至は先在的條件に對する何等の考慮も含有してはゐない。斯くして古代に於けるジャコブとエザユの交換、即ち後者がその長子權を一椀の豆料理と交換的に譲渡した交換は兩人の各々に對し（皆に信せられてゐるやうにジャコブに對してはなくエザユに對しても）一定の條件と兩立し得られる最大量の快樂を實現したのである。事實エザユは飢餓のために斃れやうとしてゐたと云はれてゐるのであつて、これ等の事情の下に於て、彼が腹を満し得る何ものかを有することが出来たと云ふことは、彼にとつて非常に有利なことであつたのである。且つジャコブもまた豆のかはりに、その兄に一瓶のアブサント酒を賣つても好かつたのであつて、快樂論の見地からは此交換も同じく最大量の満足を實現し得るのである。事實、究極効用(Ophelimité)は何等衛生的、道義的な意味を有してはゐない。

註、此批判の更に深い論考に就いてはリストの二論文 *Economie optimiste et Economie scientifique* (*Revue de Métaphysique et de Moral* 一九〇四年七月號、一九〇七年九月號所載)參照。

此場合快樂論者が作り得る唯一の評價は、豆を與へる者がジャコブ一人でなかつたらエザユは更に有利なる取引をなしたらうと云ふことである(註一)此所に快樂論學派が獨占より自由競争の優越性を主張する意味が存在してゐる。然しエザユがジャコブに依つて搾取されなかつたと證明し乃至は、その時以來その同胞を搾取する者を正當としやうとする意圖を此學派に冠してはならないのである。

(註二)

註一、或はまた若しジャコブが自ら利用出来ない程澤山の豆を所有してゐたら、獨占制の下に於いても購買者には有利な條件が存在し得るのでエザユは更に有利なる取引をなしたであらうと云ひ得る。  
註二、パルトオは云ふ、「我々の證明をなすためには一切の經濟財が所有されてゐるを想定したのであつて、今若し、先に證明した定理から、經濟財の取得は最大量の幸福を生むと云ふ結論を引き出すとすればそれは不當前提論をなすことになる。」

同じく利子に就いてもベエム・バヴェルクは其名を擧げた有名なる理論に於て特に彼が利子の存在の説明を研究し、決してその合理化を求むるものでないと云ふ事を斷つてゐる。彼は數世紀以來發見に努められた利子の基準的説明を排折し、



利子が資本の生産率に參與するとか、資本の貸借價格であるとか、搾取される債務者の財布から取り上げる献金でもあるとか云ふものでなく單にそれは時の價格、言葉を代へて云へば現在財とその未來財との間の價値の相違であると證明しやうと努力してゐる。これは一つの交換事實であつて、現在財を未來財に交換する事に外ならない。一年後に支拂ふ可き百フランは今日支拂はれた百フランとその價値を等しくしないので、その間の平衡は一年後に受取らる可き百フランの秤に利子と呼ぶる、若干の補足價値を加へるか或は今日受取る百フランの方の秤に割引と呼ぶる、部分を取り去るかしなければ行はれないのである。(註)

註、この理論は總ての快樂論經濟學者に依つて承認されてゐると云ふ譯ではないのであつて、就中マルサスに依つて反對され彼はその著 *Economie pure* 第四版に於てそれを批難してゐる。最近の著書の中ではランドリーの *Interet du capital*(1904)及びフイツシャー教授の *The rate of interest*(1902)は、この理論を破壊する爲ではないが、各人にその將來の收入の評價を決定する感情に更に巧緻なる分析を加へてこの理論を修正しやうとしてゐる——この評價(time preference)は各人の財産の條件及びその他の條件に從つて變化するものである。

一職工の生産率に依つて決定された給料の法則は今述べて來たやうに殆ど樂天的なところはなく寧ろ黃銅時代の法則を肯定してゐると云ふ可きである。事實それは最後に用ひられた職工——この職工の後、企業家は他の職工を採用せず、一人でも余計に採用すればそれ丈損失となるものである——がその生活費以上のものを生産せず、また與へられないと云ふ事を含んでゐる。

要するに快樂論學派は分配上の何等の規則も有せず、また提案しやうともしなかつたのである。この學派は共同分割者を知らず、只その價値を量らるゝ生産勞務丈を知つてゐるのである。而して事實上各生産單位に於て資本に歸す可きものと、勞働に歸す可きものが何であるかを知ると云ふ事と、資本家と勞働者が不當に取り扱はれてゐるか何うかを知ると云ふ事とは全然別な事である。

且つ快樂論者が放任主義の辯護人でなかつたと云ふ最良の證憑はその首領のつけた態度である。只オウストリア學派が社會問題とか勞働問題とか呼ばれてゐるものに可なり無關心な態度を示してゐるのは事實であるが(註一)この學派は正し



く純粹經濟學に沈潜する權利を有してゐた。併しこの學派の他の首領は彼等の方法が決して彼等をして樂天論や無爲主義に陥らしめはしなかつたと云ふ事を十分に示してゐる。ヂエボンヌはその著 *Social Reform* に於て斷固たる干涉主義者たる事を示してゐるので云ふ迄もないがワルラスは農業社會主義の先人をなしてゐる。彼が効用の世界から正義の世界に移つた時、(彼は特にこの二つのものが異つた世界である)と云ふ事を強く力説してゐる。彼は自由競争制を出来る丈實現しやうと努めてはゐるが、併し如何にして? 自由學派のやうに放任主義に依つてであらうか。決してさうではなく、一切の獨占の廢止に依つてである。——先づ他の總ての獨占の根柢である土地所有權の廢止を辟頭としてゐる。彼がその *Economie Sociale* に於て説明してゐる體制に隨へば、土地は總て國家に屬し、總ての租税は廢止さる可きであるとしてゐる。この二つの改革は相關聯してゐるのであつて國家が租税に代ゆ可きものは土地の地代に外ならず、且つ兩者とも自由競争を可能にすると云ふ目的を有し、この點から各市民にその勞力の全生産物を確實に收

得せしむる目的を有する——この生産物は今日の制度にあつては二重の先取控除即ち地代の形式のもとに於て土地所有者に依つて搾取されるものと、租税の形式のもとに國家に依つて搾取せられるものとに依つて、削り取られてゐるものである。(註二)且つ若し我々がワルラスの經濟體制の平衡點は生産費と販賣價格との一致が總てに就いて實現される點、その結果利徳が零となる點であると云ふ事を省みれば彼等が現在經濟制を讚美する等と云ふ事とは甚だしく距りを有してゐると云ふ事が理解されるであらう。

註一、我々はベエム・バヴェルクの理論に就いてこの事を證明して來た。且つ古典學派は次ぎの點、即ち *Councille-Saneuil* 及び *Cherbuliez* が特に力説したやうに科學と技術、純粹經濟學と應用經濟學とを嚴格に分つと云ふ點に於て古典學派の一方方法を支持してゐる。パレトオが巧みに正しく云つてゐるやうに究極効用の最大量は方程式に現はし得るが正義の最大量はさうはゆかない。

註二、ワルラスに従へばこの制度は「科學の理想なる」自由貿易の設立を容易にする利益がある。それは各國間に於ける租税負擔の不等、土地豊饒性の不等から引き出されて來た主なる抗議をなくすからである。自由貿易制は租税の廢止と土地の國有を含むものであつてこの條件で資本と勞力は自由に流動し、その最も有利に使用され得るところに赴き得るのである (*La Paix par la justice sociale et par le*



*Misère-changement, Questions pratiques de Législation onnière* 一九〇七年九月—十月號所載)

パンタラインは更に、超絶的純粹科學の世界に飛躍し、代數方程式の至る部分に於いて十符合を一符合に變へるだけで、その結果に何等變更を加へず、全々利他主義的原理を以つて全々利己主義的原理に代へ得ると聲高く揚言してゐる。萬人が利他的になれば利己主義と同一結果を與へ得る。利益を競ふ代りに利他を競ひ、犠牲の交換が効用の交換に代るのであるが、それを統制するのは同一法則であると云ふにある。凡て斯くの如きは快樂論者に大して重要なものではない。一定の經濟状態が與へられた時、問題は單にその結果を計量するにあつて、恰も一つの機械が與へられた時技師はその運轉を計算せねばならぬと其規を一にしてゐる。(註)

註、同じくアメリカの經濟學者の間にも快樂論的方法はその綱領に就いては完全なる自由を與へてゐることが見られる。此方法のためにクラーク教授が現在經濟制に對する一種の讚美、自由競争の効力に就いての信念に導かれたとしても、同じ此方法のためにパルテン教授は可なりリストに似たやうな強い干渉主義に導かれてゐる。

快樂論派に加へられた最も重大なる批難は結局に於いて此學派が元から知れ切つた事の外何にも發見したものはないと云ふにある。——然して彼等は反駁する。それまでは好く知られてゐず、單に主張に止まつて證明が缺けてゐた。視諭され、脅威された眞理を證明すると云ふことは科學上の進歩に就いては嚴密な意味に於ける發見と同じく重要な貢獻となるものである。科學の中の最も完全なる天文學は斯くの如くして進歩を遂げたのである。古典經濟學者は、自由競争制が最善のものであると云ふやうなことを、主張するにはしたのであつたが、その理由及びそれが行はるべき條件を證明することは出来なかつた。而して數理經濟學者はその理由を發見したのである。——即ちそれは交換者の各々に最大量の満足と最低量の犠牲を實現するからである。また、所謂需用供給、單一價格、生産費、賃銀、利子、地代等々の法則に就いても同様である。それは恰も、これまで直覺的主張(註)に過ぎず、明確なる形態を有せず流動的理論に過ぎなかつた眞理に排撃出来ない嚴重なる證明を與へたやうなものである。經濟は嘲侮を受けて來それは骸骨



に過ぎないものではあるが組織された生物體のやうに此科學を立たしめ歩かしめ得たものである。此點に經濟科學の一進歩が存在してゐるのであつて、それは生物學上の進化に於いて無脊椎動物から脊椎動物への過程に依つて示された進歩に比較すべきものである。

註、「經濟學が一科學となるのは、殆ど今日まで單に安價に主張するに止めて來たものを、經濟學が證明し得るに至つた日である」(ワルラス、*Economie Politique pure*, p. 427.)

最後に一つの抗議——と云へなければ少なく共疑惑とでも云へるものが残つてゐる。即ち此等の眞理を快樂論者が云ふやうに決定的に證明されたものと考へたとしても、此科學は其所から彼等が信するやうに多くの利益を引き出し得るであらうかと云ふにある。

快樂論者は、その方法の力に關しては甚だしく謙遜を缺き、空想社會主義乃至はフリーエーの有してゐたやうな獨斷的矜持を此點では免れる譯には行かなかつた。例へばベエム・バヴェルクは生産費に關する新學說を「經濟學に取つては全く

根本的なもので、天文學に於いてコペルニツクの學說がプトレメの學說に取つて代つたと同様なものである」(註)と揚言して先にはまたワルラスの平衡說がニュートンのそれに比較されたのを見たのである。此等の揚言と得られた結果との間には可なり大きな距りが存在してゐる。

註、ヒエム・バヴェルク *The Austrian Economists*, op. cit. 反對に此學說の遵奉者の一人ランドローは「今日オウストリア學派の活動は、殆ど涸竭したものと考へても差支へない」とされてゐる」と述べてゐる(*L'Ecole économique autrichienne*, Rivista di Scienza, 1907) 僅か三十五年の後に? それは餘りに果敢ない運命ではないか。

非常に巧みな言葉が道破してゐるやうに數學は運ばれて來た麥を粉にする水車小屋のやうなもので、この麥の價格を知ると云ふ事は依然として残つてゐるものである。今此處で數學の機械からくりの中に投げ込まれるのは抽象名詞の袋全體であつて——唯一市場價格、快樂論的原理に依つて動かされる人、慾望の見解から各交換者は等值的であると云ふ事(註)資本と勞力との遍在性、代用の絶對的容易性等——そこから出て來得るものは其處に投げ入れられたるもの、即ち純粹なる理論經



濟學、フリーエーやサン・シモンや無政府主義者の社會と同じく現實社會から離れその實現は同じく確實らしくなく、同じく奇蹟的なる革命を豫想する社會に外ならない。且つ快樂論者は彼等が自由競争に就いて論ずる時、常に（それは到着したのである）と信じ、それを卒直に認めてゐると云ふのは彼等が古典經濟學者の上に出たものであるとも云へる。

註、「同一なる欲望強度變化の法則を觀察されたる個人及び各生産に適用」す可きである（アンチペツ  
t. In Monnaie p. 93）

且つ數學の使用に反對する總ての之等の批難はそれを知らない經濟學者に放たれてゐると云ふ事を忘れてはならない。そして數學を使用し得るものに依つて得られた結果に對し厭味を並べると云ふ事は不快であると我々は考へる。故に我々は數學の使用が學說史上忘れてはならない一時期を劃してゐると云ふ事に吝ではないが、自分自身この學派及び古典學派の首領であつてそれを判斷する上に若干の權威を有する一經濟學者の忠言に依つて結論を與へる事にしたい（註一）「幸に

數學を經濟學に適用すると云ふ事は短かく簡單で、且つ僅かな記號を用ふる適用にあつて、それは廣汎なる經濟界の無限の相貌を現はすと云ふよりは、寧ろその或る部分に輝いた光を與へるのを目的としてゐる。（註二）

註一、マーシャル *Distribution and Exchange*, *Economic Journal* 一八九八年三月號所載。

註二、且つ快樂論者は數學的若しくは抽象的方法の使用に提はれてゐる譯では決してなく歴史的若しくは生物學的方法の使用が合法的であると云ふ事も決して認めない譯ではない。只後者は正確科學を創設する事を主張し得ない。マーシャル教授は特に生物學的方法を選び、出来る丈經濟現象の表現として、表や曲線を用ひないやうにしてゐると斷つてゐる。（前述誌五〇頁）



## 第二章 地代の理論とその適用

古典理論の一般的復興の中で我々は既にその一部をなす近代快樂學派の研究を述べて来たが他に特別に序述に價する一つのもが存在してゐる。それは地代の理論である。この理論は經濟學者の考察中の大部分をとつて来たのであつた、特に十九世紀の最後の三分の一年間に於てその感がある。そしてこの理論が受けた發達は理論的にも實際的にも重要性を有する。理論的重要性とは——一特殊現象に際して作られた經濟地代の概念、土地所有者の収入は經濟世界の多くの不明確な點を明らかにする力を有する非常に種々の適用が可能であるとして示された。就中それは今迄我々が述べる機會を有しなかつた一種の収入、即ち資本家の利子と截然と區別せられて理解された企業家の利得を説明する力があるものとして現はれた。

實際的重要性——土地の地代は特に「不勞收入」即ち言葉を変へて云へば勞働に依つて合法化されない収入である。この事實の上に架構される社會理論は忽ち視はれる。總ての土地の國有性、地代社會化案の總てはリカルドの理論に立脚し、之等の體系は非常にその數が多い。

今我々はこの章に於て地代論をその二重の方面から研究しやうと思ふ。即ち先づ科學的理論とし、且つ現象の解釋に依つて先立たれたものとしてこの理論が經濟學者に依つて與へた發展を考察し、次いで社會改善の爲に提案されたその適用を考察し度い。我々の目的は就中最近の目的を序述するにある。併し乍ら屢々我々は更に古い理論に觸れねばならないのであつて、スチュアート・ミル、リカルドに溯らねばならないのである。事實斯くの如きが思想の進化を理解させ得る唯一の手段である。

## 一、地代の概念の理論的範圍



先きに我々はリカルドの地代理論を破壊する爲にケリーとバスタアがなした無力なる努力に就いて述べて來た。勿論この理論は批難の餘地を有してゐたが、それは遠ざける爲に彼の反對者達は土地の價値の事實さへも否定しやうとするにさへ至つた。

この主張は十九世紀の最も特質的現象、即ち大都市に於ける地價の騰貴に依つて完膚なく打ち破られたのである。十九世紀は大都市の世紀であつた。如何なる時期と雖も斯くの如く都會中心地が繁榮を示した事はない。英國、合衆國、獨逸、及び低い程度にはあつたが佛蘭西はこの程度に携つた。限定せられた地域内に人口が急速に集中したので、その結果として土地に未層有の餘剩價値を與ふるに至つた。シカゴに於て人口が五十人を越えなかつた時、即ち一八三〇年に二十弗で買つた四分の一英畝は一八三六年に二萬五千弗となり、一八九四年の萬國博覽會の後百二十五萬弗に上つたと云ふ話には有名なものである。ロンドンに於て一八七〇年と一八九五年との間に於て土地所有者に拂はれた地代の増加は七百七十

磅と評價されてゐる。一六五二年、下院が四十二萬五千法で買つたハイドパークは今日約二億法の價値を有してゐる。巴里に於て d'Avenel は Hotel-Dieu に屬する土地が一七七五年一米四方が六法四十仙であつたのに今日では一千法となつてゐると述べ(註一) ルロア・ポウリューは凱旋門附近に於て一つの土地は一八八一年から一九〇四年迄の間に即ち二十三年間にその價値が二重となり、一米平方が四百法から八百法に上つたと述べてゐる(註二) 之等のものは孤立的なものではあるが、一般的な明らかな現象の非常に代表的なものである。

註一、之等の引用は非常に内容の多い小冊子アインザーの *La municipalisation du sol dans les grandes villes, 1898*(Giard et Brière), 又は *Devoir social* 誌第五卷から採つたもので、且つ此雜誌はアルフレッド・ボンネット指導の下に一八九二年から一八九八年まで Giard et Brière から出版されてゐた興味あるマルクス派の雜誌であつた。

註二、ルロア・ポウリュー *L'art de placer et gérer sa fortune, p. 34.*

この爲にケリー及びバスタアは僅かな改宗者より見出さなかつた。大部分の經濟學者はリカルドの概念を忠實に遵奉し、若しくは土地から個有な収入を否定し



ないので、それを深く究め發達させる爲に努力したかの何れかであつた。斯くして地代理論の二重な、しかも不思議な進化が發生したのであつた。

一方に段々と地代に類似する示差的の収入が順を追ふて發見され——地代は現代の有數なる經濟學者の表現に隨へばその爲に「個別的な事實として最早現はれなくなり、非常に廣い範圍に亘る主なるものとして現はれて來た」(註) 他方に(この第二の進化は恐らく第一のものよりも更に奇妙である。)リカルドに於ては地代は特殊な條件に依る(土地の豊饒性の不等及び遞減收穫の法則)經濟的異常として示されてゐるが——近代理論家はそこに價値の法則の規則的作用の常態的一結果より見ないのである。地代及びその他の類似的収入は斯くして價格の一般理論中に嵌込まれ、地代の特殊理論は古典派に依つて多くの努力の後組み上げられたのであつたが、不用となつて霧散したやうな形になつた。十九世紀を通じてあれ程も偉大なる役目を演じた此特殊理論は數年の後には單なる史的骨董品となる運命を有するのではあるまいか。

註、マーシャル *Principles* 初版の序文。

此二重の學說上の進化は非常に多くの經濟學者が時を同うして加へた作用に由因するものである。只その一人から他へ移つて規則的に進化を記して行くことは困難を伴ふので、今此所ではその進化自身を敘述し、それに寄與した著者の名を、その時々に従つて記しておくに止める。然し原文は出来るだけ引用したいと思つてゐる。(註)

註、今此所で簡畧にその跡を記してゐる進化の敘説が見出される好著は既に古くなつたエドワード・

エラン *Versuch einer Kritischen Dogenngeschichte der Grundrente* (Leipzig, 1868, 399 p.) 特に「*アン*・

フアンソール *La theorie de la rente et son extension recente* (Montpellier, 1908, 318 p.) 及び「*ミヌモラー*の

*Jahr buch*, (1907, p. 31; 591) に掲載されてゐる「*ミヌムペター*の非常に興味ある論文 *Das Rentenprinzip*

*in der Vertheilungslehre* 等がある。

(a) 先づ第一にと云ふべきは土地所有者の収入の傍に全く同じ一群の示差的収入が間もなく見出されたことである。異つた土地に對して用ひられた同一量の資本、若しくは、英國經濟學者の言葉を借りるとすれば同一「分量」の資本及び勞働



は異つた収入を齎す。リカルドはその原因として土地に特有なる現象、收穫、遞減地味の不等、及び市場への距離の不等を擧げてゐる。然し資本及び勞力の不等生産率が示されるのは敢て農業を唯一のものとするものではない。

鑛山、株鹽、漁業——一切の自然の富の資源——は同一状態に在る。その生産率は同一ではなく、耕作地と同じ相違を示す。その市場に對する位置も同一なる變化を示す。そのために、鑛山、株鹽物、漁業地の中、最も生産率が大であり、好位置を占むるものは悪い位置のものに對し示差的収入を有する。リカルドは既に鑛山に就いて此事實を指摘してゐるがスチュアート・ミルは更にそれを力説してゐる。(註)

註、リカルド *Principles* 第三章、鑛山に就いて。スチュアート・ミル *Principles* 第三篇、五章、三節參照。

それだけではない。土地は單に耕作に用ひられるばかりでなく、尙住宅地として用ひられる。この用途は他の用途に劣らず重要なもので、異つた住宅地相互

間には異つた耕作地相互間と同一相違が存在する。云はば商業生産率とでも云ひ得るものに相違があるのである。「小さな村の住宅地使用料は、とスチュアート・ミルは云ふ。(同一廣さの野の使用料と大して變るものでない。然し *Chearpside* (ロンドンの最も繁華な通りの一つ)の家の敷地の使用料は原野のそれを非常に超へ、その評價は最も繁華な場所に於いて金を儲け得る非常なる容易性を以つてせられる。斯くして此等の敷地の價値は「地代の普通の原則に依つて規則される」(リカアドの弟子は述べてゐる。(註))

註、スチュアート・ミル 既述書。

然し何故に我々は土地とその用途だけに局限される必要があるか。工業に於ても同一なる生産率及び位置の相違は資本に對して現はれて來る。工場が異なるに連れて其資本の多少に依り機械に優劣があり、建物管理に善悪があり、分業の程度に大小があつて、前者の生産率は後者を超へ、追加利得を與へる。(註一)——同様に職工の間にあつても、その生産率は不等であつて甲は乙と同一なる疲勞を



以つて更に多くの仕事を果たし、更に多く稼ぐ。これはこの職工にとつて追加的儲であり、示差的利得である。——相違するのは單に職工の能力だけではなく猶企業家能力にも存する。「手腕上の利得」はこゝでも企業の種々な成功に及びそこから引き出し得る不等なる収入に根本的な役目を演ずるのである。「生産者若しくは商人が他に優れた商業的手腕若しくは他に優れたその企業組織に依つて得る追加的利益はその性質に於て全く地代に類似してゐる。」これはスチュアート・ミルの言であるが(註二) この時彼は既に我々が知つてゐるやうに一八三六年セニオルがその著 *Economie Politique* に於て既示した觀念をとつてゐるに過ぎない。後者はその著書中に於て「肉體若しくは精神の異常能力」に依る一切の「異常收入」に *Rente* の名を與へてゐる。(註三)

註一、既に一八三二年ヘルマンはその非常に優れた名著「*Statswirtschaftliche Untersuchungen*」(Munich, 1832, p. 166) に於てこの例を指摘してゐる全く類似的(地代に)なる場合は採用を困難とする外國の機械を動かす時、その國に起る——例へばその機械を生産する國に輸出禁止令が設けられた(場合これは當時英國機械に對して行はれてゐた)……今こゝで之等の機械をもつて製造された生産物の價格が騰貴することを。若しその國に於て安價ではあるがその構造の不完全な爲に同一能率を有しない機械より作られないとする。——この場合價格は優良機械(外國品)に依る生産費よりも高くなる。斯くして優良機械所有者には價格の騰貴に依つて彼等に與へられた利益が確保される。——同じくマンゴールド(*Die Lehre vom Unternehmergewinn*, Leipzig, 1855)は五五頁に於て次ぎの如く述べてゐる。「異常利得は農業に用ひられた土地に最も明らかに廣く現はれてゐる。併し、増加し得ない一切の資本若しくは更に高價なる他の資本に依つてより代へ得ない、即ち生産率の低い資本に同じく明瞭に現はれてゐる。「リカルド自身は恐らく資本の異常利得に考へ及んだのであつて次ぎの如く述べてゐる。「加工生産物でも鑛山若しくは土地から採つた生産物でも之等のもの、總ての交換價值は生産に必要な最低努力に依つて決定されるのでなく、常に悪い條件の下に於てそれを生産してゐるものに依つて必然的に費されなければならない最大労働量に依つて決定されるのである。こゝで悪い條件と云ふ意味は生産物の需要量を生産する爲に止むを得ず従はねばならない條件である。」(既述書、二章二七節)——然し乍ら他の英國經濟學者が殆ど資本の異常利得に就いて述べてゐないこと云ふのは、彼等にさつて異常利得は常に土地との類似に依つて生産率の自然的相違を含み、人の實興に依る相違を含みないからである。

註二、*Principles* 第三篇、第十章、第四節

註三、事實彼は次ぎの如く云つてゐる。給料はその勞力に普通率を以つて拂はれてゐる以上これは明らかに一つの剩餘(示差的利得)であり、自然の自發的賜である剩餘である。(キヤナン *Production and Distribution*, p. 198 に引用されたもの)



ミル及びセニオルに見出される簡單なる指摘が展開されて、企業家利得の理論を産むに至つた。この理論に於ては一切の利得は除外例的能力に對する報酬として考へられてゐる。それはアメリカ人ウオーカーの理論である。彼は既に一八八一年その *Traité d'économie politique* に於いてそれを敘べ、更に一八八七年 *Quarterly Journal of Economics* に於いて、更に微細な點に亘つて論じた。(註)

註、*The Sources of business profit* 既述誌一八八七年四月號所載。

既に指摘しておいた通り、アメリカ經濟學者は幾らか樂天論的傾向を有してゐた。

ケリーは既にその例を示し、ウオーカーはまた更にその新たなる證據を與へてゐる。ウオーカーは既に一八七六年に發表した著書 *The Wages question* (給料の問題) に於て給料の基調から職工の爲に悲觀的な理論と戦ひ成功を修めた。彼はそれに代ゆるに少なくとも部分的には企業が好き生産率に従屬せしむる理論を以つてした。然し乍ら人の意を安んじさせる爲には工業の遞増的生產率と共に給料が

増大すると云ふ可能性を證明する丈では十分でなかつた。その爲にウオーカーは社會主義者に反對し利得は決して職工搾取の結果でないこと云ふ事を證明しやうとしたのであつたが——地代の理論は最も優れた證明手段を彼に供給したやうに思はれた。

ウオーカーは「利得」と云ふ言葉に企業家に特殊な報酬の意味を與へ(註一)その資本に對する利潤を含ましめなかつた。この點に於て彼は英語を使用する經濟學者の大部分と異なり、後者は大陸に於て採用された習慣にも拘らず、長い間執拗に企業家と資本家との判然と分れた機能を混同してゐた。ウオーカーは同じく企業家の職能を單なる指導と管理の役目に局限するに反對し、若し斯の如くであれば月給を拂つた指導者の俸給と同じ俸給を受けるに過ぎないであらうとした。企業家の職能は更に高いもので、工業の一切の波動を豫想し、生産を一致させるやうに組織し、一言にして云へば供給に應じたる生産を爲さしむるにある。企業家は經濟進歩の眞個の「指導者」であり。工業の眞個の「總帥」である。



註一、ウォーカーは英語國民の著者の中で第一にこの區別をなし、利益を云ふ言葉を狭い意味に使つて利潤と給料とをそれから切り離したのである。(Wages question 第二版、一八九一年、二三〇頁以降)彼が利益から監督及び指導の給料を分つてゐるのは之等の監督上の職能は依託し得るものであるが企業家の特殊なる機能、生産を需要に適應せしむる事、は特殊なる報酬即ち利得丈を含むからである。——奇妙なる事は各國の經濟學者が互ひに孤立的に暮してゐると云ふ事であつて、ウォーカーはその父アマサ・ウォーカー以外の經濟學者は誰も知らないと言明してゐる。その父は彼以前に於て企業家を資本との機能を分つた。而もセイは既にこの事を非常に明瞭になし、十九世紀初頭以來殆ど全部それを採用した。

註二、彼が如何にそれ等の機能を要約したかは次に現はれてゐる。専門的手腕、商業上の知識、行政的才能、責任の負擔、不慮の事件に對する用心、生産にその形態を與へ指導する事、工業機械の組織と管理」 Wages question p. 245

さうであるとすれば、とウォーカーは云ふ。工業企業の間には農業の間と同じ開きが存在してゐる。或るものは何等の利得もなさず、一度びそれ等の資本、職工に基準率の報酬を與へると、企業家にはその企業を抛擲させない丈より與へない。他のものはそれより幾らかよくなり、次いで除々たる楷梯を経て平凡なる企業から更に繁榮なる企業に移り、次いで企業家に無限の利得をば齎らす企業に達

するのである。利得と云ふものは職工の給料からとつたものであらうか。決してさうでないのである。利得が非常に強い所で、給料も同じく高いと云ふ例は屢々見受けることである。然らば他の總ての部分が平等であると假想した時、何處から利得は來るのであるか。只企業家の個人的優越能力に由因するのである。これ等のものは全く地代に似た剩餘であつて、「完全なる自由競争制の下にあつてはと——ウォーカーは云ふ——各繁榮企業者は一定の資本と勞力との量を以つて、最劣種類の企業家、——即ち何等利得を獲得しない種類の企業家——が同一なる資本、勞力の量を以つてする基準生産量以上に生産する富の追加的の量に依り正確に測られてゐる報酬を手にするのであつて、それは地代が、最低なる生産率を有するに過ぎないが、市場に供給する上に必要であり、且つそれ自身に於いては企業利得を生まない土地に投資された同一量の資本、勞働を以つてする生産量の上に出てゐる優良土地の生産の差を示してゐると同じである」。(註)

註、ウォーカー 既述誌二七八頁。



ウオーカーの理論は多くの眞理を含んでゐる。然しそれは彼が考へてゐるほど  
嶄新なるものではない。先に述べたミル及びセニオルの見解がそれを證し、且つ  
セイを始めとしヘルマン(註一)に觸れ、マンゴールドに移る大陸經濟學者を少な  
からずその論據として引用し得るのである。他方に於いてウオーカーの學說是最  
近經濟學者の間に完全なる勝利を齎す譯には行かなかつた。勿論現代經濟學者の  
大部分は利得に部分的には企業者の個人的素質に由因する企業利得形態を認めて  
はゐるが、同時に彼等は此個人的素質を利得の唯一要素とは認めてゐない。(註二)  
時として彼等はマーシヤル(註三)の如く、それ以外に利得の中に危険に對する保  
證取得を代表する部分と、企業家の知的教育に必要な費用を償ふ目的を有する部  
分とを見出してゐる。(註四)或はまたウオーカーのやうに彼等は此二つのものを  
却け、靜止状態(即ち生産の完全平衡状態に於いて)企業家は何の損得もしないと  
認めてゐる。斯くして利得の源泉は「動的」收入、即ち進歩的社會に於ける平衡の  
不斷の移動から發生するものに外ならない。只此動的収入は非常に變化に富み、

その總てが企業家の個人的素質に由來するものではない。

註一、ヘルマン *Untersuchungen* p. 206, J. B. Say 既述部分參照

註二、パンタライン (*Economia pura* 第三篇、第四章)はウオーカーの理論に殆ど何の保留も附せず  
認めてゐる唯一の著者のやうである。

註三、ウオーカーに對するマーシヤルの批判は *Quarterly Journal of Economics*, 1887, p. 479 及び其著  
*Principles* 第四版、七〇五頁の註に見られる。彼は猶英國風の傳統に従つて依然利得に企業家は特に屬  
する資本利子に對する利子を含ましめてゐる。

註四、此最後の區別は尙パンタラインも行つた。(利得は熱心なる研究、乃至は永い準備に依つて得た  
優越なる手腕に由來することもある。此場合問題は利得の一形態と云ふよりも非常に割の好い特質的利  
得と云ふことになり、一般的に資本の投下を規制する規則とは非常に異つた法則に従ふ(既述書三篇第  
四章)。遂に彼は利得に危険に對する保證先取を加へてゐない。若しも先取が十分に危険と嚴密な比率を  
以つて計畫され、ばそれは一定年限の後平均して後者と等しくなり、純粹利得は密なるからである  
と云つてゐる。(上述書)

クラーク(註一)のやうな他の人はワルラスと共に利得は異常利得に依つて構成  
されてゐると認めてゐる。然し彼等は動的利得の旁に靜止状態に於いては異常  
利得の存在を認めてゐる。彼等は餘りに現實に遠ざかつたものとしてワルラスに



必要であつた總ての企業に對する同一元價の理論を排斥した。彼等の考へでは損得のない企業は最も悪い條件中に於けるもの（英國人の言葉に従へば生産費が外よりも高い企業者）に止まる。その他のものは一切の平衡状態の異動がない時でも先に我々が列示した總ての條件、市場の近接性、完全なる機械、資本の集中に由來する一群の利得を收め得るのである。之等の經濟學者にとつて利得はマーシャルの表現に隨へば「複合」収入を構成する（註二）斯くの如く經濟學説はウォーカーの理論を無條件で承認はしなかつた。且つ彼の理論中に排他的な誇張に先する點を見るには株主に對する配當が利得から割取する事を思へば十分である。この場合その配當は株主の除外例的能力に由頼すると云ひ得るのであらうか。（註三）

註一、クラーク *Distribution of Wealth* (1899) 及び *Essentials of economic theory* (1908) p. 156(,) の佛譯は *Principles d'economique* (1911) の表題を附されてゐる

註二、且つ企業家はこの複合收入の一部を割いてその敷地の所有者、その資本を出してくれた資本家及び彼に助けを與へた優秀熟練工に與へなければならぬ場合もある。然し如何なる部分をもつて？これは非常に微妙な問題であつてマーシャルはその著 *Principles* 第五編第十章、第六編第八章九節以降に

於いてそれを論じてゐる。

註三、ウォーカーは恐らく配當は單なる資本の利子であること云ふかも知れないが、この概念は受け入れ難いものである。

利得の説明は地代論の最も興味ある延長である。併し、それが唯一の延長であると云ふ譯ではない。リカルドの學説から出發して要するに經濟界に於ける種々な地位と同じく種々な収入が結局發見されたのである。普遍化された地代論は合鍵のやうなもので、それに依つて收入の點に於ける總ての個人的相違は説明されてゐる。事實に於て、——とミルは云ふ——一競争者がその相手に對して有する總ての利點は、それが自然的であらうと後天的であらうと（註一）或はまたそれが個人的なものであらうと、社會組織の結果であらうと……それはこの利點の所有者を地代の收益者と類似させる。斯くの如く古典經濟學はその富の分配の理論中に實際生活の多様性の幾分かを取り入れたのであつて、その前に於ては利率の平等性と給料率の一律性との嚴格なる學説の爲にそれは余りに除外されて來たものである（註二）地代理論はこの學説の必要缺く可らざる補體となり、それを完成



し、その決定的相貌を與へた。この理論はその鍵石とでも云ひ得るものである。

註一、ミル *Principles* 第三編第五章四節。「後天的」と云ふこの言葉は收入と純粹理論に適應してゐない。若し之等の利點が後天的なものであれば彼等が受ける報酬は費やされた資本の利子と考へらる可きである。

註二、「給料と利得は生産の普遍的要素を爲すものであるが、異常収入は示差的、若しくは特殊な要素を示すものとして考へられ得る。事實、若干の生産者に對して、若しくは若干の條件中にある生産の爲の利益となる一切の相違は儲けの源泉であり、定期的に支拂はれるのであるのではない限り、地代の名を附し難いが、全く類似的法則に依つて支配されてゐる。(ミル *Principles* 第三編第六章四節)

(d) 併し乍ら地代の理論は尙他の變化を與へられた。

既に記したやうにリカルドにとつては地代は根本的に示差的收入であつた(註)それは地味の相違をその原因としてゐる。若し總ての土地が同様なる地味であればそれは存在しない。同様にその時以來發見された他の異常收得も同一特質を有する。敷地でも他よりも頑丈なる職工も、他よりも聰明なる企業家でもそこには常にその收得を説明する自然的相違が存在してゐる。總て之等の收得は同一型である。思念の野に於て同一商品を作る企業家、同一職業に従事する職工、同一

事業に用ひられたる資本等を各々遞限生産率の順序に並べ得るのであつてリカルドが種々なる土地を並べたと同じやうにする事が出来る。その列の最後の企業家、最後の職工、最後の資本はそれを活動させて置く丈の利益より齎らさないのである。他の總ては更に多量を生産し、その商品乃至は勞務單位を同一價格で賣るのであるが、その生産率がこの列の最後のものから離れてゐればる丈それ丈多くの收得を利するのである。斯くの如く土地丈ではなく尙資本及個人的能力の不等「豊饒性の法則」とでも云ひ得るものが經濟界全體を抱擁するものであつて——この法則は生産に參與する分子の一切の收入上の不等性を説明するに十分である。

註、「記憶す可きは地代が同一性質の若しくは異つた性質の土地に等量の勞力と資本を投下して得た生産物の間に存在する差異である」と云ふ事である(リカルド *Principles* 第九章、高六節)

併し乍ら、この概念の中には特に技巧的な何物かが存在してはゐないだらうか。收人の相違は更に簡單な更に一般的な原則に依つて説明されるのではないだらうか。斯くの如く普遍的な現象を一種の除外例的な、乃至は異常な物としないで直



接に説明すること云ふ事は不可能であらうか。この問題は閉却され得ず、その答へも間もなく與へられた。

第一の疑問は土地が地味の不等性以外にあつて地代を供給し得ると云ふ事が認められた時起つた。「若し一國の全土が、——と既にミルは云つてゐる——耕作に必要であつたとすれば全土は地代を供給する。」(註一) この爲には麥の價格が生産費以上に支持される丈激しい需要と低い生産を假想すれば十分である(註二) 地味が不等であつた時に於ても、最も瘦せた土地と最も尙地代を供給し得るのである。ミルは斯くの如き例が土地に就いては希少であるが、鑛山に就いては頻繁に見受けられるものとなした(註三) 然らば地代は何に由因するのであるか。この收得は最も瘦せた土地にも現はれる以上、地味の良否に依るものでない事は確實である。故にこの收得の原因は他にある。ミルはそれを非常によく把握し「生産物は現實に希有性の價値を有する」と云つてゐる。(註四)

註一、ミル *Principles* 第二篇、第十六章、二節

註二、既にリカルドはこの假定に論及してゐる。「今此處で百萬石の小麥を必要とする事情が存在し、この百萬石は現在耕作地全部から收獲せられると假想し、且つこの土地の地味が九十萬石より與へないやうに衰へてくるを假想する。その時需要は従前通り百萬石であれば麥の價格が騰貴し、且つ古い土地の地味が同様であつたらそれに劣つた土地が開墾せられる時迄する事になる。(リカルド 佛譯本三七七頁) 尙リカルドは晩年になつてティー・ビー・シーの概念に従前よりも近づいて來たやうである。フレエゾール(既述書、二二頁)の珍らしい引照を参照せられ度い。

註三、「勿論場合に依れば一つの商品は最の不利なる條件の下に生産された時でも收得を與へる事があつて、併しそれはその商品がその時供給が絶對的に制限せられた經濟財の位置に存在し、且つその爲に希有性の價格をもつて賣られる時丈である。斯くの如きは收得を供給する大きな商品の如何なるものに就いても恒定的地位では過去に於てなく、現在に於てなく、將來に於てもないのである。(ミル *Principles* 第二篇、第五章、第四節) 鑛山に於いては同章、第三節参照。

註四、同上章、第二編、第十六章、第二節。はこの收得を專賣の收入に並べてゐる。その制限されてゐる一つのは所有者が協定的に行はないとしても、それでも一つの專賣である。この表現は他の多くの著者に依つて採用されてはゐるが尙議論の余地がある。專賣の特長は專賣者が前以つて全體的に更に多くの利益を得る目的を以つて市場に供給する生産物の量を制限するにある。斯くの如きは土地所有者に當てはまらない。兎に角そこに專賣的なものがあるとするればそれは不完全な專賣である。

併し若し收得が耕作された最劣地に現はれた時斯くの如きがその説明であること



すれば——何故にその説明は優良地の收得に就いては同一でないのか。ミルがこの結論を見出さなかつたとするのは理解に缺けてゐるからである。

事實彼は如何にして最も優秀なる地味を有する土地の收得の發生を説明してゐるであらうか。それに就いて彼は次ぎの如く云つてゐる。即ち生産が需要に對して不十分となれば價格が騰貴しそれより劣等な土地の開拓が爲されるのはその新たなる土地に投じた資本と勞力とに基準的な率の利益を齎らすに十分な水準にその價格が達した時に於てである。(註)

註、ミル 既述書、三編、五章、一節

然らばこの收得の原因は何であるか。明らかにそれは需要の増加であつて、劣等地の開拓は價格の騰貴後に行はれる以上その原因とはなり得ない。(註)その上この新開墾はこの收得を増大するものでなく、價格の増大を停止させてこの收得の成立を阻害するものである。即ち市場に於ける生産物の量を増大させ、此騰貴を制限する。故に最も優れたる土地の收得も、また工地の性質に於ける總ての變化

とは獨立に、直接に需要の増大から發生した單なる希有性の收得に過ぎない。故に總ての土地に於ける收得の眞因は地味の良否を問はず常に同一であつて、それは需要に對する供給の不足である。

註、これはセイガリカルドに對し駁論を加へた時述べた議論である。若し社會の需要の廣さの爲に麥の價格が騰貴し、その價格が更に悪い土地を開墾しても勞力に對する給料と資本に對する利益とを與へ得るやうなものであつて、更に地味の良し若しくは更に好き位置を占めた土地に利益を與へさせるのはこの社會の需要の廣さ、及び麥を得る爲にその範圍が拂はしむる價格である、と云ふ事は周知の事實ではないか。(Traité 六版、四一〇頁)彼は更に言葉を續けてゐる。コリカルドは同一表に於て、土地からくる利益は麥の需要の原因でなく、結果であること云ふ事を非常に好く證明してゐる。彼がその爲に用ひた理由は、彼に反對な方向に、即ち他の生産費用就中勞働に對する報酬は生産物の市場價格の原因ではなく結果であること證明する役に立ち得るものである。——コリカルド自身も殆どそれを認めやうとしたやうである。

同一なる論法は前節に於て列示した他の總ての示差的收得に適用し得るものである。斯くして引き出された結論は凡ゆる形態の下に於ける收得が價值の一般的法則の全く常態的結果であつて、その異常態的でないこと云ふにある。何等かの原



因の爲に一生産物の價値が希有性の價値を獲得し、生産費以上になる時（且つ之等の原因は非常に多く存在し得る）この生産物の賣手は一つの收得をその結果として有し得る。斯くの如きが到達せられたる一般的定義であつて、この法則は收獲遞減の法則、乃至は地味不等の法則とは全く別々なものである。（註）

註、經濟平衡の理論は收得の現象の普遍性を更によく描出してゐる。この點に就いてはパレトオの

*Cours* 及び……ナンシニの著書 *La teoria della rendita*, Rome 1912を参照され度。

併し乍ら、斯くの如き法則に最初から到着したのではない。英國の經濟學は、リカルド式の觀念に深く捕はれて今日尙示差收得の概念を固く守つてゐる。大陸經濟學者は反對にこの收得中に需要供給の法則の單純なる一適用を認めたのである。セーは既に不動産からの收得を「社會の需要の廣さと、それが麥を得る爲に現はしむる價格」に依つて説明した（註一）。更に遙かに明瞭にミュウニツヒ大學教授なる獨逸の一經濟學者ヘルマンは一八三二年に出版された獨創に富み、鋭い論理に富んだその著 *Staatswirtschaftliche Untersuchungen* に於て地代を固定資本の

收得の單なる特殊形態として示した。彼は説明してゐる。流動資本はその移動の容易性に依つて始ご常に一定率の收入を有してゐるに反し、固定資本は流動資本と同じ速度で移動する事も増加する事も出来ない。固定資本に對しては屢々流動資本より多い收入、異常收得が起るのである。この收得は若し前から存在してゐた資本と競争的に投資されたる新たな固定資本が同一なる生産率を有しない時、一時的ではなく永久的に既得のものとして存續され得るのである。斯くの如きは土地に對する場合である（註二）——それより少し後に他の一人の獨逸人マンゴールドは收得を「稀有性の打歩」と定義し、その利益を得るものは「生産の總ての要素ではなく増大され得ない要素丈である」としてゐる。收得が屢々示差的特質をもつて現はれると云ふのは單に希有性が屢々相對的なものであり、且つ希有なる生産要素にそれより劣つた收獲の他のものを代へて輕限され得るからである。（註三）——同じくシェッフレンは一八六七年、部分的に専ら收得（註四）を取り扱つた著書中に於て、土地が收得を供給すると云ふのはそれが自然の賜であるからでは



なく、單に土地が不動であり、その結果他の資本のやうに移動する事も増加する事も出来ないからであると云ふ觀念を力説してゐる。最後にカアル・メンガーは一八七二年その著 *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* に於て價値の近代學說の基礎を  
といた時、彼は地代の理論を價格の一般的理論中に含ませ、「土地の勞務はその價値に關する限りに於ては機械、道具、住居、工場の勞務、その性質が如何様であつても他の經濟財と同じ一般的法則に従つてゐる。」と斷固と主張してゐる。(一四八頁)

註一、既述 頁、註三參照。

註二、ヘルマン既述書、第五編 *Vom Gewinn* その序文中に於て彼は既に云つてゐる。土地收益の學說は一般的に固定資本から發生する儲けを規成する法則の序述中に於ける一特殊例以上ではあり得ない。

註三、バンホーランド *Die Lehre von Unternehmergewinn* (Leipzig 1885) 一〇九頁以降。

註四、シエッフレン *Die Nationalökonomische Theorie der ausschliessenden Abstützerhältnisse*, Tübingen, 1867、この本の中でシエッフレンは一般的に收益、特定的には土地の收益を妥當化して示さうと努力してゐる。彼は收益をその個人的才能、その資本、土地を特に有利に使用し得たものに對して捧げられた打歩としてゐる。これは一切の進歩、及び一切の經濟活動の源泉となる好餌であつて、社會がそれを使用する道を知つてゐるものに自發的に與へ、次いで競争に依つて消失する一種の自然的著作權のやうなものである。土地の收益は立法に依つて傷けられ若しくは乱用されてゐない限りこの特質に依つて妥當化されてゐる——收益に對するこの辯護は非常に興味あるものであつて、收益中に不勞所得より見ないものは、この不勞所得の經濟的機能に就いて更に考察する必要があると思ふ。

斯くの如く理解せられた收益の間に最近の經濟學者が認むる唯一の相違は單にその期間の長短に過ぎない。その中の或るものは例へば優良なる機械に依つて供給されるもの、如く新たな競争機械の製作に依つて非常に早く容易に消出し、他のものは同一生産要素に長い間附隨して存續するものである。後者に屬するものは、土地乃至は人の自然的素質に依る收益である。バレットオ(註一)の用語を借りて云へば節約が決定資本となる容易性の多寡に従つてこの資本に依つて供給される收益の存續にも多寡がある。マーシャルは今我々が取扱つてゐる問題に就いて述べてゐる巧緻なる説を要約して次ぎの如く述べてゐる。自然の自由なる賜から土地恒存的改善に移り、次いでそれ程永續的でない改善に移り、それから農場若しくは工場の組織に移り、次いでまた蒸氣機械に移り等々々、最後にそれ程永續



的でなく且つ急速に作られる總ての道具に我々は連續的な一群の收益を見出すのである。(註二)

註一、土地の使用の爲に拂はれる代價は他の總ての資本例へば機械を使用する爲に拂はれる代價と何等異つてゐない。土地——或は機械——それを受けたと同じ状態に於て返す時、尙若干のものが支拂はれるのであるがそれは單に之等の資本が經濟的に希有であるからであつて、即ち之等の資本が我々が必要とする量を越える丈我々の使用範圍に存在しないからである。土地と機械と相違させる點は、節約が容易に新たな機械の形を取り得るに反し、一般的には新たな土地の形を取り得ないからであり、若しくは少なくともこの變化が經濟的に可能なる價格を以つて行はれないからである。ParetとCournotの *Economie Politique* 第二卷、七五九節——Vérisschalも類似的用語をもつて述べてゐる。「土地の收益と他のもの、準收益 (Märsschalが準收益と呼ぶところのものは土地の收益と似たところのもので、自然的要素に由頼しないものを指すのである)との間の相違は他のもの、貸借價格は普通の條件の下に於て長い期間を通じ、その生産費に對し、基準的利得をひごく離れる事は出来ないのであるが、之に反して地味の豊かな土地の供給はこの同一地の需要に對し、急速に順應する事が不可能であつて、その爲にそこから得る收益は恒定的に耕作の目的をもつて土地に拂つた準備費に對する基準的利得を遙かに越ゆると云ふ事實に存在する。」既述書、五篇、九章四節)

註二、既述書、五篇、九章五節、

而して恐らく收益が消極的となり、即ち需要と供給の條件が一度補加的利得を與へた後、生産機械の收入を基準率以下に減殺する點迄この順列を續け得るのである。チューネンは既に此消極收益を記し Paretとは此概念を繼承してゐる。

斯くして近代經濟學者にとつて、收益は單に需給の法則から生れた一結果に過ぎなくなり、此爲に收益の概念はその普遍性を獲得した。同時にそれは珍奇なるもの若しくは異常なるものとして存在する事を止めた。所謂收穫遞減の法則は斯くしてその經濟的重要性の大部分を失ひこの法則に立脚したリカルドの理論は殘骸として現はれた。他の如何なるものよりも經濟學者の間に論争の中心となつたこの理論は殆ど價值に關する古典理論と共に歴史家は省みるが、經濟學者は利用しなくなつた學說の中に數へられてゐるやうに思はれる。(註一)

註、若しこの場所て述べるのが不當でない限り、アメリカの經濟學者クラークの著書 *Distribution of Wealth* (1899)の中に於て收益の觀念に依つて與へられた最後の生れ代りを指摘しておくのは、この場所をおいてない。彼は正しい名聲を馳せてゐるがこの著書中に於て總ての收入は收益として連續的に示されてゐる。事實、一社會の資本が與へられてゐるを假想し、それに連續的に累進する労働量を適用するとする。新たに加はつた労働量はその前のものよりも幾らか少く生産する。然し乍ら最後の労働量



の生産率はその前の労働量の總ての報酬を決定する。併し、前行的な總ての労働量の生産率は最後の労働量の生産率より優れてゐ、資本の生産率を示し、且つ全く収益を類似的な生産價値の餘剰が存在する事になる。——翻つて今此處に労働量が與へられると假想し、それに資本の連續的量を適用するとする、此度は資本は遞減的生產率を示し、且つ各量の報酬は最後の量の生産率と等しくなるので——總ての餘剰は労働に依る収益として考へられ得る。斯くの如きは非常に獨創的なる構想ではあるが、單なる註に於て議論する事は出来ない。併し乍ら私の考へでは經濟平衡の議論が富の分配の現象を更に簡単に説明し、且つクラークの理論が到達した一種の樂天論は十分に妥當であると思へない。生産率の觀念と收穫遞減の觀念とを結びつけやうとする彼の努力はアングロ・サクソン經濟學者の間にリカルドの觀念が與へた長い間の影響の新たなる證據である。

## 二、不勞所得の觀念と租税に依る収益の沒收

リカルドはその地代理論が不動産所有權に對して隠し持つた威嚇を何等疑ひもしなかつたやうである。彼にとつてはそこから麥に就いての租税に反對する議論を引き出せば十分であつた。彼は土地からの収入も資本からの収入と同じく合法化しやうとは思はなかつた。兩者共彼には所有權から不可分のものゝやうに見

えた。

併し他の著者は更に追求的な態度をとつた。一切の収入はその點均するものゝ個人的努力に依つて合法化する可きであるとするのは現實に絶えず偽られてはゐるが深く人の心の底に根を張つた道德觀念である。然るにリカルドの理論に於ける地代は特に勞力を伴はない收入、即ち不勞收入である。故に地代は合法的收入ではない。斯くの如きがリカルド理論の前提から忽ち引き出された結論である。

この結論はリカルドよりも遙かに古い前紀的な概念にその根據を見出してゐたので尙更自然的に廣まらねばならなかつた。その概念とは土地からの收入許りでなく、不動産所有權を不當とする觀念であつた。動産所有權は人の個人的創設であり、節約と労働との結晶であつて、現在の所有者がそれを得たのでないとしても、少なくともそれを所有した祖先の一人が斯くの如き努力に依つて得たものである。併し乍ら土地はそれは總ての人に除外例なく捧げられた自然の賜であり。神の自由なる給與である。この點に就いてブルドーンの句は有名で人に知られてゐ



る。「誰が土地を作つたか——神——若しさうなら土地所有者よ退け」(註)この唯一の古い概念にリカルドは要するに無意識的に新たなる理論を追加したに過ぎなかつた。

註、ブルドーン *Yivestee-Vue la propriété* p. 74

地上に於ける集合體の自然權の觀念は至る所に於て存在してゐる。併し乍ら英國に於ては他の場所よりも、この觀念の代表者を有してゐるが、恐らくそれは英國には大地主が多くそれと共にその濫用が激しい爲であらう。この觀念はこの國民の法律的傳統に迄その根を張つてゐるやうに思はれる。「我國の法律は、と法律家フレデリック・プロック(註)は皇室の爲でない限り絶對的な土地所有權を認めてゐぬ。一切の土地は直接的にせよ間接的にせよ皇室から委託されたものと見做され、何等の收益も、何等利用の途もない場合に於ても、右記録が皇室に對する懷疑の何等の證明を記録してゐなくとも左様である」。夙に十七世紀に於いてロックはその小著 *On a civil government* 中で「神は人の子のために共通に土地を授けた」と主張してゐる。

註、プロック *The Land*, p. 12(London, 1883)

十八世紀末葉以降、不當に略取された土地を回復しやうと云ふ團體權は一切ならず主張された。此等の主張は時として名もない改革者の口から洩れることもあつたが、偉大なる、或は著名なる著者に依つても發せられた。一七七五年、ニューキヤツスルの小學校教員トーマス・スペンスは同地の哲學協會に於いてなした演説中で土地の所有權を小教區に返還する案を陳べた。その爲に彼はロンドンに身を寄せねばならなくなり、同市でその思想のために熱心なる宣傳をなし相當の成功を収めた。一七八一年アバアヂイン大學の優れたる教授オリジヅヴィーは匿名で *“Essai sur le droit de propriété der sol”* なる書を著し、その中で、土地の價格中、所有者の改善勞力に依らざる一切の部分を租税を以つて沒收する案を叙べた。彼の思想は哲學者リードの賛同を得たと云はれてゐる。一七七九年トーマス・ペインは小冊子を著し類似的思想を述べてゐる(註一)一九世紀に於て我々は



更にそれがビー・エー・ポーヴェなる者の一八五〇年發行の著書中に擁護されてゐるのを見る。(註二) 次年有名なる哲學者ハーバート・スペンサーは其著 *Statique Sociale* に於いて(註三) 國家がその土地を回收すると云ふことは「最も優れた文化状態に適應するものであり」道德的法則と完全に調和すると宣言した。實際のことを言へばスペンサーは更に後期の著作で「集合體が請求權を有する總ては未懇の處女的状態にある地域の表面である」(註四)と述べて「土地に與へられた價值、材木、開墾、永續的耕作、灌漑、道路布設、農場の組成等々々」に對する權利は認めてゐない。然し斯くの如き多大なる制限を以てしても、その原則は同様に明瞭に彼に依つて承認されてゐる。

註一、*Agrarian Justice opposed to agrarian law and agrarian monopoly*(London 1797)

註二、*The Theory of humanprogression and natural probability of a reign of justice*. スペンサー、*ハーツィー、ポーヴェ、メインに就てはエスカートの論文 Nationalisation du sol et Socialisme*, Paris, 1904 参照此等の著書に關する既記の我々の知識は同氏の著書から借りることにした。

註三、*Social Statics* 1851, 九章十節。

註四、*Justice* 佛譯本(一八九三年)一〇四頁。

英國以外に於いても土地に對する共同所有の原始的權利は一切ならず主張されてゐる。ブルードンやベルギイの貴族コリンズのやうな眞實の社會主義者、フランス・フウトのやうな基督教的社會主義者を除いてもレノヴィー、セクレタン、フリーエーのやうな哲學者に依つて主張されてゐる。彼等は現在時代のために、また古い略取を默許してゐた社會の負擔に對して賠償の權利さへ認めやうとしてゐるのである。

斯くの如く既に古くから地代の經濟理論とは全く別々に存在してゐた此概念は土地に對する各人の原始的權利を請求し、且つ此權利の再現を求めた。此反映は土地國有論者の殆ど全部に亘つて、例へばスチュアート・ミル、ウォース、ヘンリー・チョージ、ワルラスに認められ、(註)此ために彼等は我々が今敘説して來た著者に密接なる關係があるのであつて、その唯一の除外例をなすものはゴッセン一人である。



註、スチュアート・ミル「土地は人類全體の元來からの相續財産である」*Dissertations and Discussions* 四卷二四三頁、二五六頁。その經濟原學理に於いて(二篇二章五節)彼は次の如く述べてある。「所有權の基本原則は總ての勞力に依つて生産し、節約に依つて蓄積したものを確保するにあるので、此原則は勞働の所産でないものに即ち生材料なる土地にだけ適用され得るのみである」——ワルラス *Theorie de la propriete, Etudes d'conomie sociale*, p. 218 に採録)に述べて曰く「土地は自然的權利に依つて國家の所有である」。——ヘンリー・ヂョージ (*Progress and Poverty* 第七篇第一章、二六一頁、民衆版)は曰く「土地使用に就ての各人の平等權は空氣呼吸の平等權と同じく明瞭なるものである——それは人の存在の事實に依つて要求される權利である」。

只單に不動産所有權の反法性を主張するだけでは大した結果は齎さない。土地の畧取が不法であるとしても、此不正は非常に古い事實であつて、その當事者は既にはるか以前に時効に依つて被はれてゐるのである。そして現在所有者の全部でないとしても、その大部分は暴力に依つて畧取したのではなく、その勞力と節約との結晶を以つて規則に従つて土地を獲得したのである。彼等の手にあつては土地は他の凡ての資本、例へば一つの機械と同じに所有されてゐるのである。それを賠償もなく彼等の手から奪ふと云ふことは古い不正を賠償ふことゝはならず、

却つて新たな不正をなすことである。斯くして土地に對する共通所有權の理論は、新たな理論、即ち地代理論に依つて授けられる日まで純理念派的興味より有しなかつた。

然らばリカルドは如何なるものを立證したのであらうか。土地所有者の特權は我々の眼前に於いて引き續き行はれてゐると云へる。土地は他の資本が有しない一の利點を有してゐる。自發的自動的に所有者の活動力を俟たずして、その収入は増加する。新たな土地が擴大的に耕作されること、人口の増加、その結果として起る生活資料に對する需用は、土地に對して無限に累進的なる價值を與へる。所有者の意志、努力、知能は何等其所に干與してゐない。周圍の狀況、社會環境がその唯一の原因である。集合體に依つて發生した此價值はその所有者に屬するだけである。斯くして土地所有者は今日尙此價值を依然として畧取し、その始め、土地自身を所有者が畧取したと同じ趣きがある。何故それを阻止しないのであるか。

「今此所に——スチュアート・ミルは云ふ——一種の收入が存在してゐると假想し、



その収入は收得者の何等の努力乃至は犠牲がなくとも恒定的に増大する傾向を有し、そしてその收得者は集合體中の一階級をなし、絶對的に受動的な立場にあつても物の自然の推移のために累進的に富裕となつてゐると假想する。此場合國家が新に發生した富の増加量、乃至はその一部を取つたとしても、個人所有權が立脚してゐる原則を蹂躪したとは云はれない。嚴密に云へば國家は何等その個人から取得するところはなく、單に環境に依つて發生した富の増加量を一特殊階級の富を徒に増大させるまゝにせず社會の用に供するために使用するに過ぎない。斯くの如きは正しく地代の例である」(Principes 第五編、第二章、五節)。

此論鋒は實際決定的なもの、やうである。少なく共リカルドの著書が現れるや否や國家の用に供するため地代を沒收する案が既に起つたのである。

夙に一八二一年彼の友ジエームス・ミルは國家は合法的に現在の地代ではなくその地代の將來の増加を公共費用に供する目的を以つて取得し得ると記してゐる(註一) サン・シモン派はそれより幾干ならずして同一意見を表明した。(註二)就中

此觀念に力を注いだのはジエームス・ミルの子スチュアート・ミルであつた。既にその *Principes de économie politique* に於て彼は改革の一般的案を樹てゝゐる。一八七〇年以來彼の思想を傳播させる目的を以つて設立された聯盟「Land tenure Reforme Association」の綱領書及びそれに附隨した演説、駐解に更に明確に現はれてゐる。(註三)

註一、シエームス・ミル、*Elements d'Économie Politique* 第四章五節(佛譯本二七〇—二七一頁)「此地代の連續的増加は集合體の事實には因し、所有者の個人的事實に由因しない以上、個人の所有に未だ移らない國家の土地の收入と同じく國家の必要に持て適用される資金を形成するやうに思はれる」。

註二、既述部分參照。

註三、*Principes d'Économie Politique* 第五篇第二章五節。同書同篇第三章二、六節參照。此聯盟の綱領に就いては *Dissertations and Discussions* 第四卷參照。

次に掲ぐるのがその根本的特質である。一、國家は土地の將來の收益、即ち、土地所有者は現在の收益に既得權を有するので、改革發令後起つたものを取得し得る。二、實際的には先づ第一に土地の總面積の價値を評價し、次いで時々を決

第二章 地代の理論とその適用  
依る收益の沒收

二 不勞所得の觀念と租税に

一一三



定基準に従つて、全體中に現はれた價值の増大量を評價すること。一般的租税を以つてそれを取付するにある。(註)如何なる所有者も損害を受けた者として考へられ得ないやうにするために新たな租税を拂ふか、若しくは改革實施の初めに於て若しそれを賣つた時得たであらうと思はれる價格でその所有地を買上げて貰ふかの中一途を選ます可きである。

註、ミルは一般的條件に依つて發生した剩餘價格と、所有者に依つて爲された費用に由因する餘剩價格を各土地に就いて個人的に區別する事は不可能である、と述べてゐる。この爲めに一般的租税が収益を沒收する爲に唯一の公平なる手段であるを考へたのである。

直接なる土地の國有に就いてはミルは反對であると宣言してゐる。彼はそれを不當であると考へてゐるのではなく寧ろその反對であるが、彼は只斯くの如き手段の效用を信する爲には國家乃至は公共團體の管理に餘りに悪い意見を有してゐるのである。彼の恐れるところは「多年ならずして國家に依つて收得せられたる収入は所有權をなくなした所有者が合法的に要求し得る賠償金を拂ふ爲に十分とならないであらうかと云ふ點である。」(註)

註、Dissertations etc. 第四卷、二五六頁。

スチユアート・ミルは改革に依る財政的結果は平凡なものであるその直接なる能力は更に詰らないものであらうと云ふ事を腹臆なく述べてゐる。それより後數年して他の一人の著者は遙かに根本的なる手段を提案し、それは眞個の社會的革新を齎らせねばならぬ事になつた。事實ヘンリー・ジョージが地代理論の上に組み上げたのは窮乏をなくなし、富の分配上に正義を建てる爲であつた。

ヘンリー・ジョージ(1839—1897)は職業的經濟學者ではなかつた。彼は獨行の人であり、獨修の人であつて評論家となる前に彼は非常に種々の職業を務めてゐた。十六歳の時水夫として船に乗り長い間放浪生活を送り、一八六一年、印刷屋の植字工としてサンフランシスコに落ち着き、最後に新聞の主筆となつた。彼はサンフランシスコ及びその近在の地方が金鑛搜索者及び西部アメリカの農業開發の爲に急激なる發展を遂げたのを目撃した。之等の影響の爲に、またその結果として起つた投機熱の爲に之等の土地の價格が非常に増大したのを見たのである。



一八七九年彼は一著書を公にしたが、それは之等の條件に依つて總て啓示せられ、且つ彼の名を一躍して擧げさせた。Progress and poverty である。(註)

註、然し是れは彼れの最初の著書ではなかつた。彼は一八七一年 Our Land and Land Policy を一八七四年 The Land Question を公にし、更に後尙 Protection of our Free Trade (1886) を著して自由貿易性の熱烈なる擁護者たるを示し、一八九一年、勞働者状態に關して Lettre ouverte au pape Leon XIII を公にした。Progress and Poverty は一八八七年モニーに依つて佛譯された。我々の引用は英國の安價版に據ることにした。

此著書は異例のない反響を喚起した。それは新聞記者の讚辭と雄辯家の辯舌とを以つて記された。その中に科學的作品の明晰性と嚴密性を求むべきではなく、多くの經濟學上の異端思想を集め得るのである。然し此本が成功したと云ふのはその民衆的性質に外ならない。それを讀むと云ふことは非常な影響を及ぼし、彼が記す現象に著目的な浮彫を與へて經濟學者の間にも同様であつた。(註)それは今日尙滅亡してゐない政治的動搖の出發點となつた。

註、クラークはその著 Distribution of wealth に於てその方法の觀念をヘンリー・ジョージに借りたま宣言し、その方法に依つて彼は生産の各要素に特有な生産率を決定しやうと努力してゐる。

ヘンリー・ジョージにとつて土地の所有者はその獨占の爲に人口の増加及び生産用具の完備に依つて集合體に與へられる利益の一部に止まらず、全部を取得するのである。文明の進歩に従つて貧富の懸隔は次第に増大する。地代は上るに反し、利率は減少し、職工の給料は生存に必要な最低限度に降下する。總ての國を通じて一つの幹から出た二つの枝のやうに同時に極端な富裕の傍に極端な窮乏が増大するのを見るのである。

如何に之等の事實を説明す可きであるか。マルサスの法則乃至は遞減收穫の法則を批難す可きであらうか。マルサス、リカルド、ミルと共に窮乏は生活資料の増加に先んじてゐる人口の増加から發生すると信ず可きであらうか。決してさうでない、とヘンリー・ジョージは答へる。何となれば經驗が我々に示すところでは至る所で富は、人の腕の數及び協力が最も不利な條件中に於ても尙、人口以上に速かに進歩するのである。(註)

註、「自然に最も惠まれない所で働く二十人のものは自然に最も惠まれた所で一人のものが獨立的に作



り得る富の二十倍を生産する。」(Progress and Poverty p. 113)の第二篇は全部マルサスの理論に反對して向けられてゐる。

然らば社會主義者と共に資本に依る勞力の搾取を批難す可きであるか。さうでもないのである。ジョージは反對にこの二つの關係を密接に連帶的なものであり、且つ同じく土地所有者に依つて搾取されてゐるものとして考へてゐる。彼に従へば人は自己の意の儘にその活動力を資本の生産の方向にも、勞働の生産の方向にも向け得るのである。資本と勞働とは唯一の同一なるか、人の努力の二つの現はれである。資本の形成及び勞力の行使から引き出し得る利益は等值的となる傾向があり、若しさうでなかつた場合には、人はこの兩者の利益が再び等值的となる迄、時として資本、時として勞力を更に生産するやうに導かれるのである。利率及び賃銀の率は斯くして反對の方向に變化する事は出来ない。(註)

註、勞力と資本とは人の努力(Human Exertion)と云ふ同じもの、異つた二つの形態に過ぎない。資本は勞働に依つて生産され、實際に於て物質を以つて現はされた勞力に外ならない。……生産に資本を用ふる事云ふ事は勞働の様式に外ならない。その結果、自由競争制の下にあつては給料相互間、及

び利益相互間を平等にする傾のある原理——この原理に依つて人は最低勞力を以つてその欲望を充たさうと求めるのである——この同じ原理は賃銀と利潤との間の平衡を立てそれを支持するやうに作用する。そしてこの關係が一度固定した時利潤と賃銀は共に肯定し、利潤は賃銀を高めずに増大する事が出來ず、賃銀は利潤を低下させずに低下すると云ふ事が出來ないと云ふのは明らかである。同上書、一五七頁、第三篇、第五章)賃銀の率と利潤の率との間の關係に就いての二の概念中に存在する粗朴なる點に就いて述べる事は無益な事である。

併し若しも人口の過剰、乃至は資本に依る勞働の搾取を批難し得ないとすれば何處から勞働者の憐れな状態は發生するのであるか。只地代の増加にある。先にリカルドの若干の理論に對して非常に嚴格であつたジョージはこの點に就いて彼の地代理論を論理的制限の極度迄押し進めてゐる。

ジョージは我々に次ぎの如く云つてゐる。勞働者間、及び資本家間の競争の爲に賃銀の率及び利潤の率は開墾されたる最後の土地、即ち未だ収益を擧げざる土地に於ける資本及び勞働の物質的收獲に依つて決定された水準に固定する。不動産所有者の獨占の爲に彼等は事實、他の土地の使用の價格としてこの最低收獲を



越えるものを要求し得るのである。地代は斯くして無限に増大し得る。何となれば開墾の限界は停止するところがないからである。人口が増加するにつれ、その需要が更に廣くなるにつれ、且つ多様となるにつれ専門的方法は益々完備し、更に多くの腕を段々と必要でなくなすにつれ、人々は更に多くの土地を其結果生産量の少ない土地を使用するやうになる。結果として起るところのものは先に開墾せられた土地の地代は常に益々増大して行くにある。斯くして文化の進歩はその一切の形態に於て常に同一結果に達し、常に同一にして等值的なる作用、即ち土地所有者の最大利益の爲に地代率の騰貴を伴ふのである。(註)

註、富の分配に關するこの理論の殆ど子供らしい粗朴性はその信用を奮ふに十分である可きであるがそれは既述書、五篇、二章に彼に依つて要約されてある。凡ゆる範圍に於て累進的文化の直接なる傾向は人間の勞働力を増大し、人の欲望を満足させ、貧困をなくなし、必要若しくは必要の恐怖を排除するにある。併し乍ら勞働が文化の進歩の齎らす利益を收穫し得ないこと云ふのはそれ等の利益が横取りされるからである。土地は勞働に必要なもので、且つ個人的所有者に依つて略取されてゐるので勞働生産力の増加は單に地代即ち勞働がその能力を利用し得る爲に使拂ふ可き價格を増大せしむるに過ぎず、斯

くして進歩の歩みに依つて得た總ての利益は土地所有者の懐に入り、賃銀が増加しないのである。(既述書、二一八—二一九頁、第五篇、第二章) 只彼は實收賃銀が低下することは主張してゐない。何となれば専門技術の進歩は古い耕作地と同じく耕作の新たなる生産を許し得るからである。只この結果は多くとも資本と勞力に古い収入を保有させ得る丈で、實際上進歩に參與させないのである。斯くして地代に關聯して賃銀と利子が下つたこと云ひ得るのである。私は賃銀が地代が騰貴するにつけて低下すること云ふ時賃銀として職工に依つて得られる富の量が必然的に低下すること云ふ事を意味するものでなく、只生産物の全體に對するこの賃銀の割合が必然的に低下すること云ふ事を含ましてゐるに過ぎない。賃銀の量が同一であつても乃至は増加してもその割合が少なくなる場合があり得る。(既述書、第四篇、第四章、また第四篇、第三章參照) 彼はリカルド及び多くの社會主義者ラサレル、ロドベルトスの如く二つの異つた問題、生産勞務の價格の問題の生産の要素間に於ける生産物の比率的分配の問題とを混交してゐる。併し彼は投機は生産率の現象が専門技術の進歩に依つて償はれねばならない點以上に耕作の制限を越え、時としては職工の現實的賃銀を減する事もあり得、その結果相對的ではなく絶對的に職工の地位を悪くせしめ得ると附言してゐる。(第四篇、第四章)

こゝに、と彼は云ふ。「一つの小さな村がある。十年後それは大都市になるであらう。十年後汽車が驛馬車に代り、電燈は蠟燭に代り、その村は勞働の效力を非常に増大する總ての機械及び總ての進歩を十分に取り入れるであらう。十年後利



率は更に高くなるであらうか——否——普通労働の賃銀は増大するであらうか——否何が増大するであらうか。——地代、土地の價值である。故に土地の一片を買ひ、その土地の所有權をとるとせよ……然る時、その所有者は腰かけて煙管をくわへて暮す事が出来る。彼はナポリの遊民のやうに乃至はメツシナの *Leperos* のやうに日向ぼつこをして暮す事も出来、輕氣球で散歩する事も、地の穴に身を隠す事も出来るのである。而も彼れは小指一つも動かさずに共同の富に何一つ加へずに十年後は裕福となるのである。新たなる大都會に於て彼は豪奢なる庭宅を構へ得るが公共營造物の中には慈善院が存在するであらう。〔既述書、二七七頁、第五篇、二章〕

斯くの如くヘンリー・ジョージにとつて地代はスチユアート・ミルの如く特に租税を附課す可き性質の收入に過ぎないものではなく、社會學の源泉に外ならないのである。地代をなくなせば貧困、富の不等及び彼が只土地に對する投機に由因するものとする恐慌もなくなるのである。その結果、地代の將來の増加をとる丈

では十分でない。土地所有者の特權の悲しむ可き結果は所有者に現地收得の享受を許してゐる限り存續する。故に租税に依つて沒收す可きものは現在の地代である。(註)この租税は國家の總ての費用を支辨するに足り、他の租税をなくなし得るものである。我々は斯くして土地に對する單一租税制に到達する。……斯くして彼の結論は學說史を不思議にも溯つて、重農論と同じ結論になる。

ヘンリー・ジョージの體系は經濟的見地からも衡平的見地からも最も重大なる内對說に當面した。經濟的に云へば、土地所有權が所有者に可現的なる余剩價值の利益を與へると云ふ事は明らかであるが、この余剩價值が社會進歩の總ての利益を吸収してゐると云ふ事は未だ證明されてゐないのであつて、この點に就いてジョージの主張は支持され難い。土地の地代の増加を貧困の唯一の原因とし、その爲に前者を吸収すれば後者がなくなると云ふ如きは兒戲に類すると云ふ可きである。

法律の見地に立てば一つの不合理をなくす爲に彼は他の不合理を以つてして



ゐると云ふ事は明らかである。現在の土地所有者から彼等が享受してゐる地代を何等の賠償もなく奪ふと云ふ事は純粹に、且つ單に彼の中の多くのものがその勞働と節約に依つて獲得した利益を奪ふ事である。事實今日土地は賣買されるのであつて、先取先有に依つて獲得されるものではない。土地が資本に若しくはその逆に絶えず代つて行くと云ふ事が明らかである以上、他の資本を尊敬し乍ら土地からの収入を不合理なものとして取る譯にはゆかない。沒收はその最初の先取先有権者に對してのみ正當である。併しそれ等の者の中何人が今日残つてゐるか。

最後に文明の進歩に由因する収益を土地所有者から取り上ぐるとすれば均衡を保つ必要から自己の所屬に係らない低下價値を同様に賠償しなければならなくなる。ミルは此抗議を豫見し(註一) 租税を拂ふに不満なる土地所有者に、改革の時土地が有してゐる商品價値を以つて國家に賣る權利を與へてゐる。(註二) 然しヘンリー・ジョージは此點に想到しなかつたのである。只彼にとつては土地の剰余價値が物理學に於ける最も好く樹立された法則と同じく確實のやうに思はれてゐたの

で低下價値は全く除外例的なるものであつた。

註一、ミルは次の如く記してゐる。

「それに対する(今述べた抗議に)答は、二つの反對な可能性を含む(損得の可能性)價格で土地を放棄する權利は平衡を樹立し得ると云ふにある。更に附言して彼は述べてゐる。その際國家は何等損失を招くことはないのである。事實一點に於ける價値の一切の低落は(繁榮の一般的減少に因しない限り)他の部分に於いて、それに相當し國家がその利益を均點し得る騰貴を含むものである。(Dissertation etc. 四卷 二九四、二九五頁)。

註二、然しアイナンサーはその名著 *Studi Sugli effetti imposte*, p. 125 (Turin, 1902) に於いて損失の原に對する此賠償原則は「直接に國家に依る價値の保護、即ちその便宜に就いては最も爭論の餘地の少ない保證に導くのである」と指摘してゐる。第二は彼は此拂戻が、若し其間所有權が移轉してゐれば騰貴した時租税を拂つた者でない他の者に與へられるであらうと云ふことを觀濟してゐる。

ミルの體系はヘンリー・ジョージのそれよりも更に緩和された形態の下示されてはゐたが、一切の非難を免れると云ふことは出来なかつた。彼が後者と共通に有した觀念、不勞收入の觀念は事實二重の批判、即ち社會主義者の批判と經濟學者の批判とを招致した。



社會主義者は云ふ。君は不勞收入を廢止しやうと云ふのか。結構、然しそれなら何故に資本の利子を廢止しないのか。資本は小作料と同じく不勞所得ではないか。株主が手にする配當は、土地所有者が手に入れる収益と同じく何の勞働にも價してゐないではないか。君と同じく我々は不勞所得を減さうと主張してゐる。然し我々は君より論理的なので、その糧の所得の總てを廢止する勇氣を有してゐるのだ。——スチュアート・ミル及びその一派は此所で絶對的に胃を脱いだ譯ではない。事實彼等の考へでは利子は勞力の合理的報酬でないとしても少なくとも資本の効用に依る合法的報酬である。利子を以つて報ひられたものはその犠牲である。(註)——然し社會主義者はそれで納得してはゐない。彼等は全く消極的な資本家の努力と積極的な勞働者の努力とを同一に取り扱ふことを拒絶してゐる。彼等の中の大部分はミル及びその一派の者の怯懦を揶揄するに筆を惜んではゐない。

註、動産及び不動産所有權の合法性相互間の區別に就いてはミルの *Principles* 二篇二章一節、及びヘンリー・ジョージの既述書七篇一章を参照。ミルは其條で次の如く述べてゐる。「所有權の制度はその基

本要素に制限を置く時、各個人が自己の努力に依つて生産し、若しくは暴力、若しくは詐欺を用ひず贈物とし若しくは契約に依つてそれを生産したもつから受け取るもの、排他的性質に對する權利を各個人に認める事にある、斯くの如き定義は明らかに不動産所有權の反合法性を含んでゐる——ヘンリー・ジョージの定義はミルの定義の模寫であつて、彼は土地とその上に建てられた家とを區別し、前者の所有權を反合法的となし、後者の所有權を合法的とみなしてゐる。

次に經濟學者の抗議がある。彼は云ふ。君は社會の進歩が土地の収益の上に所有者の寄與よりも多いと云ふので土地の収益を反合法的とみなしてゐるのか。併し如何なる収入が斯くの如き事情以外に立つてゐるか。總ての収入の根本には特に一つの社會要素、即ち土地の収益を發生させる社會的要素なる生産物の需要なるものが存在してはゐないか。社會需要が増大した時、資本に對しても土地に對する如く勞力に對しても資本に對する如く豫期しない収入を齎らし、時としてはその収入が莫大である事もある。經濟學はその發達の道程に於て、段々と土地の収益とは單にその時期の短かさに於て異つてゐる多くの収益を見出したではないか。その時の法律制度に惠まれたカンカンボア通りの有名なる病癯の運命は口



ンドンの廣い地所の持ち主であつたウエストミンスター侯の力よりも環境の力が少なかつたであらうか。利率の低下に依つて古い資本に與へられた余剩價值はその起原に於て、人口の増加の作用に依る土地の余剩價值程社會的でないであらうか。不勞所得と諸君は批難するけれど、近代社會に於て至る所に見出されるころの小學校教師がよく勉強し且つ最も優れた生徒に褒美を與へるやうに社會がその收入を分配しないからである。社會は最も希なる勞務にそれが犠牲に價したか價しなかつたには構はずそれに對して有する他よりも強い欲望を記す目的丈を以つて打歩を與へるのである。然らば如何なる權利を以つて之等の收益中の一つ丈を別に切り離してゐるのであるか。それ等の總てを沒收するか若しくは一つも沒收しないかの何れかの一途をとらねばならない。

之等の論理に對する唯一の答解は既にミルが與へてゐる。即ち今こゝに擧げられたる收益の如何なるものと雖も土地の收益と同じ永續性も普遍性を有してゐない。(註)この答へはヘンリー・ジョージとミルの觀念を部分的に適用する爲に起つ

た強い輿論を妥當化する爲に可なり有効であつた。

註・Dissertation etc. 四卷、二九八頁

ヘンリー・ジョージの一派が自ら崇高なる眞理と呼んだところのものを傳波する爲に多くの聯盟が一八八〇年頃英國、米國、オウストリヤに設けられた。彼等の活動は近年に至つて衰へたやうである。併し反對に土地の余剩價值特に大都市に於けるそれに特殊な租税を附課しやうとする企ては頻繁に行はれて來た。(註一)佛蘭西に於ては既に一八〇七年、公共的大土木工事が不動産所有者に余剩價值を齎らす可きであつた時その沿線不動産所有者から特殊な賠償を徵收する權利を一つの法律は認めてゐる。(註二)併しそれが適用されるのは極く稀である。ロンドンに於ても同一原則は夙に十七世紀に認められたのであるが、同じく適用されなくなつてゐる。(註三)今日此觀念は英國、及び獨逸に於いて非常に迎へられ多くの案は就中建築されてゐない都會の土地の餘剩價值に課税する目的を以つて立てられ、その中の若干のものは既に實現されてゐる、これは一九〇九年、即ち英國



上院と自由黨政府との間に憲法上の干格が起きた折りの有名なる豫算案中に於いて最も多くの反對論を惹起した規定の一つであつた。此時經濟學者は此租税の時期に就いて非常に雑多な見解を有してゐた。獨逸に於いて Werthzuwachssteuer の若干の町にそれが適用されたことは最近尙雜誌、著書中で激しい議論を沸騰させたのであつたが、それに阻止されることなく獨逸政府は一九一一年帝國の法律で此原則を認め、實際上には二年後に發布されることになつた。

註一、特に英國に於ては最近十年以來、多くの案が立てられ議院の委員會で討議されてゐる。それ等のものが如何に鋭く論ぜられてゐるかには既記アイナンダーの著書、及びエチウォースが *Recent schemes for rating urban land values* の表題の下に一九〇六年 *Economic Journal* に公表した論文中に委細を盡してゐる。

註二、一八〇七年九月十六日の法律第三十條は次の如く記されてゐる。現法律中に述べられてゐる土木工事の結果、即ち新路開拓、新廣場開設、……河岸の作成、乃至は他の公共土木工事のために、個人所有土地が甚だしき價値の増加を獲得した時此等の所有物件は新たに獲得した利益の半分まで引き上げ得る利益負擔金を負擔させ得る。然し此原則の適用は極めて稀有に屬し *Berthelamy (Traite elementaire de Droit administratif, 1908 p. 63)* の數ふる所では一九世紀を通じて漸く二〇件位のものであつた。

註三、セリグマン (*Essay in Taxation* 五版三四一頁) はウエストミンスタアの或道を擴張する時に關聯してゐる一六六二年の法律を引用してゐるが、それには此原理が明瞭に示されてゐる。然し一八九〇年ロンドンの或土木工事に適用するために一法案が提出された時、それは非常な反對を受けて葬られた。此原理が再び認められ適用されるやうになつたのはロンドンの高架橋 (Tower Bridge) の建築のため一八九五年の法律に於てであつた。——アメリカに於ては此原理は頻りに *Special assessment* 若しくは *bettement* の名の下に適用されてゐる。

フランスに於いて此等の觀念は同じ程度の反響を見出してゐない。一方が此所では土地所有權が英國に於けるよりはるかに細分せられ、斯くして地代は非常に多數の者の手に渡り、はるかに些少なる敵意より喚起してゐない。他方、近年に於ける巴里を除けば、都會地に於いても人口の増加が緩慢なので此問題は獨逸なごに見られるやうな鋭さを以つて現はれてゐない。獨逸では職工人口の増加のために家賃として累進的に給料中の一部は吸収されてゐる。然し我國に於いても他の國に於けると同じく問題は現はれてゐるのであつて何時かは解決されねばならないのである。



此點に就いても大戦争は躊躇的態度を一掃したのである。殆ど凡ての交戦國は戦時利得を差押へ、收得するために努力し、そのために或年基本としてとつた點から出發し、資本の剩餘價にまで租税を計算するために種々な多くの方法が創案されるに至つた。獨逸の戦時税 *Kriegsteuer* はその好箇の例をなしてゐる。

### 三、土地國有制

今此所で述べやうとする體制は土地收益の一部を税に依つて沒收するに満足せず、國地自身が國家に歸屬するを要求するものである。

外見上此制は先に求べた制度よりも——少なくともミルの制度よりも根本的なやうには思れるが、實際は、はるかに單純なる原則に立脚してゐるに過ぎない。ミルの如く國有論者は土地の剩餘價を國家に保留しやうと主張し、彼と同じく、此剩餘價の永續性と連續性を深く信じてゐるのである。更に彼と同じく彼等は土地所有に對する社會の權利を認めてゐる。然しながら彼等は現在の所有者から何

等のものを奪はうとも主張せず、且つ彼等はこれ等の收益中に相當するもの、相當しないもの、勞的乃至は不勞的なるものを區別してもゐない。彼等はミルの主張した様、將來はいざ知らず今日までのところ土地所有權に就いて何等主張する所はない。彼等は單に公益のために徴收を主張するに過ぎず、而もその徴收は出來る丈總ての保證を伴ひ、その直接收入の損失のみならず尙彼等が依據し得る將來の收入の損失迄も賠償金を以つて償はうと云ふのである。何處に之れ以上に單純に、之れ以上に合理的なものが存在し得るであらうか。

斯くの如き體制の實際的興味は明らかに下らないものである。土地所有權を根柢から覆すと云ふ事は古い國にあつては革命に依る以外に可能でない。斯くの如きは睫眉の急に迫らない限り、且つ歡び勇んで行はれるものではない。且つ一世紀以來土地所有權に加へられた大きな修正は（佛蘭西に於ては大革命の時、露西亞に於ては農奴開放の時、愛蘭土に於ては最近三十年以來）總て所有權を制限する目的ではなく、反對にそれを強國にし、若しくは個人所有權を發生させたりす



る目的を有してゐた。現在露西亞に於て Stonly pine 以來勞農派に至る間専念されてゐるのは尙この仕事である。全く國有論者にとつては悲觀せざるを得ない先例である。——恐らく新たなる國が更に良好なる實驗の野を供給するであらう。恐らく其處では國家の廣い所有權を更に容易に保留し得るであらう。併し乍ら事實に於て斯くの如きは考へられてゐない事である。斯くの如き國にあつては土地所有權の濫用が未だ感じられる丈の期間を有してゐない。

今我々が考察してゐる體制の理想郷的性質の爲にこの改革が實現された曉の組織の細部に論及する必要はなくなる。只時として國有論者は斯くの如き細部を好んで述べてゐるのではあるが。

併し、この徴収を要求する旗幟となつてゐる觀念、乃至はそれを實現する爲に依據されてゐる經濟的方法に研究を加へる事は興味がある。この見解の下に立つた時、最も顯著なる體制はゴツセン及びワルラスのそれである。前者はそれを *Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs* と題する珍奇なる作品中に於い

て敘述し、後者はヴオウダの自然科學學院に一八八〇年著者が示した論文中に展開させてゐる。兩者共經濟學者が大に利し得る一般的觀念を含んでゐる。此等の著者はその購入中に就中「自由地」を萬人に提供する手段を見出してゐるのである。我々は今之等の著書に一言言及したいと思ふ。

(a) ゴツセンの著者は一八〇九年に顯はれた(註)。面白い事には偶然に一致して殆ど同時に佛蘭西に於てはバスタア、米國に於てはケリーが經濟學的樂天論の二つの體系を作り獨逸はゴツセンに更に確信的であり、少なくとも遙かに科學的である樂天論者を見出した。ゴツセンは重農論者と同じく、神は社會に好意ある法則を與へてゐるので幸福に達するにはそれを知り、それを守れば十分であると考へた。之等の法則は享受 *Gemuss* の法則であり、今日効用、若しくは *Ophelimite* の法則と呼ばれるもので、それは社會全體に最大幸福を與へる爲には自己の幸福を追及すれば十分であると云ふ樂天的な法則である。我々はゴツセンに需要の非常に獨創的なる分析に立脚し、既に著るしく明確なる形態の下に最大効用 (*Ophelimite*)



malie)と云ふ快樂論の公理——即ち自由競争制の下にあつては各人がその慾望の充足を追求すれば同時に全體に對する最大量の満足を實現すると云ふ公理——を見出すのである。

註、此著作は此年代には完全に認められることなく終り、一九〇〇年に出た大きな *Handwörterbuch der Staatswissenschaften* の第二版は尙その名を逸してゐる。その第三版は此閑却を補正してゐる。此著書は一八八九年に再び印行された。ゴッセンの觀念とワルラス及びヂエホンスの觀念との關係に於てはワルラスの *un économiste inconnu, Hermann Henri Gossen* 參照。これは最初一八八五年 *Journal des Economistes* 誌に發表され、後彼の *Etude d' Economie sociale* 三五頁以降に採録されてゐる。

若し各々がその個人的享樂の最大量を追求すればその結果として全體に對し最大量の幸福を齎すものとすれば、各人は自己の幸福を自由に追求するやうに置かれてゐねばならない。然るにこれには二つの大きな障害が横はつてゐる。第一の障害は資本の缺乏である。その對應策としてゴッセンは國家に依つて運用される貸出の大きな局を設けてその運用を仔細に亘つて説明してゐる。第二の障害は土地の私有である。人がその凡ゆる活動力の展開を可能にし、出来るだけ多くの富

を作るためには、只その労働を自由に選ぶだけでは十分でなく猶その労働のために最も有利なる場所を選び得ねばならない。然るに土地私有權はこの自由選擇を阻害する。ゴッセンは云ふ。「此所有權のために、此選擇は生産のために、その所有に係る土地を使用し、その利用の可能性を與へるのは、唯一人の者の意償に依つて左右されることは屢々見受けることである。：：鑛業乃至は道路、鐵路の敷設の如く多大の順序を必要とする工業事業に徴收權を設けることを必要としなかつたであらうか」(既述書二五〇頁)

故に土地の所有權を共同團體に移し、總ての人がそれを要求しその使用權を得る可能性を保證する必要がある。各工業は單に最も良好なる敷地を選び得るのみならず、猶土地の利用を競争入札に附し、最も高い賃料を約束する要求者にそれを借し、集合體はそこから個人的に最も利益を引き出さし得る個人に依つて各土地を利用させる事が出来る。斯くの如く各時期に、且つ一定の人智の状態に於て生産に最も有利なる組織を保證する事になる。



註、ゴッセンはその著書、二七三頁にこの改革から生れた他の利點を列次してゐる。一、個人から地代の享受を奪ひ何等勞働せずに生活する可能性を非常に減じ斯くしてそれ等の人の活動力を増進する。二、所有權の法律的關係は非常に單純なる。三、生産者は豫め土地を買ふに必要な資本を有せず済む。四、最後に地代は大部分租税に代り、一切の面倒と一切の不當に依るその誅求をなくす。

(b) ワルラスはゴッセン程嚴密に効利的な立場に立つてゐない。彼の改革は一八六七年に *Theorie generale de la société* に關するその講義中に彼が説明してゐる個人と社會との各役割に關する概念に依つて示唆されてゐる。ワルラスはヘンリー・チョージと同じく社會主義と個人主義との間に融和を與へやうと試みてゐる(註一) この融和を彼は自身で自由社會主義乃至は綜合社會主義、或はまた「綜合主義」と形容してゐる。(註二)

註一、彼の著 *Etude d'Economie Social* 中に採録せられた論文 *Méthode concrétaire ou de Synthèse* 参照。ヘンリー・チョージはその *Progress and Poverty* の序文中に於て次ぎの如く述べてゐる。「私がこの本で爲さうとしたところは……スミス及びリカルドの學派に依つて認識された眞理をブルドーン及びラッサルの學派に依つて認識せられたる眞理に結ぶにある。これは放任主義(その眞個の十全なる意味に於て)が社會主義の崇高なる夢想の實現にその途を開いてゐる事を示す事である。

註二、*Etude d'Economie Sociale*

彼にとつて國家と個人は相互に干格するものでなく相互に補足するもので、この二つは我々の考へでは非常に正しい一表現を借りて云へば兩者ともその唯一の現實が「社會人」であり、即ち人は社會的に生活してゐるのでその抽象的思想に過ぎない。現實の人、我々が知つてゐる通りの人間は二つの利害關係を有してゐる。その利害關係が個人的であり、その爲にその周圍のものに人をして反對せしむる利害及びその周圍のものと共通であり、それを救ふ事は種族の生命を保證する利害關係である。之等の二つの種類の利害關係はその充足が社會人の生活に等しく必要であるので等值的である。國家と個人は——我々が人をその團體的利益の追及の方面から觀察するが、若しくはその人に特殊な個人的利益の追及中に觀察するかに従つて——我々が社會人を意味させる爲に用ひる二つの用語に過ぎない。その各々はものゝ性質に依つて記された独自の範圍を有してゐる。

國家は總ての人に共通なる生存上の一般的條件を保證する役目を帯びてゐる。



個人はその能力、その労働、その独自の忍耐力に従つて社會に於けるその個人的地位を實現する役目を有してゐる。國家にせよ個人にせよその各々が役目を果し得る爲には彼等に必要な資本を與へる必要がある。即ち個人にはその労働及び節約に由因する資力を國家には一般社會進歩に由賴する收入、即ち土地の收益を與ふ可きである。斯くの如くその資源を有すれば國家は租税に依つて、その労働の結晶の一部分を個人から奪ふ必要はなくなる。土地及びその收益の集團的所有權及び資本労働、乃至はその收入の個人的所有權、斯くの如きがワルラスに従へば正義の様式、條件の平等と地位の不平等を實現し得る社會組織である。(註)

註、特に *Etude d'Economie Sociale* 中に採録せられた *Theorie générale de la Société* 第六講参照。

然しゴッセンとワルラスにとつて、その改革の出發點は異つてゐるとしても、實現の條件は全くその規を一にしてゐる。兩者共に土地所有者の既得權に細心なる尊敬を拂つてゐる。彼等に従へば國家は、ゴッセンの主張とは反對に、現在の收益も、またミルと反對に所有者が期待してゐる將來の收益も同じく取得する權

利は有してゐないとしてゐる。(註一) 此事業を衡平になし得る唯一の手段は土地を購入するにあつて、然もその購入價格には所有者に依つて希望されてゐる剩餘價を含ませねばならないのである。此購入は實際的には國債の發行に依つて行はれ、債券は土地と交換的に所有者に與へられることになる。國家はその後自ら徵集し、累進的に騰貴せずにはゐない地代に依り、その負債の利子を支辨し得るのみならず猶累進的にそれを消却し得るのである。若干年間の後、約五十年後には資本は消却せられ國家は地代だけを享有するに至る。(註二)

註一、土地所有者に對する土地收容の單なる減少に過ぎなくとも、それを誘起する總ての手段を行ふためには、土地の收益が所有者の干渉を待たずに連續的に増大すること云ふ事實さへ依據する譯には行かない。事實、時々の或關係に於いて現はれる地代の騰貴は、それが認識されるかされない中に土地の價格の計算に加はつて來るのであるが、それは土地の價値が計算を俟たれば見出されないからに外ならない。その結果購買者は、購買が集合體の法律の保證の下に行はれた時その收益の變動が何うあつてもそれに對する權利も共に含めて買ふのであることは疑ひもない。…故に土地所有者に賠償として、今日強制土地收用のために用ひられてゐるやうに國家がその没收の時土地の使用料に相當する永代恩給を與へれば、先に示した原因の結果として起る不當なる事情は減少されるであらうが依然として殘つてゐる



るのである。(ゴッセン既述書二五七—二五八頁)

註二、ゴッセンは國家が個人よりも良好なる立場にあるので普通の買手よりも高い價格を所有者に與へ得る理由を指摘してゐるが、その中に國家は安價で借り得るので、その結果高い價格を給し得ることを述べてゐる。

此概念に就いては若しワルラスが自分で其處に一つの抗議を加へ、土地收益の増加に關するその概念を最も興味を催すやうな風に限定するに至らなかつたら、これ以上何等附言する必要もないのである。

ワルラスは云ふ。若し國家が土地所有者にその土地の數學的價格を支拂ひ、その價格中に土地收益の増加の割引數に相當する全額を含ませた時如何にして國家はその負債を消却し得るであらうか。若し土地の價格が正確に評價された時、購買價格の利子と土地使用量として徴收すべき金額とは、その一は他の價格に外ならない以上嚴密に平等となる。そして國家は土地の收益中には決して借入れた資本を消却し得る金額を見出せないのである。此事業は所謂無損益勘定となり、不便もない代りに利點もなくなる。如何にして此抗議を解くべきであるか。

それは極く單純である。若し此抗議が相當なる眞理に立脚してゐるとすれば、それは、今日から土地に對する一切の投機を阻止すべき筈である。若し買手が賣手に將來の餘剩價全體の現在價を示す價格を支拂はねばならないとすれば買手は始めから自ら割引して利益は失つてゐることになる。然し事實が左様でないことは誰れも知つてゐる。斯くの如き投機は日々に行はれてゐるのであつて、其理由は剩餘價なるものが幾分常に射倖的であるからである。買手は賣手より好く事情を辨へ、若しくは先見の明を有するかして、賣手より強い確信を以つて土地の騰貴を信するが、若しくは適當なる手段で自己の手で騰貴させることに止めるかである。而して國家はその購買に際し此投機者の地位にある。ワルラスに従へば土地の餘剩價は土地の現在占有者が信するより以上に急速に増大せざるを得ないので、これは個人所有者が看過し得るもので國家は反對に安全に投機し得る經濟上の進化に由因する。

註、Gileが 'Journal des Economistes' 一八八三年七月號一九〇頁所載の論文中で述べた購買案は類似



的心理に立脚してゐる。國家は土地所有者にその土地を現金で支拂ひ、九十九年後に引き渡す約束を以つて購入す可きである。この取り引きに同意しない所有者がないといふ事は十分に信じ得る理由がある。且つその賠償の價格は非常に少なくして済むも同様であると言ふ事は十分である。事實九十九年の年限と云ふものは我々にまつては終身を意味し、所有者に與へられた價格は眞個の贈物やうな譯で所有者が貪慾ではあり得ない。

ワルラスは若干の權威ある經濟學者と共に述べる。私の信するところでは人類は今や數千年の間人類が暮してゐた農業制から工商制に移つて偉大なる經濟的進歩を果したのである。工商制の根本的特質は農業が遙かに増大してゐる人口を養ふ爲に資本を非常に多く用ひて行はねばならないと云ふ事實である。尙私の信するところではこの進化はその結果として農業生産物の希有性乃至は價值に何等の増加を示す事なく、土地收益の新たなる餘剩價值を示し、且つこの價值は今日迄總明なる進歩した若干の人に依つてのみ認識せられたものでこの進化は尙土地所有者に依つて割引され得ないものである。故に若し國家が今述べて來た進化の前に購求するとし、この進化を速成する爲に(購買自身もこの方向に既に作用する)使

用し得る手段を用ひれば、國家は購入價格を消却し得る手段を常態的餘剩價值に十分に見出すと私は信じてゐる。(註)

註 Walras, *Étude d'Economie Sociale* p. 358, の理論の數學的講論は *Théorie mathématique du prix des terres* 中に見出され、それは普通の言葉で *Économiste* p. 365 以降に示され、且つ尙 *Problème fiscal* 中に更に簡単に要約されてゐる。

斯くの如く Walras は Ricardo と同じく、且つその理論の一種の清新化に依つて我々は未來に於て土地の定量に由因する土地收益の累進的餘剩價值を見るであらうと云ふ事を確信してゐるのである。只彼の理論はリカルドのそれの如く遞減收獲の法則に立脚せず、反對に農業生産の現象可能性を排斥してゐる。そして單に農業状態から工商状態へ粗笨耕作から土地に増大價值を與へる密集耕作の確實なる推移に依據してゐるに止まる。國家は過當なる手段に依つてこの推移を促進し、自身この偉大なる事業の成功に寄與し得るのである。只土地の購入はその唯一の事業である譯でなく、そこに鑛山、鐵道及び經濟的獨占の購買をつけ加へる必要がある。(註)



註 同一なる結合は鑛山、鐵道、及びその他の自然的及び經濟的獨占の購入に適用し得るのであつてそれ等のものには自由競争の原則の如きは何等見出す能はず、且つ餘剩價値の見地から云へば進歩的社會に於ける土地の性質に關與するのである。(既述書、三四七頁註、尙二三七頁以降參照)

(c) 國有論者に依つて主張されてゐる理由は我々が述べて來た通り非常に多様である。ゴッセンは生産率の最大量を実現しやうと欲し、ワルラスは國家にその必要なる財源を保證しやうと夢み、最後の種類の著者は特にその總ての人に對して、土地を自由に使用させる。即ち、開放地の保證手段を見出してゐる。斯くの如き配慮は英國の偉大なる博物學者 Alfred Russel Wallace を驅つて一八八二年以來、土地の國有化の爲に宣傳を行はしめ、著書を顯はさしめ、その中で彼はその理論を要約してゐる。即ちその著書は *Land Nationalization, its necessity and its aims, 1882* である。

事實ワルラスにとつて自由地を占有する可能性は資本家に對する職工の從屬性に最後の幕を與ふ可きものである。若し人が自由なる土地に於てその日々の糧を見出し得る事が確實であれば誰一人として生活にも足りない賃銀で働かうとはしないであらう。且つ常に耕作す可き土地が存在してゐるので誰も失業に苦しむ事はなくなる。土地に自由に近づき得ると云ふ事は、斯くして貧乏と失業との問題を解決するものであるが、これは土地國有化の最も幸福なる一結果をなすものである。(註)

註 Escaria の既述書、二二四頁參照、尙 Lavelle *La Socialisme contemporain* 第八版補遺參照

彼は云ふ、「根本的な事は總ての勞働者に土地の一部の占有と耕作の權利を與ふるにある。」(註一)そして彼は土地が國有化された時各市民がその一生を通じて只一回自由地の中自己の意に適するところを一英畝から五英畝の籤をその土地を占有し、個人的にそれに價値を與へると云ふ條件の下に選ぶ權利を有す可きであると提案してゐる。(註二)

註一 *Metin le socialisme en Angleterre p. 179* の引用。

註二「土地の一部を占有すること云ふ事は勞働者が資本家に從屬する事を除き得る。この從屬性は窮乏の一原因である。土地を占有する勞働者は自由であり、彼は常に仕事がない時爲す可き仕事を有してゐる」



るまた、若し土地の一定の量が職工に残されることを職工の賃銀は誰も自分で自分の爲に労働して得るより以上に得る事が出来る時、他のものゝ爲に労働しないであらうから確實に増加するのである。」

Escaraの既述書、二二四頁に依る引用、之の觀念は Henri George にも見出されるのであるが、只後者はそれを特に力説して述べてゐない丈である。(Escara 既述書二二九頁)

この概念はその極度の單純性の爲に特に異彩を放つてゐる。それは先に述べたものと反對に複雑な學究的經濟理論に立脚してゐない。この爲にそれは政治的に優れた歩廊である。併し、更に近くから眺むれば可なり子供らしいものゝやうに思はれる。

悪い土地の耕作には資本を必要とする。自由地の論客はこの點を忘れてゐるやうに思はれる。そして之等の資本は殆ど總ての場合に職工の用ゆる金額を超過し、且つ土地は年中生産してゐるものでなく、芽生への時を種に残して置かねばならない。若し職工が收穫を待つ程十分な貯へがあつたら、彼は恐らく失業の場合仕事にありつく迄、安易に過し得るであらう。郵便局に預けて直ぐに用に供し得る若干の金の方が、恐らく、非道く離れた所にある僅かの金よりも冬の眞盛に更に

頼みになり得ると思はれるであらう。最後に耕作は資本と共に若干の技能を必要とする。百姓となる爲には誰でも速時になれると云ふ譯にはゆかない。非常に優秀なる職工でも農夫としては非常に悪い農夫であるかも知れない。農業殖民地の經驗では失業職工が優れた耕作者ではないと云ふ事をこの點に就いて證明してゐる。自由地の論客はその改革案の效力に餘りに多くを期待してゐるやうに思はれる。必ずや實驗は忽ち無殘なる幻滅を與ふるであらう。(註)

註、この本の大きさが伊太利の經濟學者の爲に相當な頁を割く事を許さなかつたが、こゝで經濟學者アキルレ・ロリアの觀念に就いて若干言費し度い。ロリア程經濟學に於ける文献に更に多くの力を注いだ者は他にない。自由地の觀念の上に彼は經濟、社會、政治、乃至は宗教史の膨大なる上層建築を組み立て、ある。それを彼は多くの本の中で展開させ、且つそれは著者の想像力の強さを示してゐる。その要約は *la terre et le system social* を題して一八九二年 *Revue d' Economie Politique* に翻譯せられたる演説及び更に最近の著書 *Synthese Economique Paris 1913* に見出される。今こゝで我々はロリアの理論を寫すことは出来ない。只その *Constitutions economico odierna 1900* によつてロリアは法律が各人に若し人口の密度とその國の面積が許し得れば地積單位(これは彼にその勢力を以つて生活せしめ、且つ自給生産者として立ち行き得るに必要な土地の量)或は面積が不十分であつた時、この單位の幾分か



に對する土地權を附與するやうに要求してゐると云ふ事を述べれば十分である。

併しそれは理論的解決に過ぎない。實際的に於てその解決方法は更に甘いものである。それは土地的賃銀であつて、使用者をしてその職工に「n年後必要なる賃銀の外に地積單位を」支給せしむるにある。

「若し此n年間を通じて、職工が連續的に種々の資本家に依つて用ひられた場合には、その職工を用ひた期間に比例する部分をその各々は供給すべきである。」

斯くしてn年間後凡ての職工は相次いで土地所有者となるのである。彼等はその時自然經濟に於ては元始時期に於けると同じ状態にあり、彼等相互間に於てまたは古い所有者との間に平等に資本と勞力との共力團を組織し得る。この協力はロシアの眼には最も生産的な組織として寫つてゐる。

之等n年の間、土地所有者に強制が加へられねばならない。

#### 四、收益の觀念の社會主義的延長

今我々が述べて來た著者は總て個人主義者であつた。所有權自身に對して彼等は何等含む所はなく資本の利子は彼等の間にその敵を見出してゐない。各人がその資性と才能から引き出し得る利益に就いて彼等は殆ど敵意を示してゐない。社會主義が先に述べた總ての體制と區別されるのは、資本の利子及び土地の收益に

對する同様な敵意に依る。そして若干の社會主義者は個人がその除外例的能力に依頼し、その勞働の純所得を越ゆる特殊なる利益を否定すると云ふ點に迄走つてゐる。

之等の二つの概念の間には一つの溝渠が存在してゐるやうである。それは埋められ得ないものであらうか。

勿論、而も極く簡單に埋め得られると若干の著者は答へる。その爲に資本の利子及び除外例的收入を收益として考へれば十分である。斯くの如く收益の理論は集合體に依る土地の徴收のみならず、尙、完全なる集産主義を妥當化するのである——この概念が生れたのは英國に於てであつた。

社會主義の眞の故郷なる英國、ゴドウィン、ホール、トムソン及びオーウエンの英國は之等の最初の思想運動の後殆ど七十年間何等の社會主義體系がその國に生れるのを見なかつた。佛蘭西社會主義の影響を受けたミルを除けば英國は大陸を動搖させた思想に可なり無關心な態度をとつてゐた。カール・マルクスはロンド



ン客舎に於て一人の英國の經濟學者にも認められず、その資本論を考へ述べ得たのである。この偉大なる集産主義者の思想が大英帝國に眞個の興味を喚起する爲には一八七〇年後、獨逸、佛蘭西に於て社會主義黨が成立しなければならなかつた。英國に於ては一つの小さなマルクス派が組織された。(註)併し、同時に他の團體が獨創的な特に英國風の社會主義學說を組織する爲に努力した。それはフェビアン社會主義者である。

フェビアン協會は一八八四年に設立された。それはその始めから有閑階級に屬する年少子弟の小數を含み、之等の成年は古い社會を離れ個人性格の完成に務めて「民族を平和に」致させる爲にこの協會を作つたのである。(註一) 彼等の中の或る者にとつては成功は直ちに來ないと思はれてゐた。彼等は更に直接なる結果を急いでマルクス主義及び無政府主義から取り入れた思想に依つて誘惑された——然し彼等は直ちに英國人の性格と少しも合つてゐない革命的性質を抛棄し、暴力に依る一派及び「感動的な史的危期」を信奉するものと更に瞭りと區別をつける爲

に(註二) 彼等はフェビアンの名をとつた。この名はハンニバルの有名なる敵 Fabius le Temporisateur からとつたものである。彼等は昔から今日に至る迄、批評的精神を過度にさへ持ち合はしたもので、人に笑はれる事を恐れ、何等使徒的熱情を有しない。常に彼等自身を嘲笑し(註三) 彼等の古い偶像を焼き、決定的な政治的若くは社會的信條を排斥し、彼等は急速に單なる研究及び宣傳の組合に代り、その役目は特に智的となり、そして「社會主義の哲學にあつては智識は熱よりも更に重要な要素である」と云ふ意見を抱くに至つた。(註四)

註一 Bernard Shaw, *The Fabian Society, what it has done and how it has done it* 1892 (Fabian Tract No. 41)

註二 *Report on Fabian Society* (Fabian Tract, No. 70) これは一八九六年ロンドンの國際社會主義大會に提出されたものである。

註三 Bernard Shaw (既述書)は云ふ「我々が我々自身を自由に嘲笑すること云ふ貴い習慣を得たのは此時期に於てであつた。此嘲笑は常に我々の特質となつてゐる。且つ自己の個人的感情を一般輿論の動きと考へる熱情家の煩はしい言葉の波から我々を救つて來たのである。」

註四 *Report on Fabian Society* (Fabian Tract, no. 70)



社會的宣傳を成功させる爲に決して良好でない之等の條件にも不拘ず、フェビアン社會主義者達は職工の間よりも有閑階級の間に可なり深い影響を與へてゐる。彼等の中の若干は優れた作家で例へば戯曲家、批評家バーナード・ショウ、歴史家シドニー・ウエツプ夫妻、小説家ウエルスがある。最も種々な環境の中に入り、黨派的區別もなく各種の新聞雜誌に協力し、小冊子を發行し、講演をなし、彼等は彼等の思想の議論を世に認めさせる迄に達した。その思想は一八八九年に發行された *Fabian Essays* と題する奇妙なる評論集に要約されてゐる。その本に現はれてゐるのはフェビアン協會の意見と云ふよりも主要なるフェビアン協會員の意見と云ふ可きである。事事この協會は協會としては理論的でない只一つの學説を有してゐると云ふ事は忘れてはならない。この協會は明らかに社會主義的であると宣言し(註二)、個人所有權を團體所有に移す事を目的としてゐる。併しこの協會は自ら「結婚、宗教、藝術、理論經濟學、歴史的進化、貨幣の流通、乃至は民主主義及び實際的社會主義と云ふこの特有なる目的以外の問題に就いては何等特別なる意見

見を有してゐない」と云ふ事を表明してゐる(註二)。こゝで我々に興味ある經濟理論は斯くしてこの協會の若干の所屬員に個人的なるものである。この協會は明らかにそれに依つて示唆されてはゐるが、併し之等の理論はその協會の印を受けず常にその總ての所屬員に依つて承認されるとは云へないのである。(註三)

註一、フェビアン協會が理解する意味に於ける社會主義は國家に必要な工業の組織と指導、及び郡州其他の最も適當なる公權に依り國家の全體に亘り土地及び資本の一切の經濟收益形態を徵收する事を意味する。フェビアン協會に依つて求められる社會主義は絶體に國家社會主義である。(この國家社會主義なる語は無政府主義的社會主義と對立的に用ひられてゐる)：他方に於て「フェビアン協會は一人の入、若しくは一團の人にその勞働の全生産を保證する爲の一切の案を決定的に排斥する。それは富がその起源に於て社會的なものであり、工業進化は各人が共通生産に爲す個人的寄與を區別し、若しくはその價値を測定する事を不可能となしてゐるので、その分配に於て社會的でなければならぬ」と云ふ事を認める。(Report on Fabian Policy)

註二、同上書。

註三、一八八九年に發行された *Fabian Essays* 以外に於てフェビアン協會の思想の表現を見出し得る主なる出版物は非常に雑多な問題に關する無数の小冊子 *Fabian Tracts* 次いで *Webb* 夫妻の *History*



of Trade-unionism (Métinの佛譯がある)及び特に Industrial democracy 就中その第三篇、第一、及び第三參照、最後に同一著者の講演と論文を集めた Problems of modern industry (1898)がある。

フェビアン協會の集産主義に新たなる理論的根柢を與へやうとしてゐるのはウエツプである。彼は勞働價値に關するマルクスの理論を却け、寧ろヂエボンス、マーシャル乃至はオウストリア學派の近代理論に好意を示してゐるのであつて、彼の必要とする所は集合體に依る生産手段の畧取のためにマルクス以外の他の根柢を見出すにあつた。眞實に英國人らしく、またリカルドが尙その國の經濟學者の間に與へてゐる一種の魅力を振ひ落すことが出來ずに、彼がその助けを求めたのは此偉大なる學者の土地收益の理論であつて、此理論は彼の眼には集産主義經濟學の眞實の礎石として寫つてゐるのである。(註)

註、ウエツプ夫妻はその History of Trade-Unionism (解釋一六頁に於いて「數代の社會主義者を驅つて、スミス及び古典經濟學者から、勞働はそれだけで價値を發生する」と云ふ誤つた理論を取り入れさせ、集産主義經濟學の礎石に外ならない經濟收益の法則と云ふ此捕捉し難い且つはるかに困難なる法則に就いてしなかつた此思ひ上つた反科學的偏見を排片してゐる」。

土地收益の理論は先づ——之れは云ふ迄もないが——この収入は勞働者が自己の賃銀以外のものを生産しない悪い土地に較べ地味の好い土地の生産物の單なる追加に由因すると云ふ事を示して、土地の收益を集合體が略奪する事を妥當化する。こゝ迄は何等目新しい事はない。

併しこの理論は同様に資本からの収入の沒收を妥當化する。何となれば種々の資本の間に於て、即ち生産に參與する各種の機械、用具、建物の間には各種の土地に存在すると同じ性質上の相違が存在し、その結果物質的生產率にも同じ相違が現はれる。「資本の窮限」とでも云へば云ひ得る程度に迄、即ちそれ以下に於ては如何なる勞働も可能でない最低量の用具を以つて勞働する勞働者は只その賃銀を稼ぐに止まる。この最小限度と超過する總てのものを資本家は彼等が借した資本に依る超過収入の支拂ひとして要求し得るのである。利子は故に較差的收入、即ち收益に外ならない。只この際利子はそれが當然ある可き様に、即ち「生産物の一定量」としてで、何割何分としてではなく定義さる可きである。(註)



註「我々が今こゝで述べてある利子は明らかに生産物の定量たる可きである。」*The National Dicta-*  
*nd and its distribution* (Problems of modern industry 737) に採録し我々が彼の説の説明をこつて來たの  
もこの論文に依るのである。

最後に耕作のに於て單に土地と資本の最低量を以つて働くのみならず、またそ  
の地勢と熟練の最低量を以つて労働する職工の能率を超える優れた能率を有する  
ものは總て更に多く生産し、彼自身の爲に餘剰を保留し得るのである。これは尙  
一つの較差的收入、即ち熟練に依る収益である。この収益は一般的には土地所有  
者及び資本家の子供が受ける好き教育の結果であり、間接的には私有財産權の結  
果である。(註)

註、同一理論は *Trist no. 15* の *English Progress towards Social Democracy* に叙述せられてゐる。  
「社會權力を所有する個人若しくは階級は凡ゆる時期に於て意識的に若しくは無意識的にその同胞の大  
部分に對し、實際的には一地方水準に依る生活手段以上のもを何等與へないやうにその權力を使用し  
て來た。異つた地方、土地、資本、及び耕作の前の技能の始原の生産能力の相對的相違に依つて決定さ  
れる追加的生産物は貴重ではあるが稀有なる之等の生産素因を有するもの、手に亘るのである。この餘  
剩價若しくは「經濟的収益」を奪ふ爲のこの争闘は歐洲の進歩の渾沌たる歴史を解く鍵であり、無意識的

である總ての革命の深い原因である」尙 *Problems of modern industry* 二三七—二三九頁に採録されて  
ある *The difficulties of individualism* 参照。

この獨創的論鋒は非常に人を承服せしめ得る力のあるものとは云へない。事實、  
利子及び大部分の賃銀が較差的收入に外ならないとしても、それを沒收すると云  
ふ事は一つの特種な妥當化を必要とする。資本の素質はリカルドの理論に於ける  
土地の素質のやうに自然的素質ではなく、人に依つて與へられたる素質である。  
また人の特殊な能力に就いて云へば社會がその利益を總て沒收して、得をするこ  
と云ふ事を證明しなければならない——富の分配に關する科學的説明の如く、この  
概念は同じく非常に幸福なものであるとは思はれない。收入の分配は交換に依つ  
て行はれ、労働の價格に依つて左右せられる。然るにウエツプは物質的生産物丈  
を考慮に入れて價格を除外してゐる。我々は固定資本が土地と同じく利子の普通  
率との比較に依つて量られた収益を齎らし得ると云ふ事を否定はしない。然し、  
ベエム・パウエルク及びアイーヴィング・フィッシャーの研究の後、此率自身を資



本の物質的生産率に依つて説明すると云ふ事は不可能のやうに思はれる。然るにそれはウエツプの理論に根本的な點である。

リカルドの収益論の上に集産主義全體を打ち立てやうとする企ては——古い經濟學者から革命的結論を引き出す爲めこの最後の努力は斯くして失敗に終つたのである。ウエツプの友達も三つの專賣の暗示を絶えず筆にしてはゐるが、彼の説に組してはゐない。(註)

註、例へば Shaw は *Russian Essays* 中に採録されたその *Economic basis of Socialism* に於いて嚴密な意味に於ける利子を經濟的収益から分つてゐる。

努力は徴候としての方がそれ自身に於けるより興味がある。我々は既に佛蘭西及び獨逸に於てマルクスの最も直接なる弟子が價值に關する彼の理論を棄て、その中のあるものは究極效用の理論に附和したと云ふ事を述べて來た。今我々は英國社會主義者の一部分が同一進化の方向に動いてゐるのを見るのである。凡ゆる國に於ける社會主義者は今や有閑階級經濟學の傍に第四階級經濟學を立てると云

ふ主張を棄て、存在し得るものは社會的黨派及び理想と別に唯一の經濟學であり、そして其の役目は經濟現象を科學的に説明するに止ると云ふ事を認めて來た。

フェビアン協會員はマルクスの理論に對する反動に於て佛蘭西勞働組合運動派よりも遙かに上に出てゐる。彼等はマルクスの價值理論を棄てた丈ではなく、尙その社會學說の全體を同じく、排斥してゐる。彼等の反對は特に二つの點に於て表明せられ、この章の特殊な理論、地代論とは離れてはゐるがフェビアン協會の思想の概略を完成する爲にそれを記すと云ふ事は重要な事である。

マルクスの社會學說は階級闘争に立脚し、社會主義は彼にとつては無産階級の學說であつた。故にその勝利は有閑階級に對する無産階級の勝利を意味した。その原理は二つの階級の利益が相反する如く、現在社會の原理と相反してゐる。フェビアン協會員には何等斯くの如きはない。彼等にとつて社會主義は有閑階級的民主的理想の延長である。彼等は今日社會が立脚してゐる原則を論理的に展開して満足してゐる。民主的理想の經濟的方面は社會主義であることウエツプは述べて



ある(註)。問題は有閑階級の獨裁に依つて代ゆるにはなく、乃至は職工を賃銀から開放するにもなく(社會主義制に於て總ての人は給料取りである)とフェビアン協會員は述べる。只集合體全體の利益の爲に工業を組織するにある。「我々が工業の指導乃至は利益を要求するのは鑛夫、靴屋、商業上の被使用者のためではなく凡ゆる市民のためにである」(註二)。斯くて社會主義は階級の學說ではなく、一般的福利の哲學である。「社會主義は各人に對し自由と平等なる權利とを保證するための案である」(註三)。ウエツプはマルクス學派の意味に於ける階級闘争が英國に存在してゐると云ふことにさへ反對してゐる(註四)。更に進んで「フェビアン協會は今日まで社會主義運動は中間及び有閑階級の所屬員に依つて啓發され、教へられ、導かれて來てゐる事實に鑑み……社會主義者が社會主義を生んだ階級を敵とすると云ふが如き誣蒙に反對するものである」(註五)。斯くの如くフェビアン協會員はフランスのサンチカリストと少しも一致してゐない。

註一、*Fabian Essays*, p. 35,

註二、*Socialism true and false*, Tract 51.

註三、*What socialism is*, Tract no 13 p. 3

註四、彼は獨逸人 Kirella の著 *Socialism in England* (1898) に序を寄せて、英國に於ては職工は無数の組合に分割され、それ等の組合は互に嫉視し、侮蔑してゐるだけで嚴密な意味の階級意識などは持ち合はしてゐないと述べてゐる。(一〇頁)

註五、*Report on Fabian policy*, p. 7.

彼等の歴史哲學は同じく異つてゐる。マルクスにとつて十九世紀の最も重要な事實は特權階級の手に所有權が集中し、同時に多數者は第四階級に墜ちるといふことであつた。この二重の現象はその必然的結果として、後者が革命的手段で前者の所有權を奪ふと云ふにあつた。

フェビアン協會員は所有權の集中を否定はしてゐない。然し彼等は樂天的である。これと平行的に多數者の奴隸化を明かにするどころではなく、彼等の眼には十九世紀の最も重要な事實は資本家の權威の減少、國家經濟に於ける集團的支配の増加、労働者の利益のため有産者が既に其所有を削られてある事實である。



ウェップに従へば社會主義は靜に且つその被害者も知らない中に、實現されつゝあるのである。「一片々と徐々に資本の利益はその利益を自己の意の儘に使ふ所有者の自由に附課せられた公益的な社會制限の爲に奪はれつゝある。一片一片と地代及び利子から生れた所得は、平均よりも高い収入を受けてゐる人の肩に、消費者の肩から租税を置き換へる事に依つて、奪はれてゐる……今日想像し得られる殆ど一切の工業は各々の手段に依つて、區自治體乃至は政府自身に依つて何等の中間物または資本家の參與を俟たず行はれてゐるのである。市町村は自己の公園、美術院、圖書館、公會堂、道路、橋梁、市場、屠殺場、燈臺、水先案内、渡し船、引き船、救難船、墓地、共同浴場、共同便所、貯藏所、港、岩壁、養育院、慈善病院、無料相談所、瓦斯工場、水道、電車、電線、土地、野原、職工住宅、學校、教會、講演所等を設け、之を維持してゐる。」同時に國家は個人的工業と競争し、それを監視し、監督する。「國家は大なる工業的活動の重なるものに、職工の年齢、労働時間、空氣、光線、空間の量、温度、便所の設備、休養と食事の時間を規定し、且つ何處で、何時、如何に

して賃銀は支拂はるゝか、階段、機械、昇降機、鑛山、石切場は如何に柵に依つて保護され保護されてゐるか、何時、如何にして機械は掃除され、修理され、整理されるか、等を規定してゐる。……あらゆる方面から個人資本家は監視され監督され、規定を果さない時集合體に依つて取つて代はられるのである。」(註)

註 Fabian Essays p. 48-49

ウェップは斯くて叫ぶ。御覽の通り、我々は既に社會主義下にゐるではないか。我々の立法家は總て自ら知らずに社會主義者である。そして「此世紀の經濟史は殆ど間斷なき社會主義進展の記録である。」(註一) 社會主義者は——とサン・シモン派の後を承けてフェビアン協會員は云ふ——萬人が混沌裡に果す進化を明かに示すに止まる。「その無意識的要素たる代りに、我々は自ら認識する變化を助長し若しくは阻止する上に意識的なる要素となつてゐるのである。」(註)

註一、前註既述書三二頁

註二、Web. *The difficulties of individualism (Problems of modern industry 二二二頁に採録分)同じ*

く Web は *Fabian Essays* 三五頁に宣言して曰く「社會主義者は個人主義者と同じく重大なる有機的變



革が、その條件として、一、民主的であること……二、階梯的であること……三、國民の大多數に依つて不道徳的であること……考へられないこと……四、少なく共英國では立憲的であり平和的であること……を具備すべきを説いてゐる。

斯くの如く彼等の主張はカール・マルクスとは非常に異り、況んやその弟子サンヂカリストとの間には更に距がある。彼等は實際に於いて獨逸國家社會主義者の歴史哲學に復歸してゐるのである。フェビアン協會員は自ら知らざる風を裝ふ單なる國家社會主義者に外ならないであらうか。

「フェビアン社會主義」は嚴密なる意味に於いて新たなる科學的學說ではない。それは幾分陳腐とはなつたが今尙英國の著者の間に好意を以つて迎へられてゐる自由主義に對立して、近代生活の諸相自身に依つてヨオロッパに到る所に生れた經濟的集中の觀念を示すものである。事實恐らく最近三十年間の立法的進化が、その敵、乃至はその味方の下部分に依り更に高い社會主義の名を冠せられて現はれるのは累進的集中の可なり穩健なる相談の下に於いてであらう。

英國に於いて實際政治は遙か以前から既に個人主義の域を放れてゐるのに反し、十九世紀の初めベンサム及びその一派に依つて作られた急進功利派の哲學的、政治的學說は今日まで、且つ今日尙人との間に強い勢力を有してゐる。フェビアン協會員はこの學說の反對者に依つて作られてゐる。彼等は自ら進んで急進功利派の智的繼承者として考へ、且つ、工業的及び民衆的な一大國の新たなる必要を單純に表明する事を主張してゐる。既に龍大となつてゐる勞働立法大都市に自發的に發展した都市社會主義、マンチエスター及グラスゴーに於ける偉大なる消費組合の成功は彼等が約言してゐる實際的社會主義の説服的例を示してゐる。ウェッブ夫人は云ふ。「それは流血的革命に依つて實現される無政府的理想郷を要求するのは外國勞働者の社會主義ではなく、それはこの温健なる英國の社會主義、言葉の中にはなく行爲の中に示されるこの社會主義、沈黙の中に工場法、物品賃銀制に反對する法律、自己の責任、公衆衛生、職工住宅、教育に關する法律——個人をして國家の法の下に勞に就かしむる有益なる之等の多くの立法中に示されて



あるこの社會主義である」。(註)

註、B. Potter (Vob 夫人) *The Cooperative Movement* (1899) 二版一六頁。その時以來英國に於て更に過激なサンチカリズムが生れ、その最も權威ある理論家は今日ではコールであるやうである。彼の著書に對する分析は L. H. Price に依つてなされ *Economic Journal* 一九一九年六月號に掲載されてゐる。

フエビアン協會の理論はリカルド學說の最後の生れ變りである。今日尙そこから新たなる結果を引き出す事は不可能のやうに思はれる。その學說が可能であつた總ての事は既に果たされたのだと思ふ。——更に尙それは更生の試みを企てられ、不勞所得に對する新たなる武器が見出されるであらうか。將來の事は今豫言する事は出来ないが、只収益の現象中に、其他の經濟現象の間にあつて、この現象が作つてゐたやうな不思議な變則性を見出さないと云ふ事を思へば斯くの如きが現はれるとは殆ど信じられない。經濟科學はその役目に異論は差し挟まないが、併しリカルド及びその一派がこの理論に與へた社會的重要性を奪ひ、引いてはこの理論の革命的豊饒性と呼び得るものゝ大部分を奪つたのである。

### 第三章 社會連帶論者

#### 一、社會連帶論發生の因

社會連帶の語は元、法律用語中にしか用ひられてゐなかつたが(註一)。最近二十年來少なくとも佛蘭西に於ては非常に使用せられるやうになつた。この言葉は單に官僚的演説や總ての社會講演や罷業を沈鎮し、財布の紐を解く爲の總ての激文の終につけられる爲許りでなく、尙ほ道德及び教育學の論文中に於て章の表題として益々用ひられるに至つた。故にそれは佛蘭經濟學史中に於て求められるのである。(註二)

註一、語源的に云へば連帶責任の語は *Solium* の變形である。後者はロオマ法律家の間にあつては債務者の各々が全體の爲に責任を有してゐた時に (*In Solium*) それ等の債權者が負擔する義務を示す爲に用ひられてゐた。この言葉は *solite* の言葉に進化す可きであつて、事實古い制度の佛蘭西法律家、就中 *Pothier* は此語を用ひてゐる。この言葉を *solidarite* の言葉に變へたのは民法の編纂者であつた。



註二、連帶責任の力が求められてゐる文章をこゝで引用する煩には堪えないのであつて、政府當局者の演説乃至は新聞の論文を何れでもこれば十分である。今こゝに見本として二つの例文を掲げる。

當時商務大臣であつた Millerand は一九〇〇年萬國博覽會の開會演説中に次ぎの如く述べてゐる。「科學は人に社會の物質的・精神的偉大性——即ち連帶責任の一語に要約せられるところの秘密を明らかにする。」

民衆大學運動の創始者なる Deherm は次ぎの如く述べてゐる。「我々は殉教者が基督を狂熱的に信じてゐた如く連帶責任を狂熱的に信じなければならぬ。即ち問題は民衆政治の組織である……」(Coopération des Idées 誌一九〇〇年、六月十二日號)

連帶責任の語に依つて表明される觀念、即ち一切の人は同一體の四肢の如く一體を爲すものであると云ふ觀念は新しいものではない。古代に於て周知の寓話作者 Menenius Agrippa に就いては述べないとしても、聖ポオロと Marcus Aurelius とは殆ど同じ用語でそれを表現してゐる。(註)

註「何となれば我々が一つの體に若干の肢體を持ち、その肢體は同一機能を有してゐないと同じく、我々は多數ではあるが基督に於て只一つの體であり、その一人一人は互にその肢體をなしてゐる。」(ローマ書十二篇、四節五節)

「體の肢體がその相互間に有すると同じ結合關係が、別々に離れてはゐるが理聲を備へた生物は同じくその相互間にそれを有してゐるのであつて、彼等は一つの共通なる仕事に協力する爲に作られてゐるのである。」(Marcus Aurelius 七章、十三節)

更に他に一つの連帶責任の様式が存在してゐる。それは死者が生者に對して徳乃至は犯罪を遺傳的に傳へて起る結合で、空間的なるものではなく、時間的なるものである。此様式は古代人の看過する所ではなかつた。思想史が未だ且つて記録したことのない連帶責任の恐るべき例、原罪の教理は説かないとしても Hora eius の詩 Delicta majorum immeritus Iues に想到すれば十分である。

過去に連帶責任が主張されたのは敢て哲學的乃至は教理的状態を以つてのみではなかつた。それは事實に實現され、法律、宗教、習俗に依つて行はれ而も今日行はれてゐるよりは遙かに嚴重なるものであつた。それを覗ふには犯罪法に於いて今日コルシカの氏族復讐 Vendetta にその餘影を止めてゐる家族全員の集團責任を想起すれば十分である。



更に他の連帶責任の様式が存在してゐる。それは社會分業であり、結果として自己の必要を満すために各人をして他人に依據せしむるを必要とするものであるが、是れも既述アダム・スミスの著書中で十分に述べられてゐるよりは遙か以前にギリシヤの著者に依つて摘出されてゐる。

斯くの如く連帶責任は昔時特有なる名稱を有してはゐなかつたが、その重要な相説、生物學、社會學、道德、法律、經濟學的相説の下に知られてゐたが、只その各々相説は孤立的に他との必然的關係もなく現はれてゐたに過ぎない。漸く十九世紀中葉に至つて此多様性の中に一つの單一なる法則を求め始めたのであつて、連帶責任の歴史も非常に昔時に溯れないのである。既に我々が述べたやうにビエル、ルルー、フウリエの後繼者バスタア自身は連帶責任の觀念と言葉に新たなる意味を與へた。オーギュスト・コントはそれを社會學の根柢とした。「新哲學の全體は個々無數に多様な相貌の下で余に對して有する關係を摘出し、斯くて無意識的に總ての時及び總ての場所に擴がつてゐる社會連帶責任の内部的感情を親しみ易く

するにある。」(註)

註・Discours sur l'Esprit positif, Comte はその著 Cours de philosophie に於て彼自身、眞個に重要な、且つ全く近代的概念を幾分自家辯護的でない事もないが、併し正しい賛辭を與へた。

この觀念が一つの學説となり一般の注意を惹くに至つたのは、尙ほ其後若干の年月を俟たねばならなかつた。若し新たな多くの事實が凡ゆる方面に起り、連帶責任論を傳波する爲に現はれて來なかつたら、石の多い道に落ちた寓話の種と同じく、何等の實をも結ばなかつたかも知れない。

之等の事實の中最も強く人の精神を打ち、總ての連帶者に著しい例、誇大の文字の廣告を供給したのは微生物學であつた。世の中に傳染性及び流行性の疾患が存在してゐると云ふ事は何時の世でも知られてゐる事であり、それ等の疾患は常に人を恐怖させてゐたが、併し重大なる疾患、或は殆ど全部の疾患は眼に見えない微菌に依つて人から人へと感染し斯くして自然死に依つて死んだと信じてゐるものゝ大部分は實際にはその同胞に依つて殺されたのであると云ふ事が解つた時非常



な驚愕の念が起つた。それ迄多くの感傷的小説の同情を惹く主人公であつた「胸の悪い者」は毎日一つの町の人口を滅ぼす程致命的な數十億の微菌を吐いてゐるか、英國の王子の一人は子供が猖獗熱に罹かつてゐた自家洋服裁縫師の縫つた着物を着た爲に死んだと云ふ事を聞いて慄え上つた。この病理上の連帶責任は輸送機關の複雑性と速性急に依つて日々に強調されてゐると云ふ事は注目す可き事である。メツカで附着したペストの微菌は行商隊が沙漠を横斷する長い時間の間に容易に死に得るであらうが、併し何時間かをもつて巡禮を運ぶ鐵道をもつてしては同様にはゆかない。徒歩及騎馬に依る昔の旅行者は幾ら時間が少なくても巴里の地下鐵道を通る者よりも微菌を吸収する危険は確實に少なかつたのである。社會學はまさに事實及び理論の寄與を齎らした。社會學は古い「手足と意」と云ふ寓話は現實の正確なる表現であり、一切の社會は最も完全なる意味に於ける「有機體」をなし、その結果同一體の機關間に存在する同じく密接なる連帶責任がそれ等の部分の間に存在してゐると云ふ事を證明し得ると信じた。そしてこの學は

この類視を細心の注意若しくは非常に面白い幻想をもつてその最も細かい解剖學的部分に迄及ぼした。血の循環の機能はその名を變へずには貨幣循環となつた許りでなく、尙ほ榮養は生産となり、再製は殖民と呼ばれ、組織間の脂肪保有の蓄積は資本となるのである。斯くして中世紀フロレンスに於て有閑階級のもものは肥えたる者と呼ばれ、職工階級は瘦せたる者と呼ばれた——また機關の間にも類視が行はれる。動靜脈管は上下複線となつてゐる鐵道網となり、神經纖維は同一なる目的をもつて感覺及び新聞を傳へる電信線となり、腦髓は政府となり、心臟は取引所となるので、勿論最後の二つの機關の間には特に密接なる相互依囑性を有してゐる事も忘れられてゐない。斯くして血液中の白血球でまその複性を社會有機體中に見出さずにはゐないのである。有機體の威嚇されたる部分に直ちに集りそして有害なる微菌を殺すと云ふその微妙なる職が發見されて以來、之等の食菌血球は容易に巡査に擬せられてゐる。(註)

註、この社會生物學說の出發點としては Chaffle 教授の名著 *Bau und Leben des sozialen Körpers* (1875-



1878)及び Chaffie を略奪したものととして批難してある Rod Bertus の作品をも擧げ得る。また Spencer の *Principles of sociology* を参照、アリストテレスは既に欠きの如く述べてある。動物は非常に好く秩序づけられた一都市の如く組織されてあると云ふ事は認む可きである。(De motu animarum) 社會の有機體説を作るにはこの命題を逆にすれば十分である。

この社會的擬視は科學的であると云ふよりも更に多量に獨創的であつて、只一時の流行に過ぎなかつたが(註)併し、そこからは若干の證明が十分に判明したものととして、且つ連帶責任論者に依つてその學說の基調をなすものとして残されてゐる。即ち

(a) 同一體の總ての部分の相互依屬性を意味する連帶責任は生活の特質である。連帶責任は獨立的なる部分の單なる相互集合體に過ぎない。無機體には存在してゐない。死とは生きてゐる間その生物の各部分を結合する不思議な連鎖の崩壊でその生物を屍體の状態に陥らせ、即ち各要素は互に無關心となつて自然の命する新たなる結果に急ぐ爲に各々自己の方向に走るのである。

(b) 連帶責任は生物學的階梯中に於て生物がその水準を上げば上る程完全に  
なり、強烈となつてくる。雌雄同體の生物は何等單なる集合體と異つてゐない。それは二つに切り、若しくは切り取つてもそれは少しも苦しまず、各片は獨立の生活を営み、切り取られた部分は元の通りになるのである。時として之等の生物は、生産し、若しくは若返る目的の爲に自己分裂と稱するこの操作を行ふのである。高等動物にあつては反對に何等かの機關を取り去ると云ふ事はその有機體全體の死を招き、でなければ少なくとも總ての他の部分の生活に重大なる障礙を與へる。

(c) 連帶責任は各部分の差別化に比例する。各部分が類似的であつた時、その各々の部分は自給自足して行けるが、それ等の部分が類似的でない時、その各々は互に相補ひ、その結果獨立的に動く事も生活する事も出来ない。

註、併し乍らそれは尙ほその後繼者を有してゐる。ソルラス *Organism societies* 及び Lilleouferd

*Parasitic Societe* を参照、併しハーバート・スペンサーは之れを傳波した後棄てた。Auguste Conte は社

會學の父ではあるが豫め彼が不合理であるを宣言したこの方法に社會學者を用心させてゐる。



且つ野蠻社會に於て全體から個人が距立すると云ふ事は、例へばボイコットと云ふやうな新たなる形態の波紋が、文化社會の所屬員に加へられると同じやうな敵意は加へられなかつたと云ふ事を忘れなかつた。

經濟學は分業と云ふ遙か以前から知られてゐた偉大なる事實の傍に人の間に尙ほ多くの相互依囑性を摘出した。例へば、ニュウヨークに於ける破綻、若しくは印度に於ける米の不作はロンドン乃至はパリに於ける銀行を破産させ、金剛石工業若しくは自動車工業の職工をして失業せしめるに十分であると云ふ事を示す恐慌——またはそれ程でないとしても電氣工組合長一舉一動は一つの町全體を闇に沈めるに十分である。數年來有閑階級に對する畏怖物となつてゐる總同盟罷業は明らかにその畏怖される原因が連帶責任の觀念から來てゐる。何となれば總同盟罷業の意味するところは單に十分な數の職工が手を組んだ時、忽ち社會全體は降服し滅びると云ふにあるに過ぎない。

更に附言す可きは新聞及び電信通信業の偉大なる發達であつてそれは日々に且つ時々、昔なら世界の極く小さな一劃をより動かし得なかつたやうな事件の起る毎に(註)總ての國の人をして同じ悲喜の感情を動かさしむるのである。——且つその上尙ほ交靈術、感應術中に混沌と現はれてゐる人と人との間の不思議な交渉も存在してゐる。斯くして凡ゆる方面に於て日常生活の茶飯事から乃至は神秘學の混沌たる世界から事實と思想は「個體は全體の爲に全體は個體の爲に」と云ふ言葉が單なる箴言ではなく現實であり、且つ他人の幸福をば我々自身の幸不幸に影響を有し、正しく人に云はれてゐるやうに自己自身は社會的所産であると總て證しやうとして無數に現はれて來た。連帶責任論の偉大なる潮流が作られたのは總ての方面から流れて來た之等の支流からである。

註、(地球上の蒸氣に運送及び電信線の偉大なる發達は近代工業組織を化して一種の偉大なる章魚のやうにした。その如何なる部分もその體全體に影響を及ぼさずには傷けられ得ないものとした。この偉大なる動物はその何れかの部分に傷を受けるや否や忽ち斷末魔の痙攣に陥るのである。ニコルソン *Effect of machinery on races*)

それ丈で全部ではない。この社會連帶の觀念は凡ゆる部分に起つたやうに思は



れる許りでなく、尙ほそれは個人主義的自由主義を望まず、而も集産主義乃至は國家主義に嫌厭たるものに満足を與へるべく丁度好い時機に來たやうである。

就中、佛蘭西に於ては成立の道程にあり、旗幟を求めてゐた政治的黨派が存在してゐた。この黨派はその經濟的綱領として古い自由黨派と社會主義との間にその道を開き得るものを望んでゐた。即ちそれは放任主義を厭ふと同時に個人所有權の社會化をも厭ひ、——個人權利、即ち人權を示し、支持し、主張し同時に全體の利益の爲に個人に若干の犠牲を課するものを欲してゐたのである。此黨派は當時急進黨と呼ばれ、今日急進社會黨と呼ばれてゐるものである。云ふ迄もなくこの時期に於いて述べられてゐたやうな獨逸社會主義の綱領は殆どそれに類するものであつたが、その國家の歴史的役目に關する概念は階級及び黨派の利益を超越してゐたので、プロシヤのやうな國に於ては容易に理解されたとしても佛蘭西人には遙かに理解困難なものであり、同情を惹かないものであつた。この兩國に於ける歴史はこの點に就いて同じ教へを與へなかつた。故に若し社會連帶論が獨

逸國家社會主義に類してゐるとしても、それはフランス風に装はれ且つ必然的には國家の強制干渉を含まず、且つ個人自由を更に尊敬してゐるやうに見えるので更に好感をもつて迎へられ得るのである。

社會連帶論の言葉は民衆政治に他の寄與をなしてゐる。それは今日宗教的の意味の爲に用ひられてゐない他の言葉「慈善」を用ひなくても濟むやうにした。一八四八年の革命以來それと代つて來た友愛の語は幾分陳腐な感傷に墮してゐるやうに思はれた。社會連帶の語は反對に威嚴のある科學的風貌を有し、觀念論の外見を有してゐない。將來、他人の爲に求められる總ての犠牲、相互救濟教會への寄附、職工組合、安價宿泊所等への寄附、職工の爲の退職手當、乃至は貧乏人に對する施與さへ慈善の名に依つて求められず連帶責任の名に依つて求められ、且つ凡ゆる機會に於て「我々は慈善をなしに來たのではなく、社會連帶責任を果しに來たのである。慈善は人を墮落せしめるが、連帶責任は人を向上せしむる」と云ふこの言葉が反復せられるのを聞くであらう。



## 二、連帶論者の論文

併し、連帶論を萬人に理解せられる學說となし、一般教育の綱要となす爲には更に明確性を與へる必要があつた。元の儘では凡ゆる方向から來る支流を含み、その流には濁水を含んでゐたので、先づそれを淨化する必要があつた。(註)

註、一八九〇年、マリオン、*La solidarité morale* と云ふ一冊の本が出たがそれは全然心理的見地から記されてゐた。

社會連帶論が新たな經濟學の基調として述べられたのは誤りのない限り一八八九年をその最初とし、それは新學派なる題名の下にデュネブに於てなされた講演の中であつた。それは一八九〇年 *Mi-atre écoles d'Economie Sociale* と云ふ小冊子に收められてゐる。その中でフレデリック、パッシーは自由學派、シアネーはカトリック學派、スチーグラールは社會主義派、グールドは新學派を論じてゐる。後者はその講演に於いて先づ前三者が、益々自由、權力、平等を基調とするものであることを定義し、次いでそれ等に對立するものとして新學派の學說を次の言葉の中で示してゐる。若し諸君が既に述べた三者の如くこの新たな學派を一言にして定義せよと求められるなら、私はそれが社會連帶の學派であること主張する。……社會連帶は自由、平等、友愛の如く明快なる音の言葉、或は純粹なる理想文ではない。それ

は事實であり、而も科學及び歴史に依つて最もよく證明された事實であつて、その發見は現代の最も偉大なる事蹟である。社會連帶のこの事實は日々に強調されつゝ、あるものである。事實を云へば、それは寧ろ一學派と云ふよりも一つの新たな運動である。その故は非常、異つた、また反對な多くの學派、例へば生物學的自然論派は基督教派と同じく、無政府主義派は國家社會主義派と同じく、この時以來社會連帶に依據してゐるのである。

一八九六年、Leon Bourgeoisの著書が現はれ、明らかに一時期を劃した。彼に就いては次に述べる。

その時以來佛蘭西に於ては社會連帶論に關する多くの文献或ひは著書として現はれた——最初現はれたのは新教社會學派の Charles Cocherin, Charles Bo's, Reoelin の著書であつた。尙ほアイヒターの *La solidarité sociale et ses nouvelles formes* (一九〇三年) 道德政治科學學院に於ける長い圖論(一九〇三年度報告書) プーゲーエーの *Le solidarisme* (1907) 及び Eleurent の *La solidarité* (1907) を引用して置く。今日では學校用の道德教課書の中にこの問題に關する若干章を含んでゐないものは一つもない。

社會連帶論と云ふ幾分茫漠たる哲學的觀念を法律用語、即ち純契約の語に壓縮してその淨化を試みたのは急進社會黨の一人レオン・ブルジョアの効蹟である。著者の高い地位の爲と其出版が機宜に適してゐたので、此論文は大學關係者、多くの小學教師、及び十萬の小學校、民主的聯盟及び新聞の間に偉大なる反響を齎



らした。それは長い間曉翹されてゐた非宗教的道德がそこに見出されると信じられたからであつた。それ故我々はその説明に充當す可きこの小さな本の大きさの割合以上に更に微細に亘つて分析を加へる必要がある(註)それが如何なるものであるかは次ぎに掲げる。

註、連帶責任に關するレオン・ブルジョアの研究は最初一八九六年 *La nouvelle revue* に論文の形をもつて現はれ、一八九七年本の形をもつて現はれた。連帶論はその凡ゆる方面に亘り、レオン・ブルジョア自身の司會の下に *l'école des hautes études sociales* に於て若干の著者に依つてなされた一群の講演に依つて説明されてゐる。それは後集められて *Essai d'une philosophie de la solidarité* (1901)の題名の下に本となつて現はれた。第二の講演集は一九〇四年 *Application sociale de la solidarité*の題名の下に發表せられた——この學說の宣傳の爲に一つの組合が *Société d'éducation sociale* の名の下に一八九五年に設けられた。これは一九〇〇年の萬國博覽會の時國際的會合さへ催されたのであつたが、その時以來生死の程も不明である。

先づ考ふ可きはこの理論が決して自然的連帶を道德的或は社會的方面に延長し若しくは移したのではないと云ふ事である。反對にそれはこの自然連帶責任を強調し、修正する爲の一努力である。この理論はその出發點として自然連帶責任

は或るものに對して不當なる利益を均霑させ、他のものを同じく不當に不利をもつて苦しめてゐるので不正であり若しくは少くとも無正であると云ふ事實をとつてゐる。故に正義は連帶責任の運命に利益を有してゐるものが何等の原因もなく苦しんでゐるものに對して償ふ爲に關與しなければならぬ。正義はその盲目の妹に運命が或るものに對して過分に與へたところのものをとつてその權利を有するものに返す可きである。只人は自ら戰つてゐる自然自身を自己の目的に利用する事を知つてゐると同じく、正義が生連帶責任を修正する爲に利用するのは反省した連帶責任に外ならず、且つその擴大及び一種の更生を負ふつてゐるのは同じくそれに依つてである。(註)

註、連帶責任は事實に於て存在してゐるが併しその結果正理と一致してゐない。正理を實現する爲には人は連帶責任の法則を觀察す可きである。それを明らかにした後彼は正理に一致するやうにその結果を修正する爲にそれを用ふ可きである。事實連帶責任と當爲連帶責任とは決して混同する可きものではない。それは反對のものである。併し後者の道德的必要を認識する爲には前者を明らかにすると云ふ事は必要缺く可らざるものである。(ブルジョア *Philosophie de la solidarité* p. 13, 14.)



自然連帶責任が我々に教ふところは次ぎのやうなものである。分業、遺傳、其他我々が述べて來たやうな多くの原因の結果、各人はその先行者若しくは同時代者にその有する最も好き部分、及び彼が現在あるところの最も好き部分さへ負ふてゐるのである。アウギユスト・コントが云つてゐる様に「我々は社會に對する凡ゆる種類の義務を負ふて生れて來るのである。佛蘭西憲法の條文中、この負擔と云ふ言葉が見出されるものは多數にある。一七九三年の憲法に於てさへ扶助の義務に適用されたる神聖なる負擔の言葉は現はれてゐる。併しこの言葉は道徳的責任、義務に就いての幾分漠然たる意味にとられ、時として「崇高なる心懸けの爲に何々しなければならぬとか」或ひは「富の爲に何々しなければならぬ」とか云ふやうな意味に用ひられたのである——そして出來る丈それを果す心懸けは各々の良心に委されてゐた。然るに今、それを更に重大に取り扱ひ、この義務の言葉を負擔に代へて法律的力を附與し、そしてそれが自發的に果たされなかつた場合には法律的制裁を與ふるにある。然しそれを如何に法律中に挿入す可きであるか。——その爲には準契約の題命を有する章をなし契約なく成立する約束を表題として有する第四篇の一部をなす一三七一——一三八一條の法典を開けば十分である。

この章の法律は事實契約なく即ち當事者の意志を俟たずに發生する嚴密な意味に於る負擔の存在を認めてゐる。先づ無意識的にしろ、他人に與へた一切の損害から發生し、經濟と呼べるゝものがある。また同じく法典に依つて列次せられ、準契約の表題の下に分類されてゐる種々なる場合から發生するものがある。例へば私が受け取る可きでない或る金額の支拂ひを受け、或は委任を受けずに他人の仕事を行つた場合等さうである。他に尙その例は存在してゐる。相續が相續人に對し、債務支拂の義務を附隨する時の相續の承認、單なる隣接の事實に依つて各人間に存在し得る、例へば同一家屋の住居人、或ひは接續地域の土地所有人、或ひはその地位のある類似性に依つて、例へば共同後見人、或は共同相續人間に存在し得、且つ之等の場合には或る責任を發生し得る非意慾的結合がある。



レオン・ブルジョアの問題は準契約の一切の特質的條件は人類社會に見出され  
ると云ふにあつて、それを發生させるのは事實の連帶責任、自然的連帶社會連帶  
に外ならない。——事實上及び隣接の結合は常に、且つ頻繁に分業に他人の爲の  
處理を行はせる。——不當に徴收せられたる價値の獲得に依つて「不勞所得」に依  
つて他人を踏み臺として富裕となり、及び特に相續に依る繼承から生れる富裕は  
どれ丈不平等の發生者であるか。——また絶えず他人に加へられ準犯罪を爲す多  
くの損害を忘れてはならない。斯くしてこの立脚地の下に觀察された社會は全體  
としてルソーが想像したやうに、原始的な熟考的な契約ではないがその當事者の  
意識的加入を含まないにも不拘らずさうであつた同じ結果を有す可き準契約の結  
果として現はれてくるのである。

更に一步を進める。若しも人と人との間には一つの債務關係があるとすればそ  
れは總ての債務の如く支拂はねはならないのである。

併し誰に依つてそれは支拂はれるか——自然連帶責任の事實から利益を受けて

ある總ての人に依つて、及びその財産が過去及び現在に亘り、名も無い多くの協力  
を俟たねば作られ得ないやうな財産を有してゐる總ての者に依つて、斯くの如き  
ものは總て自己の所得分より以上のものを手にしてゐるのであつて借越勘定を有  
してゐるのである。故に彼等は支拂はねばならぬ。そして彼等がそれを自發的に  
なした時でも、彼は今月迄云はれてゐるやうに寛大なる行爲をなしたと信じては  
ならない。また彼は自己を親切であつた爲に支拂つた聖書の好き金持ちと比較し  
てはならない。彼等は單に自己の負ふてゐるところのものを拂つたに過ぎない。  
(註一) 一切の債務者と同じく彼等はその支拂ひを完了した後でなければその財産  
の自由處理を得、且つ債務を果したものとしてみても考へられ得ないのである。そし  
て其時——而も漸くその結果財産所有者は云ひ得るのである。自分の財産は誰に  
も負擔はない。それは私のものである。斯くしてこの學說に於て個人所有權は尊  
敬せられ自由であるが、併しそれはその社會的債務を果たして後にである。彼等  
のその總計の限度迄それは全く抵當付きである。(註二)